
Mystic world ~ 真実への歩み ~

ロンロンの弟子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Mystic world〜真実への歩み〜

【Nコード】

N9267M

【作者名】

ロンロンの弟子

【あらすじ】

泰人が消え、希望がなくなっただと思っていたがまだ残っていた。そして意外な真実が……。

Mystic worldの続編です。

1・偽りの始まり（前書き）

本当にお待たせしました。そしてお久しぶりです。ロンロンの弟子です。今まで忙しく投稿できませんでした。とりあえず今は時間ができたので。これからの投稿は不定期になります。後、別作品ですが書いてはいますが投稿するかは迷っています。内容が内容ですから。

今回もかなり妄想を含んでいます。そういうものでもいいという方はどうぞ！

1・偽りの始まり

ここは謎の空間。泰人は気がつくところここにいた。

「ここは一体どこなんだ？・・・何があつたんだっけ？」

周りは何も見えず、何も感じられない。そこにいてそこにいないよ
うな感覚に泰人は戸惑っていたが

「・・・どうやらここは闇の空間。私たちはここに閉じ込められて
しまったようです。」

泰人の腰につけていたメジャー、ラルゴがそう話す。メジャーには
妖精のフィルディアの魂が宿っている。

「そう・・・でしたね。俺は・・・誰も救えなかった。」

泰人はくやしそうにそう呟いた。妹たちを救えなかったのがかなり
響いているようだ。

「元気を出して下さい。まだ終わったわけではありませんよ。とに
かく出口を探しましょう。」

それを聞き、泰人は正気に戻る。そう、悲しいのは自分だけではな
い。娘を失ってフィルディアも悲しいのだ。それなのに泰人のこと
を励まそうとしている。これではいけない。

「そうですね。とにかく前に進みましょう。」

気分を改めて、まだ見えない闇の中を泰人は歩き始めた。

とにかく前に前にひたすら進み続けた。しかしどんなに進んでも、時間がかかっても結局周りは何も変わらない。見渡す限り闇が続くだけだった。

「・・・だったらこれでいく。スネイラー！」

泰人はメジャーを掲げた。するとメジャーが消えて、目の前に巨大な蝸牛が出現した。

「いっけー、ラルゴ・ブラスター!!」

そう叫ぶと、巨大な水の塊が発射された・・・が

「・・・何!?!」

それはすぐに消えた。いや、目の前の何者かが消したのだ。そう、前に誰がいる。

「さて、いくか。」

その声が聞こえたと思うと、周りが急に明るくなる。

・・・その誰かを見た瞬間、

「・・・・・・・・くづ。」

ぱたつと音がして泰人は倒れてしまった。

「・・・・・・・・え!?!」

いきなりの事でフィルディアもつい声をあげた。

誰かが近づいてくる。サラリーマン風の男だ。顔はよく見えない。

「いきなりですみません。こいつは今意識を失っていますが、後に目を覚ますので安心してください。」

男は優しくフィルディア、つまりラルゴに話しかける。

「あなたは一体・・・誰なのですか？」

「それには答えられません。大事な点のみを説明します。」

男は一息つき

「あなたには闇の精霊の手助けをしていただきます。」

そう告げた。

この世は大きく分けて3つで構成される。

裏表のある世界。

それとは別の魔法の世界。

しかし魔法の世界は不安定。

光と闇、真の正義とは何なのか。

裏表の世界は正義は光と決めつける。

魔法世界もそれは同じ。

しかし真実とは常に闇の中。

そう闇の中。

場所は変わり、別世界。

泰人達がいた世界ともディオールとも違う第3の世界。

その世界は泰人達の世界とよく似ているが違う。そう、まるでコイ
ンの裏の世界だ。

そんな世界の町中を莉麻・・・いや、闇の精霊は歩いていた。

「ふむ、ここはあの世界とよく似ているな。もう少し散策してみよう。」

莉麻はそう呟き、路地裏の方を中心に歩いていた。すると

「・・・なんか大きな屋敷のようだな。」

その言葉通りの大きなお屋敷の前に着いた。大きな庭や池、綺麗な花も植えてあり、いかにも豪邸のような作りである。

「・・・だが、ここは違うようだ。では次に・・・。」

莉麻がその場を立ち去ろうとした時、

「・・・ちよつといいですか？」

屋敷の門の前に一人の女の子が立っていた。背が高く髪が肩くらいまで伸びた大人っぽい少女でどこかの学校の制服を着ている。

（な、何！？俺が気付かなかつただと・・・。）

「急にごめんなさい。でも私の家の前にいるから何かになって思っ
て・・・。」

どうやらこの屋敷に住んでいるようだ。ということはお嬢様だろう。

（うーむ、この娘が何かの能力を持っているのか。まあそれは置いておくにしろ、これは居場所を作るチャンスだな。）

「・・・実は、私何も覚えていないんです。気が付いたら町中でここまで歩いて来たんです。」

莉麻はこの少女を利用するために芝居をすることにした。

「・・・なるほど、それは大変でしたね。なら私の家にあがってください。力になれると思います。」

その言葉に莉麻は頷き、二人はお屋敷の中に入っていった。

お屋敷の中はとても広かった。2階と屋根裏部屋があり、部屋数が客室だけでも20部屋以上ある。

とりあえずその客室のうち一つを借り、莉麻と少女は話をしていた。

「まずは自己紹介をしますね。私は水本雪美^{みずもとゆきみ}です。お父さんが社長をしてましてその娘です。高校1年生の15歳です。」

かなり丁寧に挨拶をした。

「私は、莉麻。14歳。それ以外は覚えていません。」

とりあえず必要最低限の事のみ覚えているふりをした。

「そうですね。とりあえず記憶が戻るまではここにいてもいいです

よ。父はほとんど帰ってきてませんし母とメイドが3人、後姉がいま
すが今は別の場所で暮らしています。特に問題ないです。」

「つーか、女だらけだな。まあ、あの場所を探すまでは厄介になる
か。」

「何から何までありがとうございます。」

お世話になることにしたらしい。

「それでは夕食もそろそろなので私は一度自室に戻ります。メイド
が部屋まで知らせに来ると思うのでそれまでは自由にしていってくだ
さい。着替えはこれを使ってくださいね。では。」

着替え一式を渡して、雪美は部屋を後にした。

「ふむ、まずは着替えようか。」

着替え始めた。どうやらサイズはピッタリのようだ。

「よくこの体に合うサイズの服があったな。……これくらいの豪
邸なら当然……なのか。」

着替え終わって持ってきた荷物を確認する。

「ていうかカバンの中にエプロンのみか。そっぴや服や下着は家の
中に置いてきたな。……やっちまったぜ。」

かわいく言ってみる。……興奮してきた。

「・・・まあ、この屋敷内を調べてみよう。」

気を取り直し、目を閉じて屋敷内の気配を感じ取る。

・・・・・・・・・・。

「どうやら特になんもないようだ。じゃあゆっくりするか。」

とりあえず莉麻はメイドが来るまでゆっくりしていた。

その後夕食を取り、部屋に戻ってきた。

「久しぶりにいい物食ったな。さて少し休んで風呂に行くか。」

トントン

部屋を叩く音がして雪美が入ってきた。

「ねえ、莉麻ちゃん。良かったら一緒にお風呂入らない？なんだか妹ができたみたいで嬉しくって。」

誘いがきた。

「喜んで。」

早かった。

という訳で二人は別館の温泉に移動した。

続く

1・偽りの始まり（後書き）

いかがでしたか？次は出来るだけ早く上げたいです。それではまた次回お会いしましょう。

2・決意の旅立ち(前書き)

すみません。早くすると言いながら投稿が1カ月も遅れました。なんとかこれからは出来るだけ早く投稿します。それではどうぞ！

2・決意の旅立ち

場所は移りフレムリー。

沙汰とスィングは少し落ち着いたようだ。

「とりあえずティルスが心配だ。俺は宿に行くが水の芸術家はどうする?」

「俺たちも行くよ。ここまで来たら付き合っよ。」

二人は宿に向かった。

宿に着くとティルスとティライズが椅子に座って休んでいた。

「来たか、ティルスはもう大丈夫のようだ。」

「ご心配おかけしました。・・・何かあったようですね。説明をお願いします。」

沙汰はさっきあったことをすべて説明した。

「・・・僕がお二人を危険に巻き込んだ。なんということを・・・。」

「・・・俺に考えがある。」

沙汰が言うつと3人は彼を見る。

「敵がティルスの転移能力をコピーしたなら、ティルスも同じことが……。」

「面倒なことにそれは無理ですね。」

部屋の扉が開き、朱雀が入ってくる。

「あなたは……。」

「初めての者もいますか。朱雀です。では本人から説明してもらいましょう。」

朱雀は入ってきてすぐにそう言つと全員ティルスを見る。

「……はい、僕は今能力を失っています。どうやらコピーではなく奪われたようです。」

朱雀を除いた全員が驚く。

「その通り。では自分のすべきことも分かりますか？」

「恐らく試練をすべて超えた先にあるのでは？」

ティルスが即答する。

「そこまで分かっているのなら面倒ではないですね。それでは……！」

そう言つと部屋から出ていった。

「つまりあの二人を助けるためにも残りの試練を超える必要がある訳か。」

テイライズがそう言つとティルスが頷く。

「でもなんでそうだと思つたんだ？そんな確証はないのに。」

沙汰が言う。

「僕にも分かりません。でもなぜかそんな気がしたんです。」

「そうか、まあいいさ。じゃあ次の所行く前に確認するか。」

沙汰はそう言つて全員を見る。

「ティルスには俺と水の芸術家がついていく。テイライズは一度ウインディームに戻つてフィドウと合流して伝えてほしことがある。」

沙汰はテイライズに耳打ちする。

「分かった。どっちにしろ一度ゴルデルに戻るつもりだったからな。」

「よし、じゃあ今日は一泊して次の日にも行こうか。」

という訳でその日は全員宿に泊まった。

場所は移り神殿内。

「・・・みんな助ける。」

ミアはそう言って神殿を出ていった。

次の日、4人は宿屋を出た。

「では私は列車でウィンディームに戻る。後は頼んだぞ。」

テイライズはそう言って列車乗り場へと向かって行った。

「僕達も行きましょう。行き先はまずはここから少し行ったところにある青い森です。草木がすべて青いことからそう呼ばれています。」

「よし、じゃあカイチョーを呼ぶぜ。」

沙汰がパソコンを取り出すと

「……待つて。」

いつの間にか目の前にミュアがいた。

「……どちらさん？」

沙汰は驚く。いきなり目の前に現れたのだ。そりゃ驚きます。

「……私、ミュア。助けたいの。」

「いや、いきなり言われても……。」

そこにテイルスが入る。

「目的が同じだから協力しようということですか？」

それにミュアは頷く。

「……なんだか分からないが訳ありのようだし俺はいいぜ。」

「沙汰君が言うなら俺っちも。」

特に怪しがることもなく二人が承諾する。

「……ありがとう。」

ミュアが頭を礼を言う。

「では行きましょう。沙汰さん、お願いします。」

「残念だがカイチヨーは3人乗りなんだ。歩いていくしかないな。」

全員が落胆するがすぐに気を取り直す。

「じゃあ行きましょうか。」

3人頷くとフレムリーを出て次の場所へと向かって行った。

「理由も聞かずに同行許可とは。面倒なことにならないといいですね。」

4人が行くのを町の死角から見ていた朱雀はそう言った。

2・決意の旅立ち（後書き）

少し短かったですね。次こそはもう少し早くできるように頑張ります。それでは次回にまたお会いしましょう。

3・目覚めた少女達（前書き）

こんにちは。ロンロンの弟子です。次が早くにできたので投稿します。ではぶっぞー！

3・目覚めた少女達

場所は別世界に移る。

莉麻と雪美は別館の着衣室まで来た。

「では脱ぎましょうか。」

「はい！」

二人は着ている服をすべて脱ぐ。

「（温泉なんて何十年ぶりだろうか。しかも女性と入浴とはな。）」
うふふふふふと莉麻は笑っている。

「楽しそうでしたわ。では入りましょう。」

「はい！」

二人は温泉に入った。

「いいお湯ね。」

「はい~~~~~!!」

二人は仲良く隣で入っている。勿論タオルで隠していないぞ、うん。

「……そろそろ観察を始めようか。」

莉麻はそう思い雪美をじっくりと見る。

「（なかなかの美人だな。胸も大きいし、明らかにこの身体よりも発育がいいな。……だが、普通の少女に見えるぞ。何か能力があるはずだが……。）」

更にじっくり見る。しかし何も発見できなかった。

「どうしましたか？私、何か変ですか？」

どうやら視線に気付いた雪美が反応する。じろじろじろ見れば当然気付くだろう。

「え？……いや、綺麗だなあっと思って。」

とりあえず適当に感想を述べてみる。

「そう？なんか恥ずかしいけどありがとう。」

上手く誤魔化した。

「じゃあ身体洗いましょうか。」

二人は一度お湯から出て身体を洗いはじめた。

「（うむ、見て分からないなら実際に触ってみるか。」

そう考えた莉麻はそつと雪美の肌を触ってみた。

すると

「なっ!？」

急に気分が悪くなり……

ばたんと倒れてしまった。

「……え、大丈夫？莉麻ちゃん!!」

悪い夢を見ていた。

いや、これは現実だ。

そして私という存在のせいで

兄は大切なものを失った。

私のせいで。

分かっていた。

自分がいなくなれば

兄は救われると。

でもできなかった。

私は
私は
ずっとお兄ちゃんのそばにいたいから。

「はっ!？」

莉麻が目を覚ました。どうやら気絶していたようだ。

「ここは？」

周りを見る。莉麻が雪美から借りた部屋だ。

「私、どうしてこんな所に？確か家にいたはずなのに……。」
どうやら元に戻ったようだ。そしてある事実気づく。

莉麻の左肩にはサミーがいて気持ちよさそうに眠っている。右手には紫色の水晶が握られている。

「今どういう状況なの？」

するとトントんとドアを叩く音がして

「莉麻ちゃん入るわね。」

雪美が入ってきた。

「大丈夫？いきなり倒れたから心配したのよ。」

「えっと、・・・大丈夫です。」

雪美のことももちろん知らない。とりあえず適当に合わせることにした。

「そう？ならいいけど、ただでさえ記憶が曖昧なのだから無理しないでね。それでは、おやすみなさい。」

「あ、はい。おやすみなさい。」

雪美は挨拶をして部屋を後にした。

「さて、まずは状況確認のためにサミーちゃんを起こそっか。」

とりあえずサミーを起こすことにした。

「サミーちゃん、起きて。」

「うみゆ、朝？」

起きた。そして莉麻の方を向く。

「あ、知らない人間のお姉さんだ。それになんだか分からないけどおもしろーい！！」

部屋の中を意味もなくぐるぐると飛び始めた。

「・・・私の知っているサミーちゃんと違うよ。」

「当たり前だ。あの時は俺がいたからな。」

「え？」

水晶から声がした。驚いたがとりあえずテーブルの上に置く。

「あなたは誰なの？」

「それも含めて今説明する。」

水晶は話し始めた。とりあえず深い所は教えず聞こえがいいように。

「俺はお前とそこの嬢ちゃんから光を取り除いた。その為には一度肉体を借りた。用があつて今ここにいる。まあ、やり方は強引だったかも知れんが反省はしていない。」

何とも無責任な話だ。

「そっか。・・・ありがとう。」

莉麻はお礼を言う。

「意味不明だ。文句の一つでも言うはずだろう。」

「うん、勝手な行動されたのは嫌だけど、命を助けてくれたみたいだからもういいよ。」

莉麻はにっこりと笑う。

「それで、あの女性は誰なの？ここはどこ？」

「分かった。話す。」

ここに来た時の事をすべて話した。

「なるほど。じゃああなたの用事がすむまで記憶喪失のふりをしてここにいればいいのね。確かに事情を話すよりはいいと思うよ。」

「ああ。それでだがあの雪美とかいう女、あれは正体不明だ。能力者なのは間違いないがそんな雰囲気は一切しなかった。更に俺達を分離させるとはな・・・ん？」

水晶が周りを見渡す。この部屋には莉麻、水晶、のんきに飛んでいるサミーしかない。それにこの部屋から光の力が感じられない。

「・・・しまった!？」

「ど、どうしたの？」

いきなり大きな声をあげたので莉麻は驚いた。

「もう一人いたんだ、俺が飲み込んだ最も危険な存在が。サミー、合体だ。俺に触れる。」

「はっい!」

なんともしまらない声をだしてサミーが水晶に触る。

するとサミーが水晶を吸収し、一つになった。

「俺は行く。お前はここでおとなしくしている。」

そう言ってサミーは壁をすり抜けて部屋を出ていった。

「色々大変ね。」

他人事ではない。

場所は温泉に移る。

一人の少女が全裸で光っていた。

「ようやく解放されたわ。それに力もほとんど戻った。もう莉麻は用済みね。」

そこに一人のメイドさんがやってきた。どうやら掃除をしに来たようだ。

「誰ですか！？ここは水本家所有の温泉ですよ。」

「・・・メイドさんね。ちょうどいいわ。こつこつ所にあった恰好の方がいいもの。」

そつという少女は更に光を増した。

「な、何な・・・。」

言葉の途中でメイドさんは光に包まれた。

「よし着いた。」

サミーは別館に着き早速温泉に入った。

しかしそこには掃除をしている一人のメイドさんしかいなかった。

「あの人からは気配が・・・ないか。逃げられたか。ぐっ。」

そつと言ってサミーは温泉を後にした。

「うふふ、どうやら一時的に力を封印して正解みたいね。」

急にメイドさんが話し始める。

「この人はつと・・・美納^{みのしたそのみ}下園実22歳、彼氏なし。・・・なるほど。」

どうでもいい情報まで読んでいる。

「さて、これから楽しくなるわね。見てなさい。今度はあんたを驚かせてやるわ。うふふふふふふ。」

一人温泉でメイドさんの美納下は不気味に笑っていた。

続く

3 ・目覚めた少女達（後書き）

次ですが、さすがにすぐには無理になりそうです。ですが必ずあげますので待っていただければ嬉しいです。ではまた次回お会いしましょう！

4・動く者達（前書き）

またしばらく時間をあけて申し訳ありません。やっとできました。忙しかったので次の話も出来ていません。しかしとりあえず頑張っています。ではどうぞー！！

4・動く者達

沙汰達はフレムリーを出て草原をしばらく歩いていた。

「結構歩いたな。あとどれくらいで着くんだ？」

沙汰はティルスに聞いてみる。

「……そうですね。もう少しだと思っんですが……。」

「……あれかな？」

ミアアが指さした先は緑の木々が生えた森が見えた。

「いや、あれは違うよね。」

「まあ、青い森が青森県っていうおちじやなければな。でも、あそこで合っているんじゃないか？行ってみるか。」

沙汰がそう言うと4人はその森に向かった。

着いた。やはり緑の木々が生い茂った普通の森に見える。

「さて、多分ここだと思っただが……。」

沙汰はミニパソを取り出すと何かを調べ始める。

「……しばらくして、ミニパソを閉じる。」

「水の芸術家、この辺の木々の水分を調節して多めにやってくれ。」

「……分かった。」

スイングはよく理解していないようだったが、とりあえず地面に手を当てて目を閉じる。

「……すると、緑色だった木々が少しずつ青く変わっていく。」

「おお、よく分かりましたね。」

「ん、さっき調べただけさ。大雨の日だけ青い森が出現するって話だったからもしかして思っただけな。さてと……。」

沙汰は辺りを見回す。すると少し先にある木が一本謎の青い光を放

っている。

「あれだな。行くか。」

4人はその木を目指して歩いて行った。

「ふむ、ここにいましたか。」

そんな光景をシュパルツは上空から見ていた。

「ラルゴの少年と能力を失った彼はもう終わり、早速……。」

そこで一人の少女、ミュアが目にはいる。

「……なるほど、こういうことなら最後の試練が終わるまで見届けてあげましょうか。」

シュパルツはそう言うと、しばらくその森を見ていた。

「それにここに来たということは彼もまだ諦めていないようですね。」

「ティルス、ちょっと聞いていいか？」

歩いている途中、沙汰が声をかける。

「はい、何ですか？」

「とりあえず、試練は3つ終えて一つはなんか変な兄さんにつけられた指輪だっけか、で継続中だ。つまり行くところは後一つだ。そんでさっき調べたんだが、その場所はここじゃなくて違う所にあるらしい。どうしてここに来たんだ？」

そう言われてティルスはあっと思いだすような表情をして

「すみません、言い忘れていました。実はこの指輪について調べに来たんです。」

ティルスは自分につけられた赤い宝石のついた指輪を指さして言う。

「この森のどこかにとある民族の住んでいる村があるんです。そしてその村には何でも知っている物知りな学者さんがいるみたいなので少しお話を聞きに行こうと思ひまして。」

沙汰とスィングはなるほどと頷く。ミュアは聞いているのかどうなのか分からないがぼーっとしていた。

「あ、着きましたね。」

ティルスのセリフに3人は光っている木が視界に入った。その木は一か所ぽっかりと穴が開いてあった。どうやらこの光のせいで開いたものらしい。

「さて、ここから入っていくみたいだな。じゃあ俺から行かせてもらうよ。」

沙汰はそう言って穴に飛び込んだ。

「……ん。」

次にミュアが

「では行かせてもらいますね。」

ティルスが

「最後は俺っちか。」

こうして全員穴に入っていった。すると青い森は一気に元の緑色の森へと戻っていった。

「……あの、それってどういう意味ですか？」

場所は不思議な空間へ。フィルディアは男にそう返す。

「詳しいことは話せないんですが、これには深い訳があるんです。貴方の娘を、世界を救うためには貴女の力が必要なんですよ。」

男はそう言つて、泰人に手をかざす。すると泰人から緑色の光る球が出てくる。

「よし、お次はつと……。」

それを手に取り、男はラルゴに手をかざす。……と今度は金色の光の球が出てくる。

「……初めてだから上手くいくかね。」

そして、泰人の肉体に金色の光の球を入れる。……すると

「……きた……きた……！」

辺りにまばゆい光が溢れる。ぱあーっという感じで。一瞬間が光に押されるが、それはすぐに消える。

「……えつと、何が起きたのですか？」

そこには一人の人間が立っていた。しかし、それは泰人ではなく、一人の金髪な大人の女性だった。見た目はフィルディアそっくりである。服は着ていません、はい。

「どうやら上手くいったようですね。泰人の肉体に貴方の魂を入れたのです。それに合わせて姿も変化させておきました。服も着せて

おきましたよ。」

そう言つて男は笑う。何気に緑色の球を懐に入れる。

「・・・聞きたいことは色々ありますが、とりあえず1つ聞きます。私は何をすればいいんですか、こんなことをして。」

「君にはある町に行つてもらふ。そこには君の娘は勿論泰人の妹もいる。そのサポートをしてもらいたい。」

突然雰囲気が変わり、厳しい命令口調になる男。どうやらこっちの方が威厳が持てると思ったようだ。

「え・・・、そ、それで娘達が助かるなら。」

突然のことでフィルディアも驚いたがサミーと莉麻を助けたい思いでそう言う。

「では、扉を開ける。何かあれば闇の精霊に聞いてくれ。・・・」
応これを渡しておく。」

男は落ちていたラルゴを拾つてフィルディアに渡す。

「能力はウィップしか使えないが、護身用にはなるだろう。」

そう言つと闇の空間の一部に手をかざす。すると穴が開く。

「・・・よく理解できませんが、私には貴方が悪い方とは思えません。なので、貴方を信じてみます。」

そうやって穴を通っていった。

「さて、邪魔ものがいなくなったな。これで泰人の修行ができる。」

男はそうやって緑の球と段ボールを取り出す。・・・段ボールをどこから出したかは深く突っ込まないでほしい。

「あれを倒せるくらいになってもらわんとな。頼むぞ。」

そうやって緑の球を段ボールに入れた。

そしてその段ボールは鈍く光りはじめた。

続く

4・動く者達（後書き）

どうでしたか？次こそ遅くならないようにしたいですがまだ分かりません。温かい目で見守っていただけると幸いです。
ではまた次回お会いしましょう。

5・学園へ・前編(前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回は早く投稿出来ました。次もできるだけ早くに投稿したいです。それではどうぞ。

5・学園へ・前編

場所は再び莉麻達の所へと移る。

あれからすぐに莉麻の部屋にサミーが戻ってきた。

「おかえり、どうだった？」

「駄目だ、見つからん。この屋敷内にいるとは思ってたが。」

そう言うと、サミーと水晶に分離する。

「わーい。」

サミーはまた元気よく部屋の中を飛び回り始めた。

「どうやらそう簡単には見つかってくれないようだ。・・・仕方がない、お前にも手伝ってもらおうか。これをやる。」

そう言うと水晶の前にくろんと音がして、服につけるピンク色のボタンのようなものが出てきた。

「これは何？服につけるの？」

ボタンを手にとって莉麻は言う。

「まあ、身につけていれば何でもいいさ。とにかく役割を分担する。お前はあの雪美とかいう女を見ているだけでいい。何かあったらこのボタンで連絡をくれ。」

「う、うん。それはいいけど、貴方はどうするの？」

莉麻は戸惑いながら聞き返す。

「俺はサミーと共に奴の捕獲とある場所の調査だ。まあ、おまえが嫌なら別に……。」

「ううん、私やるよ。よく分かんないけど、なんか黒水晶さん、悪っぽいけど本当の悪って感じしないもの。信じるわ。」

水晶の話に割り込んで、明るく莉麻が答える。

「ふん、バカが……。まあ、礼は言ってやらなくもないが。」

水晶は照れくさそうに言う。

「うーん、眠くなってきちゃった。サミー寝る。お姉ちゃん一緒に寝よ。」

しばらく飛び回っていたサミーは眠くなったようで、莉麻に甘えてくる。

「そっね、今日はこれくらいにして本格的に動くのは明日にしましよ。」

「ああ、じゃあ寝ろ。ゆっくり休んでおけ。」

莉麻はそれに頷き、サミーと一緒に眠りについた。

「さて、俺も休んどくか。何かあるか分からんから、すぐに起きれ

るようにしようか。」

水晶もスリープモードに入った。

夜も更ける。メイド達の仕事も終わり、それぞれの部屋に戻る。どうやら泊まり込みで仕事をしているらしい。

「お疲れ様！」

「園実、明日も頑張りましょう。」

美納下園実も部屋に戻った。

部屋の中は必要最低限のものしかなく殺風景だ。

「ふーん、やっぱり仕事上こんな感じなのね。あたりまえだけど。」

美納下は部屋を一通り見てから服を脱ぐ。

「まあ、力も8割戻ったし闇の奴よりも上になった。安心できるわね。」

シャワーを浴びにバスルームに入る。

「なんか次元転移魔法のおまけつきだし、すぐに戻れるならこの世界をもらってからでもいいわね。」

物騒なことを言いながら身体を洗う。

「・・・へえ、面白いことが分かったわ。この子色んな事知ってるわね。」

何か考えながら身体を洗い流す。

「動くなら・・・明日ね。メイドさんも惜しいけど、ここにいていつ奴に気付かれるか分からないし。」

バスルームから出て身体を拭き、着替え始める。

「今日の所は下手に動いた方が危険ね。もう寝ましようか。」

着替え終わって、すぐに寝る支度をする。

「さて、私をどれくらい楽しませてくれるかしら?」

そう呟いて美納下は眠りについた。

次の日の朝6時30分、莉麻達ははまだ寝ていた。

そこにコンコンとドアをノックする音が聞こえる。

「莉麻ちゃん、起きてるかしら？」

雪美がきたようだ。その声に莉麻は目を覚ます。

「……えっと、どうぞ！」

寝覚めはいいようだ。すぐに思い出したように返事をする。
がちゅとドアが開き、雪美が入ってくる。

「おはよう、調子はどう？」

雪美はすでに制服に着替えているようだ。

「はい、おかげさまで。まだ色々と思いだせませんが。」

とりあえずこう言っておけば大丈夫だろうと莉麻は考え言った。

「そう、なら話は早いわね。これを見てくれる？」

雪美は制服を取り出した。莉麻の着ていたもののデザインとは異なるセーラー服だ。

「実は記憶が戻るまで学校に通わせようと思うの。学校の方は私と同じ学校ね。」

雪美の学校は小、中、高とエスカレーター式の学校である。

「え、でも迷惑じゃ……。」

「もう学校には許可とってあるの。記憶が戻るまで……ね？」

「こう言われると嘘だったとはとても言いにくい。」

「あ、ありがとうございます。」

「こう言うしかなかった。」

「いいのよ。さあ、着替えて。先に行って待ってるから。」

「そう言い雪美は部屋を出ていった。」

「……じゃあ着替えましょう。」

「莉麻は着替え始めた。」

「……………つにゆう、ん。」

「着替え終わった所で、サミーが起きたようだ。」

「あわん……………おはよ。」

「どうして？」

「さて、俺はそろそろ行くとするか。サミー、行くぞ。」

「行く行く行く行く行く行く行くよ。」

そう言っつて水晶触つて融合！

「さて、あの女は任せた。何かあったら連絡しろよ。」

サミーは窓から出ていった。

「じゃあ私も行こうかな。ボタンをポケットに入れてつと……。」

莉麻はドアから出ていった。

その後朝食を済ませた莉麻と雪美は、屋敷を出て学園に向かった。

「……えつと、ここかな？」

着いた所はとんでもない大きさの学園だった。学園というより一つの街みたいだ。

「うん、凄く広いから迷わないように私から離れないでね。」

二人は手をつなぎながら学園内を歩いていく。

そして中等部前まで来ると雪美は地図を渡してくる。

「これがここの地図ね。……そろそろ先生がむかえにくるはずな

のだけねど。」

すると昇降口から一人の女性がやってくる。金髪で眼が青いことからどうやら外人のようだ。

「遅れてごめんなさい。では行きましようか。」

「お願いします。」

その場で雪美と別れ、中等部の校舎に入っていった。

教師と共に校舎内を歩く。

「そういえば、莉麻さんは記憶喪失のようね。」

「あ、はい。名前と年齢位しか覚えていなくて。」

いつものことながらそう話す。

「そう。……ならいいわ。」

教師は少し悲しそうにそう言う。

「じゃあ、授業が終わったら少し付き合ってくれるかな。」

「え？……まあ、いいですよ。」

いきなりの事で驚くが何か知っているような教師の態度に少し興味

を持ち、話に乗って見ることにした。

そうこうしている間にも教室に着いた。

「はい、皆さん席についてください。転校生を紹介します。」

そして、莉麻が教室に入る。

「こんにちは、莉麻です。少しの間ですがよろしく！」

とりあえずありきたりな挨拶をする。

「はい、みなさん仲良くしてあげてくださいね。それでは莉麻さん、空いている席についてください。」

後ろの方が空いていたのでそこに座る。

「そういえばまだ、私の紹介をしていませんでしたね。私は新しくこの学園に来た英語教師の……」

そこで彼女は自己紹介する。そうこれが

「……フィルディアです。」

彼女と彼女の初めての出会いだった。

続く

5・学園へ・前編（後書き）

いかがでしたか。今回はひさしぶりの前編でした。次は後編になります。前書きにも書きましたが、次は出来れば1週間くらいで投稿したいです。それではまた次回お会いしましょう。

6 ・学園へ・後編 (前書き)

少し遅れました。とりあえず最近は生活も安定してきたため、週に1回投稿ペースは守れるかと思えます。それではどうぞ！

6・学園へ・後編

時間を戻して、朝の学園内のあるマンションの一室。
一人の女性がベットで眠っていた。

「……うーん、……ここは？」

その女性、フィルディアが目を覚まして辺りを見回す。

どうやらあの穴はここに繋がっていたらしく、着いてから今初めて部屋を見たようだ。

「えっと、一体どうなって……」

ベットから下りて机の上を見ると、一枚の書置きがあり、こう記してあった。

ここはとある学園の中で今日から貴女は英語教師です。ここの敷地内にある学校の職員室に行くと、自動的にここの仕組みが分かるように貴女におまじないをかけておいたから安心していただきたい。
それでは！

「……まあ、信じたからには行くしかないかしらね。」

ふと裏を見るとこう続いていた。

なお闇の精霊との接触はできるだけ早くにお願いします。

「……言われなくてもそうするつもりでしたわ。」

そう呟くと部屋を一通り見てみる。
部屋には必要最低限の物は揃っているようだ。箆笥を開けると服も
下着もある。

「あの人は一体何を……………」

深く考えないことにしてとりあえず軽く朝食取り、着替えと身支度
をし出かけることにした。

その際に何か変わっている所はないか鏡を見た。

「……妖精の時より少し若返ったみたいだね。」

楽しそうでなによりです。

外に出ると目の前に大きな建物がある。どうやらこれが行き先のよ
うだ。

「大きいわ。そういえばこういう学校というものは聞いたことはあ
っても、行ったことがないわね。」

ディオールは妖精は自分の親に全てを教えてもらおうようになったい
る為、学校という場所がないようだ。

「とりあえず行ってみましょう。」

部屋は2階なので、階段を下りる。目的地は目の前なのでそんなに時間もかからない。

「先生、おはようございます!」

行く途中で生徒達に挨拶をされる。

「はい、おはようございます。元気が良くっていいですね!」

笑顔で挨拶を返す。泰人達以外の人間に会うのは久しぶりのためけっこう嬉しいようだ。

「(でも、ここにいる人達なにかしら違和感を感じるわ。それにここはディオールとは異なる世界みたい。泰人さん達の住んでいる世界とも違う気がしますし……。)」

そうこう考えている間に職員室に着いた。

「おはようございます。」

そう言っただけの中に入った瞬間、フィルディアの頭の中に自分の知らない情報がながれてきた。どうやらそれがここで必要な知識みたいだ。

「おはようございます。今日から願いますね。」

一人の少し老いた男性が話しかけてくる。見た感じ副校長か校長辺りだろうと思われる。

「（この人は……副校長先生みたいですね。）はい、お願いします。早速ですが、私の担当を教えていただきたいと思うのですが。」

「はい。実は英語の担当ともうひとつ、中等部のあるクラスの副担任をお願いしたいのです。」

え？といきなりの事で固まるフィルディア。

「今そのクラスの担任の教師の人が休んでおりまして、新人ですが優秀である貴女にお願いしたいのです。」

どうやらそのクラスの副担任は学校を辞めていたようで、担任がない今代わりを探していたようだった。

「あ、はい。私でよければ喜んで引き受けます。」

困っている人は放っておけないらしく、快く引き受けるようだ。

「それはありがたい。では早速ですが転校生が来るので昇降口まで迎えに行っていたきたいのです。」

これをとその生徒の書類を渡される。

「えっと、生徒の名前は………莉麻ちゃん。記憶喪失？」

間違えなく聞いたことがある名前、泰人の妹だと思った。

こうして莉麻の事を昇降口まで迎えに行ったのだった。

そして今に至る。

その後フィルディアの授業が始まった。

情報があるため普通に授業をすることができた。

莉麻も教室の雰囲気すぐに馴染むことができた。

「どうやら無事のようだ。まあ心配はしていなかったがな。」

窓の外でサミーが浮いていた。どうやら心配してきたようだ。

「さて、ここはどこかあの場所があるらしいんだが……。」

いや、なにやら探し物らしい。

「うーむ、どこに……ん？」

フィルディアが目に入る。少し驚いた表情になるサミーだがすぐに無表情に戻る。

「あの男、まさかこうくるとはな。ラルゴ使いの修行の厄介払いと
いったところか。」

すべてを理解しているようだ。

「まあ、邪魔しに来たわけではないなら問題ない。さて、だいたい場所も分かったし奴を探しに行くか。」

眼を閉じ気配を感じ取る。

「うむ、感じないな。さっき屋敷のまわりや隅々を探していなかったから、すでに外に出たか。ならまずこの世界を理解する必要があるな。」

サミーは学園を後にして、町を見て回ることにした。

どうやらサミーは探しているのが人間内にいるとは気付いてないようだった。

そのころ美納下は

「夕方まではここでメイドを楽しみましょうかな。」

普通にメイドの仕事を楽しんでいた。

続
く

6・学園へ・後編（後書き）

いかがでしたか。

次回は何もなければ1週間後です。

それではまた次回お会いしましょう。

7・変身の指輪（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。さて、最近は時間もとれるようになったので気が楽になり、こちらの作業も進めております。1週間1回はしばらく守れそうです。それではどうぞ！

7・変身の指輪

沙汰達が穴に飛び込んですぐのこと。

「……………んん？」

沙汰は洞窟のような所にいた。

どうやらここに転移してきたようだ。

全員ちゃんと揃っている。

「どうやらここが目的地のようですね。」

ティルスが前を向いて言う。

それにつられ残りのメンバーも同じ所を見る。

「……………おお!!！」

そこはまるで村のようだった。家や小屋、ちょっとした施設があるので間違いないだろう。

「では行ってみますか。」

一同は村の中に入り学者を探すことにした。

しばらく村をまわり、ある程度情報が集まった。どうやらここにその学者がいるのは本当らしかった。

・・・だが。

「どつやらあそこにいるらしいよ。」

スイングが指さした先には、かなり古い小屋があった。

「俺っちの聞いた話によるとかなりの変わり者らしくて、よそ者とは話をしないらしい。」

「・・・・・・・・・・なんかゲームとかでよくある展開だな。」

げんなりとして沙汰が言う。

「だけど例外があるそうっす。なんでもよそ者でもかわいい幼女ならしいとか・・・・・・・・。」

「最低だ。」

「それはちょっと・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

みんな引いてしまった。

「ちて、どつするか。」

学者からどつすれば話を聞けるか考える一同。

「やはり、ちゃんと話をするのが一番だと思います。僕が行ってきます。」

そう言ってティルスが小屋に向かった。

こんこん

「すみません、どなたかいらっしやいませんか？」

小屋の戸を叩いて声をかけてみる。・・・すると

「・・・だれかな？」

一人の女性が出てきた。見た感じまだ若そうだ。

「あの、こちらに物知りの学者さんがいると話を聞いてきたのですが。」

ティルスがそう言くと女性は少し困ったような顔になる。

「うーん、多分聞いてもらえないと思うけど。まあ、入ってください。」

とりあえず小屋に入れてもらいとある部屋の前まで案内される。

「先生お客様です。外部から来た少年が先生のお話を聞きたいと。」

扉越しにそう言つと

「男には興味ない。」

と吐き捨てるように一言。

「えーっと、僕ティルスと言いまして試練のことで話を聞きに来たのですが。」

なんとか話を聞いてもらおうと試みるが

「君のことは知ってるけど、男に興味ないしパス。」

と言われてしまった。

「……駄目でした。」

結局成果はなく、手ぶらで帰ってきた。

「ふむ、だったらミュアちゃんに行ってもらつたか。」

沙汰はそう言つてミュアを見る。

「……………会話はちよつと。」

べつちやら話をするのは苦手のようだ。

「……………だったら、こいつを使うしかないなあ。いやあ、
本当は使いたくないんだけどなあ。」

やたら嬉しそうに沙汰は何かを取り出した。指輪のようだ。

「こいつが俺のつくった銀の発明の一つ、変身リングだ。本当は読
心術の能力をインストールしようと思ったんだけど、あれかなり重
いし身につけるタイプにすると頭に負担がかかりすぎるからなあ。
残念だったよ。」

沙汰は本当に悔しそうに話す。

「という訳で代わりに入れたのが変身能力ってわけさ。ビー玉ほど
じゃないが、物質変換システムは面倒だったよ。まあ、まだ使っ
てないしどうとも言えないけどな。」

「……………まあ、それはいいとしてどんなのに変身できる
んだい？」

話が長くなりそうだったので途中で割り込んだスイング。

「今は見た目、姿、形くらいかな。能力強化や能力コピーなんても
のもできるけど、もう少し時間がないと無理だな。」

そう言ってその指輪をはめてみる。

「これを指にはめて、なりたい姿を想像するだけで……………」

するとポンっと音がして

「じゃじゃーん。」

そこには6、7歳の少年がいた。どこことなく沙汰に似ている。

「これは小学生のころの俺の姿だ。まあ、年齢性別問わずなんでも変身できるんだけどな。見たことある姿、または自分で考えた姿ならな。」

そう言っ指輪を外すと、ポンつと音がして元に戻る。

「(すごいなあ。これを使えば、僕もあの人に話を聞いてもらえる姿になれるかな?)」

ふと考えたティルスは自分が少女になった姿を考えていると

「さてと、こいつを君につと。」

沙汰はティルスの指輪をしている逆の腕の指にはめた。

「……………え?」

ポンつと音がして、そこには

一人の少女が立っていた。

「……………なんで僕がこんな姿に。」

ティルスは嘆いていた。それはそうだろう、いきなりのことだから。

「いやあ、ごめんごめん。だが、かわいいぜ！…！」

そうやってティルスをよく見てみる。

服装そのものは着ていた男の子物の服だが、見た目はティルスを女の子にした感じみたい。元々かわいい少年だったので、違和感はない。

「うーん、なんか違和感がありますよー。」

そうやって胸を触ってみる。あまり大きくないが膨らみがあるようだ。

次に下の方は、……………当然ない。

「これは恥ずかしいですよ。戻ります。」

ティルスはそう言って指輪を外そうとするが

「・・・・・・・・・・は、外れませんよ。これ。」

外れなかった。指にぴったりとくっついて外れないようだ。

「マジか？さすがに性別変えるのは無理があったかな。後で調べてみるからしばらくはその姿だな。」

沙汰は少し残念そうだったが、すぐに笑う。

「結果オーライ！！その姿なら変態学者から話を聞けるんじゃないか？」

「うー、そうなんですけど・・・・・・・・・・僕が帰ってくるまでに原因探しておいてくださいね。」

ティルスが少し悲しそうな表情をして、再び小屋に向かおうとすると

「・・・・・・・・・・待って！」

突然ミュアに止められる。

「・・・・・・・・その格好、駄目。・・・女の子の服、着ないと。」

そう言ってティルスを連れて近くの洋服屋に入る。

「・・・お待たせ！」

少しして、表情がちよっと明るくなったミュアが出てきた。その後ろにはティルスがいた。全体的に黄色っぽい色をした服で、スカートをはいている。

「ううう、なんで僕がこんな目に・・・。」

「まあ、嘆いても仕方ないさ。帰ってくるまでに原因調べておくから、そっちは頼むぜ。」

沙汰は嘆くティルスに慰めなのか分からない言葉をかける。

「・・・じゃあ、今度こそ行ってきます。」

少しテンションが低くなったティルスは小屋に向かって行った。

「そっいや、俺っち気になったんだけど、もしかして下着も・・・。」
「・・・ばっちり。」

スィングの言葉に少し嬉しそうに答えるミュアだった。

続
く

7・変身の指輪（後書き）

いかがでしたか？ほとんど進んでいませんね、すみません。非日常をただ書いていくのが好きなのです。ですが、少しずつ進んでいくので今後も読んでいただけると嬉しいです。それではまた次回お会いしましょう！

8・そのとき君は（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。最近はずいぶん寒くなってきましたね。風邪には十分注意しましょう。

そして早いところで今年もあと1ヶ月。やり残したことがないよう頑張らしましょう。

では、どうぞ！

8・そのとき君は

サミーは町にやってきた。

「ふむ、この世界はディオールとは異なる町並みだ。見たことのない形の建物がある。というかこんな大きな建物にする意味ってあるのか？」

並んでいるビルをみてそう呟くサミー。ディオールにはビルはほとんどないので珍しいのだろう。

「それにしても、特に変わった所はないように見えるが………ん？」

サミーは一瞬建物がぶれて見えるのを見逃さなかった。すると一気に急上昇を始める。

かなり上空まで来てみたが、

「……圧力が感じられない。………どういうことだ。」

ふと下を見てみると町並みが目に入る。

「………なるほど。そういうことだったのか。」

どうやら何か分かったようだ。
そのまま降下する。

「ディオールと莉麻達以外の別の世界があると噂に聞いてやってきたが、こういうことだったか。これは奴を野放しにすると危険だな。」

キンコンカーンと鐘が鳴り、放課後になる。
莉麻は授業を無事に終えて帰る所だった。

「莉麻ちゃん、一緒に帰らない？」

クラスメイトの女子が話しかけてくる。どうやらもう仲良くなったようだ。

「あ、ごめんね。実はフィルディア先生に呼ばれているの。だから先帰ってて。町案内はまた今度お願いするよ。」

「そっか、じゃあまた明日。ばいばい！」

そう言って女子生徒は教室を後にした。

「さて、職員室にでも行くのかな？」

誰もいなくなつた教室を出ていこうとすると、

「莉麻さんいるかな？」

ちょうどフィルディアが教室に来たのである。

「あ、良かったです。私今から先生の所に行こうと思つてしまして

」

「そうだったの。じゃあ良かったわね、ついてきてくれるかしら？」

それに莉麻は頷き、二人は教室を後にした。

二人が来たのは、普段は使われていない空き教室だった。二人は中に入り向かい合う。

「いくつか聞きたいことがありますますがまず初めに、……………貴女は茅野泰人さんの妹さんでいいんですよね？」

いつもの口調に戻りフィルディアが問う。

「なっ……………何故それを？」

「その反応を見ると間違いはなさそうですね。さてと、次は貴女が質問していいですよ。」

「え、えつと……」

口ごもる莉麻。聞きたいことはたくさんあるのだが、突然のことで混乱しているようだ。

「……じゃ、じゃあお兄ちゃんは、お兄ちゃんは元気ですか？黒水晶さんに聞こうにも知っているか分からないしどうすればいいか迷ってて。」

「……すみません。彼が今どうなっているのかは分かりませんが、生きていることは確かです。」

今自分が泰人の肉体を借りていることを言わずそう答えた。変な心配はさせたくないのだろう。

「……そうですか、それだけでも十分です。」

莉麻は少しほつとする。

「ごめんなさい。ですが私が知っていることならだいたい話します。」

フィルディアは話し始めた。泰人と出会ったことや共にいたこと、変な男に会ってこの世界に送られたこと、そして……

「……え？」

「厳密に言うと恐らく貴女の言う黒水晶のしたことでしよう。何故私たちが生きているかは分かりませんが。」

闇の精霊により謎の空間に送られたことも話した。
莉麻はとても驚いている。

「……………私、それ聞いてない。」

ポケットからピンクのボタンを取り出す莉麻。

「……………ちよつといいかな？」

それに呟くと

「ん、何かあったのか？」

そこからサミーの声が聞こえる。

それにフィルディアが反応するが会話中らしいので止めた。

「お兄ちゃんを変な空間に拉致したって本当なの？」

「……………ちよつと待ってる。」

そう言って通信が切れる。

「今のは……………」

「はい、黒い水晶さんです。今はサミーちゃんと合体しているみたいですが。」

「……………そうなのね。」

少ししてサミーが到着する。そこにいきなり莉麻が質問する。

「ねえ、教えてよ。なんでそんなことしたの？」

「……邪魔だったからだ。奴がいたんでは俺の目的は果たせないと判断した。」

真顔でそう答えるサミーだが、眼は少し寂しそうだった。

「……。」

フィルディアはそれに気づいたのだろう。何かを考えているようだ。

「信じられない。そこまでひどい人だったなんて、信じられないよ……！」

そう言って莉麻は部屋を飛び出してしまった。

「いいんですか、恐らくいま言ったことは本心ではないのでは？」

サミーの気持ちを知っているのかそう言葉をかける。

「うるさい。それよりいいのか？俺様は今貴様の娘を乗っ取っているんだぞ。」

「………それについても詳しく聞かせていただきます。今日の所は私の所に来てください。後、莉麻さんは。」

「あいつは今別の所に泊めてもらっているから心配はいらない。………仕方がない。奴がこう判断したなら少し付き合ってもやらんこともない。」

そういつて顔をそむけるサミー。

「ではついてきて下さい。人の目につかないようにしてくださいね。」

こうして二人？は教室を後にした。

「なんで、なんで本当の事を言ってくれなかったの？」

なんどもそう呟いて莉麻は校舎を出た。泰人のこととなると後先考えずに行動してしまう。

「もう、どうすればいいんだろ……。」

とぼとぼと歩いていると

「莉麻ちゃん？」

前に誰かいた。……………雪美だった。

「どうしたの？泣いてるみたいだけど……………」

「雪美さ……………ん！！」

話の途中で莉麻は雪美に抱きついた。耐えられなかったのだろう。

「……………もう泣かなくていいのよ。さあ、一緒に帰りましょ。」

「……………はい。」

こうして二人は帰路についた。

莉麻が離れようとしないので、二人で手をつないで帰った。

場所は変わり、とある公園。そこに一人の少女がベンチに座っていた。

この公園はとても小さく近くに別の大きな公園があるのでその子一人である。

見た感じだと小学5、6年くらいだろう。

「……………あたし、どうしていつもこうなんだろ。」

少女は佐野星音^{ほしのほし}、雪美が通う学園の学長の娘で学校ではよく男子にいじめられている子である。今日もふとしたことで男子にいじめられたのだ。

「あたしは何もしていないのに。どうしていつも……………」

「……………あら、こんなところでどうしたの?」

そこに一人の女性を通りかかった。メイド服を着て、手には買い物袋である荷物を持っていた。

「えっと……………別になんでもないです。」

そう言ってベンチを立とうとする。

「まあまあ、話をするだけでも楽になるでしょ。お姉さんに話してみよう。」

と言ってとなりに座ってきた。

「・・・それで、あたし突然男子からいじめられるようになったやつて。」

なんだかんだ言って結局話すことにした星音。メイドさんはうんうんと頷いて聞いてくれている。

「そっか、だったら自分を変えればいいんじゃないかな？」

「そ、そんなの無理ですよ。あたし、そんな、勇気ないし。」

途切れ途切れになって話す星音。それを見て

「だったら私が貴女を変えてあげるわ。」

不気味に笑いかけ

「・・・え？」

メイドさん・・・いや、美納下は手を開き、星音の方を向けた。

「さて、始めましょうか。」

続く

8 ・そのとき君は (後書き)

という訳で、いかがでしたか？なんか変な方向にいつている気がしますね。ですが、最後まで見ていただけると嬉しいですよ。それではまた次回お会いしましょう。

9・初のお泊まり(前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。もう11月も終わりですね。12月はずっと寒くなりますね。週1は今年中は何もなければ守れそうだと思います。では、どうぞ！

9・初のお泊まり

場所を移す。

「うーん、これで本当に……いいのかな？」

ティルスは再び学者の小屋を訪れていた。無論変身したままである。

こんこん

「あの、すみません。いいですか？」

再び小屋の戸を叩いて声をかけてみる。……すると

「……あら、今日は珍しく尋ねる人多いわね。誰かな？」
再び同じ女性が出てくる。ここに他の人は勤めていないのだろうか
と思いつつ

「あの、先ほど来たものなんですけど。」

真実を言う。すると女性は少し困ったように

「……うーんと、さっき来た子は男の子でしたね。もしかして、
女装かな？」

そう言っつてティルスの胸を触ってきた。

「・・・ひゃん。な、何を!？」

「これは小さいけど・・・本物ね。となると。」

女性は少し考え一つの結論を出す。

「変身系の術ね。かなり完成度が高い所から見て、実力がある術師にでも頼んだの？」

「え、まあそんな感じですよ。」

いきなりのことで驚いたティルスだが、少し落ち着きそう返す。

「それほど話が聞きたいってことですか。じゃあまた連れて行ってあげます。」

という訳で再び部屋の前に来た。

「先生お客様です。今度は女の子が尋ねてきました。」

「ふむ、通してあげなさい。」

さっきとは違って変わって簡単にOKを出す男。まったく現金な奴である。

「失礼します。」

ティルスが学者の部屋に入った。そこには書類が散らかった部屋に一人、初老の男が椅子に座っていた。

「ふむ、こちらに座りなさい。」

かろうじて使われているであろう椅子を出して言う初老の男。

「あ、はい。ありがとうございます。」

ティルスはそう返して素直に座る。

「では、君の考えていることを当てよう。恐らく私が無茶なことを言うから困っている。そして元に戻れなくて困ってはいるが、情報を集めるために仕方なくここに来たと言ったところかな。」

「……え？そ、それって……。」

ずばり言い当てられて混乱するティルス。まだ自己紹介もしていないのに何もかも分かっているようだ。

「とりあえずせっかく変身してまで来たんだ。本当は追い返す所だが、かわいいし許すこととしようか。」

と言ってティルスをじろじろと見る男。その目は獣のようだ。

「えっと、そんなにじろじろ見られると恥ずかしいんですが。それになんで僕の正体にも気付いているようなんですか？」

「まあ、私は何でも知っているからな。特別サービスで3つほど何でも答えてやるっぞ。」

男はじろじろ見るのをやめ、ティルスの目を見て答える。

「えっと、そういえばまだ貴方のお名前を聞いていなかったのですが。」

「私はエルドイと言う。ここではよく先生と呼ばれているがな。．．．さて、あと二つはどうする？」

「．．．え？今のもカウントされるんですか？」

ティルスは驚いてそう聞き返す。

「当然。さて、あとはどうするんだ？」

「えっと、あの、その、．．．この指輪について教えてもらいたいのですが。」

一瞬言葉に詰まったがなんとか目的通り朱雀からもらった指輪のことについて聞くことができた。

「ふむ、ちょっと見せてくれんかね。」

ティルスは指輪のついている手を出し、指輪を見せる。

「これは、・・・なるほどな。君はなかなかきついことをしているようだね。というよりもあの男が全面的に悪いなこれは。」

急に表情が険しくなり一人で納得しているエルドイ。

「えっと、つまりどういうことなんですか？」

「この指輪を外す方法は、” 真実を知る時、再び赤き鳥が姿を現し最後の試練がとり行われるであろう。” という訳だ。つまりこの指輪は後回しにして当初最後の目的地だったパレスに向かうがいい。」

意味深なことを言うエルドイ。それを、ティルスは頷きながら聞いている。どうやら理解しているようだ。

「はい、では最後の質問です。・・・茅野泰人さんと莉麻さんの安否を教えてください。」

「やはりそれがきたか。二人同時となるとかなり大雑把にしか教えられんがいいか？」

それに頷くティルス。本当は3つの内2つで2人の安否を確認するはずだったのだが、計画が狂ってしまったためこうするしかなかった。

「あの二人はどちらも今のところ元気だ。だがそれも時間の問題だな。二人とも後少して選択を迫られ危険な目にあうだろう。」

「そうですか、だったら急がないといけませんね。」

聞く前と別人のようにやる気のある表情になったティルス。

「後一つヒントで教えておいてやる。今3日目だから気をつける。以上だ。」

「・・・そうでしたね。分かりました。ありがとうございます。」

正直言うとまだ聞きたいことは山ほどあったが、約束は約束なので素直に引き下がる。

「まあ、また来い。気が向いたら他のことも教えてやる。」

その言葉にティルスは礼を言っ部屋を出て、小屋を後にした。

「聞いてきましたよ。とりあえず話しますね。」

そう言ってさっき聞いたことを3人に話した。

「そうか。あいつらは今のところ無事か。それは……………良かった。」

嬉しそうに沙汰はそう言った。

「でも危険が迫っているなら早く助けにいかないとまずいですね。でもどうやって……。」

「大丈夫です。試練をすべて終えればきっと何とかになります。」

自信満々に答えるティルス。その言葉に3人は頷く。

「さて、今日はそろそろ遅くなりますしここで宿にでも泊まりましょう。」

そう決まり、4人は宿へと向かった。

宿に着き、部屋分けをしている時だった。

「それでは、男性2名様と女性2名様を別々の部屋にご案内します。」

「ちょっと沙汰さーん、何か忘れていませんか!？」

沙汰は女子部屋から突然やってきたティルスにそう言われた。

「ああ、そうだったね。そのことなんだけど……。」

少し言いにくそうにして

「ごめん、何故か直らなかつた。ということではしばらくそのままという……。」

「ちょっと待って下さいよ！…！どうするんですか、ミュアさんも一緒なんですよ。」

「……私は、……構わない。」

ミュアは少し嬉しそうにそう呟いた。

「そ、それはまずいですよ。僕、男の子なんですよ。恥ずかしくありませんか？」

「……今は、……かわいい女の子。……問題ない。」

そう言ってグッと親指を立てるミュア。

「という訳だ。すまんがしばらく宜しく！」

「そ、そんな……。」

ティルスは絶望した。そう、今この瞬間に。

「……じゃあ、戻る？」

そう言って、ミュアはティルスの手を引き部屋を出ていった。

「風呂行くなら、後で感想を・・・。」

「行きません!!!!」

沙汰の分かれ様のふざけた言葉につい怒鳴ってしまったティルスだった。

だが、彼女（彼）は今の時点では気付かなかった。ここには温泉しかないことに。

さてどうなるのか？

続く

9 ・初のお泊まり（後書き）

どうでしたか？次は12月です。また見ていただけると嬉しいです。
それではまた次回お会いしましょう！

10・孤独（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。という訳で新章も2桁きました！！そして12月です。2010年も終わりが近いので、やり残しがないように頑張らしましょう！

ではごうげ。

10・孤独

あたしはいつも一人だった

友達もいない

先生も気にしてくれない

親にも無視される

誰も気にしない

そんな子だった

そんなある日

一人の男子があたしにちょっかいをかけてきた

最初はあんまり気にしていなかったけど

どんどんエスカレートして人数も増えていく

あたしは何もしてないのにと言うと

いるだけで邪魔なんだと返された

友達もいない

先生も気にしない

いじめっ子以外には無視される

親にもそんなこと言えない

言っても意味がない

もう駄目なんだ

何か

誰か

何でもいいから

あ
た
し
を
助
け
て

「……う、うん。あれ、あたしどうしたんだろう？」

星音は目を覚ます。どうやら気絶していたようだ。周りを見ても特に変わっていないが、美納下も近くに倒れている所に気付く。

「あの、しっかりしてください！」

「う、うん……、」

声をかけると美納下は起きて周りを見ている。

「えっと、さっきまであたしのお話を聞いてくれましたよね？」

「そうだったかしら？私、温泉のお掃除をしていて……」

不思議そうな表情で首をひねる美納下。どうやら何も覚えていないようだ。

「……えっと、この買い物袋を持っていましたよ。」

ベンチに置いてあった、先ほど美納下が持っていた買い物袋を本人に渡す。

「あ、ありがとう。じゃあこれで、またね。」

余り納得していない様子だったが、買い物袋を受け取ると美納下はその場を後にした。

「……………あたしも帰る。」

そう呟いて星音も公園を後にした。

「……………ただいま。」

星音は家に帰ってくる。しかし家には光は灯つてなく返事もない。

リビングに行き電気をつけるとテーブルの上に手紙が置いてある。

それを見ると母親から夕飯について書いてある。両親共働きで平日は夜遅くまでいない。それに兄弟もいない。

「今日も……………か。」

書いてある通りに準備して、それを食べる毎日。星音はそんな日々が嫌いだった。

「……………ごちそうさまでした。」

それを食べ終えて部屋に戻る。

「……………ふう。」

着替える。

宿題をする。

お風呂に入る。

歯磨きをする。

明日の準備をする。

読書する。

寝る。

このようにいつも進めている。

「……………おやすみなさい。」

誰に言うまでもなくそう呟いて、星音は床に着いた。

時間は戻り、場所・水本家

二人は戻ってきた。美納下も戻ってきており、掃除をしていた。

その後食事を終え、二人で温泉に入っていた。

「それで、何かあったか聞いてもいいかな？」

「・・・はい、分かりました。」

莉麻は頷き、深いことは話さず、大まかな所のみを話すことにした。

「一つだけ思い出したんです。私にはお兄ちゃんがいて、そのお兄ちゃんを私が傷つけてしまった。そのことから家出してここに辿り着いた時には、何もかも忘れていたんです。」

自分でやったことではないのに、自分でやったことのように語る莉麻。いや、自分の意志ではないにしろ自分の意思で泰人を追い詰めたのだから無理もないだろう。

「・・・そっか、大変だったね。」

「雪美さ……あう。」

莉麻は雪美に抱かれる。大きめな胸に顔をうずめるような体勢になる。

「大丈夫よ。お兄さんはきつと気にしていないわ、ちゃんと謝ればきつと許してくれるわよ。」

「……うん。」

そのまま優しく諭される。莉麻はその言葉を受けてつい素に戻ってしまい、身体を雪美に預ける。

「それにすべて思い出すまでここにいていいのよ。私が貴女のお姉さんになってあげるから。」

「……うん、ありがとう。お姉ちゃん！」

雪美は莉麻をギュツと抱いた。

その後莉麻はだいぶ落ち着いて、雪美の話を聞いていた。

「私の姉さんも家出しているの。というより、病院に入院している時抜け出してそのまま帰ってきていなくてね。でも今帰ってきても責めないわ。だって大切な姉だもの、貴女のお兄さんもきつと気にしていないわ。」

「そう……ですね、ありがとうございます。だいぶ楽になりました。」

それに雪美は莉麻のおでこをツンとつついて

「もう敬語はいいでしょ、だってもう私たち姉妹じゃない。」

「……………うん、お姉ちゃん。」

こうして温泉で親睦を深めた二人だった。

場所・学園内マンション

フィルディアとサミーは部屋に戻ってきた。

「よし。」

サミーと黒い水晶は分離する。水晶はテーブルの上に乗る。

「あ、大きいママだ。わーい。」

サミーはフィルディアに突っ込む。

「……………サミー、良かった無事で！」

そのサミーをふわりと手で受け止める。

「ママ！もう痛くないんだね、良かった」

「……………サミー。」

無邪気にフィルディアを心配するサミーを見て、元に戻ったのだと分かり涙目になるフィルディア。

「大丈夫？まだ痛いのか？」

「……………ううん、これは嬉しい涙よ。」

そう言って優しく抱きしめる。

「さて、感動の再会はそれくらいにしな。聞きたいことがあるなら言える範囲なら教えてやる。」

はぶられた水晶は可哀想、ということ二人に話しかける。

「そうですね、サミー遊んでね。」

「わ……………い……………」

喜んで部屋の中を飛び始めた。

「それでは、貴方の目的を教えてください。」

「ふん、それを聞いてどうするつもりだ。お前には止められんぞ。」

少し声色を低くして水晶が話す。

「そうですね。ですが、貴方が本当に何をしているのかわからない限り私は協力できません。」

「……………別にお前の力を借りるまでもないが……………まあいいだろう、教えてやる。耳を貸せ！」

フィルディアは水晶に耳を近づけて、話を聞いた。

星音は夢を見ていた。
目の前には一人の少女がいた。
見たことがない少女

その少女は言う
力が欲しいかと
もういじめられないような
凄いが欲しいかと
その為には貴女が
私を受け入れる必要があると

星音は答える
それでもいい
なんでもいい
どんなことでもすると
だから

あたしを強くして

続
く

10・孤独（後書き）

という訳でいかがでしたか？さて、先に言いますが12月末と1月初めはネット環境が不安定な為投稿できないかもしれないので、そこはあらかじめ言っておきます。

それではまた次回お会いしましょう！

11・ロマンを求めて・前編(前書き)

こんにちは、ロンロンの弟子です。今回は前編です。それではどうぞ！

11・ロマンを求めて・前編

場所は変わり、宿の一室

「あの、僕は今日いいですからミュアさん一人で行って来てくださ
い。」

「・・・・・・・・駄目。・・・女の子・・・・キレイにする。」

二人は部屋に戻ってきて浴場は温泉のみである事実を知り話し合いを

「・・・・・・・・行くよ。」

「うわーん。」

するまでもなくティルスは連れていかれてしまった。

「うーむ、原理はこれで合っているはずなんだがな。」

違う部屋で沙汰はパソコンを使い何やら作業をしていた。

「何やってるんだい？」

スイングは何もすることがなくボーっとしていたため沙汰の行動が気になっていた。

「ああ、ティルスにつけた指輪が何故外れないのか考えていた所だ。何が悪いのか見当がつかなくてな。」

「なるほど。」

そう言っただけで作業に戻った沙汰。どうやら原因が分からないようだ。

急に部屋に誰か入ってくる。

「仕方がない、教えてあげようか。」

「誰だ！？」

二人は一斉に侵入者の方を向く。

そこには一人の初老の男、エルドイが立っていた。

「私は物知りの男とでも呼んでくれ。それはそうと指輪の原因知りたくないか？」

「……………なるほど、そりゃ知りたいさ。」

とりあえず只者ではないことを察した沙汰は頷く。

「ならばギブアンドテイクといこう。私は温泉の女子風呂が覗きたい。それを手伝ってくれたら教えてやるわ。」

「……………あ。」

二人同時に声を上げる。どうやら男の正体に気付いたようだ。

「さてどうする、沙汰よ。君は一人の発明家として知りたいのではないか。私も男と話すのはとんでもなく嫌なのだが、今日はなんと月に1度の子供温泉無料の日だな。いつも覗いていたんだがこの前見つかってしまって、ガードがきつくてどうしようかと思っていたのだ。このチャンスを逃す手はないのだよ。」

エルドイは目を血走らせて興奮しながら話す。見るからに危険すぎる。

「……………えーっと、本当に教えてくれるんだな。」

「当たり前だ、このためなら何でもするぞ。」

その言葉に沙汰はにやりとする。

「教えてほしいことが他に2つある。まず沙汰と莉麻の状態と場所を詳しく教えてほしいのよ。」

沙汰は一呼吸おき

「この世界、ディオールの実態だ。」

この部分を強調して言う。

「・・・そこに気付いたか。だがそれだけは駄目だ。」

「いんや、すべて教えてもらわないことには俺も動かないぜ。」

二人は睨みあう。そして

「し、仕方あるまい。この際だ、教えてやろう。だが、まず指輪、安否を話し、その後女湯を覗く。そして真実を話すの順番でどうだ？」

「いいだろう。話してくれ。」

「え、協力するの?」

頷く沙汰を見て驚くスイング。

「今は情報が欲しい。仕方ないな。」

「では話そう。」

エルドイは語り始める。

「何故外れないのか、これは彼女のつけた朱雀の指輪と反発しているのだな。朱雀の指輪が外れれば外すことが可能になるだろうな。」

「ほう、あの指輪何かあると思ったが……。」

うんうんと頷いて聞いている沙汰。彼女のところに気づいていないようだ。

「あの二人だが別々にいるみたいだ。泰人は今修行中だな。今のところ問題ないようだ。が果たして乗り越えられるかな。」

「大丈夫さ。あいつなら何とかするよ。」

「そうっすね。」

二人とも泰人を信頼しているようだ。

「そして莉麻だが、彼女は危険が迫っているな。正直もうすぐ決断が迫られるだろうな。」

「うーん、これは急がないとまずいな。」

少し慌ててるようだ。

「さて、覗きたいから何か貸してくれ。」

「仕方ないな。」

ミニパソに何かのキーを打ちこむ。

「ほれ、静かにして聞け。」

スピーカーを接続すると、音が流れる。

「……………着替えて、……………服を脱ぐ。」

「いや、自分で脱げますから。」

聞こえてきたのはティルスとミュアの会話である。

「……………行く。」

「うーん、どうしてこうなったのかな。」

どうやら脱衣所にいらしい。今から温泉に入るようだ。

「あの指輪には特殊加工してあってな、音声をとばしてこっちにも聞こえるように……。」

「ふざけるなああああああ。」

うるさく叫ぶエルドイ。

「うるせえよ、なんだよ。」

「私は見たいんだよ。見たいんだよ。」

大事なことなので2回言いました。

「仕方ないだろ、それでも犯罪なんだよ。」

「まあ、これでもというか十分犯罪っすね。」

犯罪です。

「くそっ、ならこれを使うからな。」

男は手に持った腕輪を沙汰達に見せる。

「おま……、それって……。」

沙汰はポケットに手を入れる。

「……おいおい、洒落にならんぞ。返せ!」

「これは君の発明品の一つ”融合の腕輪”だな。これをつけた者は自由に他の物を融合できる。この腕輪で融合したものを分離することもできるようだな。」

アイテムの事を知っているように説明するエルドイ。

「それ使って何するんすか？」

「少女と融合して見た目のみをその子にすれば見放題だ!!」

「そんなことのために作ったんじゃないよ!!」

エルドイに飛びかかるが、

「ふん、その程度。」

軽くかわされる。身のこなしが明らかに素人ではない。

「私をなめるなよ、今までこんなこともあろうかと日々鍛えていたのだ。」

「・・・爺さんのくせに生意気だ。」

そしてエルドイは部屋から脱出する。

「逃がすかよ、水の芸術家これを。」

「おおっと。」

ビー玉を投げて渡す。

「あの爺さんをそいつで探してくれ。俺にはミニパンがあるから。」

「了解！」

二人も部屋を飛び出した。

「ふむ、ここまで来れば。」

宿のとある一室の前にエルドイは来ていた。
空き部屋のようだ。

「さてここからどうするか。私が入口まで行くと強制的に男風呂に入れられてしまうし。男と融合するのは嫌だしな。」

「きやつきや。」

するとエルドイの目の前を女の子3人が通過する。ティルスよりも年下のようである。

そのうち一人が女子トイレに入る。

「チャンスだな。」

エルドイは気配と存在感を消して女子トイレに入る。

「?????」

少女二人は何か通った様な気がしたようだが気付けなかった。

少し経って女の子が出てくる。

「じゃ、行くー!」

「……うん。」

何やらテンションが高くなった少女を見て二人はちょっと戸惑ったが、温泉に入れるのが凄くうれしいのだと思い3人で温泉に向かった。

「………寒気!」

「………どうかしたんですか?」

二人は温泉に入っていたが、ミュアは何かを感じたようだった。

続く

11・ロマンを求めて・前編(後書き)

どうでしたか？

というわけで今年も少なくとも後1回は投稿します。

それでは風邪に気をつけてまた次回にお会いしましょう！

12・ロマンを求めて・後編(前書き)

遅くなりましたが、ロンロンの弟子です。今回は後編になりますし、少し長いです。それではどうぞ！

12・ロマンを求めて・後編

3人の少女達は、温泉入口まで来た。そこには警備員らしき女性が入っていく客を見ていた。荷物のチェックもしているようだ。

「さあ、次は君たちか。まあ大丈夫だとは思うが一応確認させてもらうよ。」

そう言つて3人の荷物をチェックされる。勿論怪しいものなど何もなかった。

「よし、通つていいよ。」

許可をもらった3人は温泉の脱衣所に向かった。その時さつきトイレに入った少女がにやりと笑つたが誰も気づかなかつた。

「……………気のせい？」

ミアはさつき感じた寒気は気のせいだと思ふことにした。彼女は今、ティルスと共に温泉で入浴中だ。

ティルスも最初は女湯に入るのをすごく嫌がっていたが、温泉に入るとそれもあまり感じなくなり今はゆっくりとつかっている。

「いや、温泉はいいですね。気持ち安らぐというか、今日一日の

疲れがとれていく感じがしますね。」

「………同感。」

そうポーっとしていると、3人の少女が入ってくる。別にそれくらい普通なのだが、そのうち一人が何やらキョロキョロとまわりを見ている。

「ん、どしたの？」

「あ、いや誰か知り合いがいるかと思って。あはは。」

その後軽く体を流し3人も湯につかる。その瞬間、さっきの少女の右腕に腕輪がしてあるのをミュアは見逃さなかった。

「（……あの子、……ちょっと変？）」

雰囲気の違いには気付いたが特に気にする必要もないと考え、ゆっくりすることにした。

「くそ、あの爺さんどこに行きやがったんだ。」

沙汰はとにかく宿内を駆け回っていた。エルドイを完全に見失い、かなり焦っているようだ。どうやら自分の作ったもので他人に迷惑をかけるのがすごく嫌みたいだ。まあ、当然だが。なんたって犯罪ですから！

「一体どこに………そういえば、あれが使えるな！」
すると沙汰は突然何か思いついたようにミニパソを操作する。するとこの宿屋の地図が映し出されそこに赤い点が一つポツンと点灯している。

「これだ！よし、行ってみるか。」

その場所に沙汰はけっこう早足で向かった。

「………ってマジか!？」

何度目を見開いても変わらない。そこは何をかくそう女子トイレだった。

「あの爺さんめ、どうやら今使おうとしているな!！」

頭に血が上っていたため、何も考えず沙汰は中に入った。幸運なことに中には誰もいなかったが、床に小さめの発信機が落ちていた。

「………はははは、もう許さねえぞ。」

引きつった笑みを浮かべ出ようとすると、………女性の見回り従業員に見つかった。

「何をしているんですか!？」

「え？あ、いやその、友人の落とし物を探しに……。」

何とか誤魔化そうとするが、その従業員は慌てて聞こえていないよ
うだ。

「ととと、とにかくこちらに来てください!!」

「え、あ、ちょっと待って……。」

そのまま腕を引っ張られて事務室に連れていかれた沙汰だった。

「うーん、これ借りても俺っちあの人に思い入れほとんどないから
なあ。」

スイングは沙汰とは逆方向を探していた。どうやらビー玉がうまく
機能していない、というか使えないみたいだ。

「さて、どうしようか……ん？」

何やら悲しい感じの音が聞こえる。スイングはその声の聞こえるほ
うに歩いてみると、一人の少女が泣いていた。見た感じ5、6歳と
いったところか。

「やあ、何かあったのかい？」

「……………ひつく、お母さんとはぐれちゃったの。」

どうやら迷子のようだ。泣き終わるのを待って詳しく話を聞くと、今日少女は母親と一緒にここに温泉に入りに来たらしいがはしゃいで駆け回っていたら母親とはぐれてしまったようだ。

「そっか、ならば俺っちも君のお母さんを探してあげるっすよ。」

「……………本当？お兄ちゃん、ありがとう。」

そう言って手を握ってくる。その手は小さく少し冷たかった。本当にさみしかったのだろう。心なしか握る手の力も強い。

「よし、じゃあ行こうか。」

「うん。」

二人は少女の母親を探すべくはぐれた場所へと向かった。

「畜生、ひどい目にあった。」

事務室に連れて行かれた沙汰は、女性従業員何人かに囲まれてこっ酷く怒られた。なんとか納得してもらえたものの、もうしないように釘を刺された。このように厳しくなったのもエルドイが頻繁に覗きをしているからみたいだ。

「あの爺、絶対に許さないぜ。一度ぶっ飛ばす必要があるしそうだな。」

そう呟いて歩いていると、スイングが少女と一緒に歩いている所が目に入る。ぱつと見て兄妹が歩いているように見えた。沙汰はとりあえず声をかける。

「どうした、何かあったのか？」

「え、ああ。どうやらこの子がお母さんとはぐれてしまったようなんっすよね。」

そう言っつてその子の頭を撫でる。するととてもうれしそうにふにやふにやする。

「それなら、俺が渡したビー玉使えばいいんじゃないか？」

それを聞いてあ、そうかと頷いたスイングは懐からビー玉を出し少女に軽く説明をして手渡す。

少女はそれを手にむむむと念じる。・・・すると

「美弥^{みや}!!!」

それに釣られてきたのか、一人の女性がこっちに向かってきた。

「お母さん!!!」

二人は抱き合う。どうやら本当に母親らしい。感動的な再会シーン

に沙汰達も嬉しそうだ。

そうしてしばらく経ち、少女の母親はお礼を言う。

「本当にありがとうございます、何とお礼を言ったらいいのか。」

「いやいや、俺っちは何もしてないっすよ。」

本当に何もしていないとはいうもののやはり嬉しそうだ。そこに少女がビー玉を返してくれる。それと

「あ、これあげる。昨日洞窟に行った時拾ったの。」

そう言っつてスィングに白く光る石を手渡す。それを受け取るとスィングはにっつと笑い、頭を軽く撫でてあげる。これまた嬉しそうだ。

「じゃあお兄ちゃん達、ばいばい！」

そう言っつて手を振り少女達は温泉に向かって行った。

「さて、目的と外れちまったが、あの爺さんをどうするかだが……」

「あれから結構経ったからもう覗きしてんじやないっすか？」

確かになど頷く沙汰。その顔はとても悔しそうだった。もう駄目なのかと思っつた沙汰だったが

「……そうだ、ティルスやミアちゃんに協力してもらえばいい

んじゃないっすか。例えばさっきの音機能を使っただけか。」

「うーむ、本当は知られたくなかったんだがな。仕方ないか。」

そう言っただけを打ちこんでいく沙汰。すぐに通話可能になる。

「ティルス！聞こえてるなら返事してくれ。」

ティルスのつけている変身の指輪から沙汰の声が聞こえる。ティルスは突然のこととびくりして立ち上がってしまった。周りの視線を一人占めにしてしまい、とても恥ずかしくなった。

「ちょっと、沙汰さんやめてください。ここ女湯ですよ。」

「なるほど、どうやらかなり慣れてるようだな。いや、良かった良かった。」

沙汰が笑っている。それが聞こえたのか周りからまた見られる。ティルスはどんどん顔が赤くなっていった。

「まあそれは置いていて、近くに腕輪をした奴がいるかどうか見てくれないか？」

「・・・いる。」

ミュアにも会話が聞こえていたようだ。ティルスもミュアの見えてい

る方向に目を向ける。すると例の少女が湯につかりながらまわりをキョロキョロ見ている。心なしか嬉しそうに。

「そいつは変態科学者と融合している。俺の発明品を盗んで覗き・・・よりたちが悪いことをしようとしているんだ。」

「・・・え!？」

ティルスとミュアがはもった。そしてミュアは確信する。さっきの寒気はこのことだったのだと。

「そこで俺にいい考えがある。今から水の芸術家の能力を使い、この指輪から大量の蒸気を発生させるからそいつを脱衣所まで連れて来てくれ。警備の人に話して女湯の脱衣所の人を避難させておくから、そこで俺が奴の融合を解いてぶっ飛ばす。こんな感じだ。」

「分かりました。一大事ですからね、任せてください。」

ティルス達は軽く打ち合わせをして行動に移した。

静かに蒸気が噴出する。すると温泉内が白い霧のような感じで見えにくくなる。どうやら入っている人達は少しだけ気にしているようだが大事にはなっていない。

「・・・行くよ。」

しかしミュアには見えているようだ。かなりの早さで少女に近づき

拘束の術を使う。

「!?!」

いきなりなことでも少女も驚いて声を出そうとする瞬間、口をふさぎそのまま温泉を出た。

「よし、腕輪を触って解除と念じてくれ。」

すでにスタンバイしていた沙汰にタオルを渡しながら言われ、ミアは解除と念じる。
するとぶにゅっとして少女とエルドイに分離する。

「……………宜しく。」

ミアは自分と少女にタオルを巻いて少女を背負って一度脱衣所を出た。

「……………なるほどな。私を追い詰めるとは、やるじゃないか。」

エルドイは不気味に笑っている。まだ自分が有利と思っているらしい。

「何か考えがあるんでも関係ないぜ。2発で終わらせる。このエロ爺!」

沙汰はいつものごとく高速でキーを打つ。するとまわりに小さいが大量の陣が展開される。

「現れる、ミニ・カイチヨーズ!!」

すると小さいカイチヨーズがその陣から出てくる。ぱつと見100匹くらいいる。

「行くぜ、カイチヨーズの体当たりを喰らえ。」

すると大量のカイチヨーズがエルドイに体当たりを始める。しかしエルドイは涼しい顔で全てをさばく。どうやら余裕そうだ。

「……はあはあ。」

だが数をこなすごとに徐々に疲れてくる。エルドイは何とかすべての攻撃を受け切り沙汰の方を向こうとすると

いない

「……しまった!!」

慌てて後ろを向くが時すでに遅し、沙汰はすでに陣を完成させていた。

「喰らえ、キャプテンカイチヨーズ。」

そこからものすごい速さでミニカイチョーが発射され、エルドイの腹をとらえる。そしてそのままの勢いで後ろのロッカーに突っ込み決着はついた。

その後、エルドイは警察に捕まった。流石に覗き以上の事をしたので言い逃れは……

「全く、お前は少しは手加減をするということをだな。」

できなかつたが、周りの人たちと例の少女が許してあげて宿立入禁止で済んだ。今宿の外で沙汰に説教をしているようだが、聞き流しているみたいだ。

「さて、本題だ。この世界、ディオールについての真実を教えてくださいらおうか。」

その言葉を聞き、エルドイは説教をやめて真剣な表情になる。

「いいだろう、この世界の真実は」

そしてこの真実により

「闇のみぞ知る。」

沙汰達は何を考えるのだろうか。

続く

12・ロマンを求めて・後編(後書き)

いかがでしたか？ようやく物語も核心に迫ってきました。という訳でこの投稿で今年は終わり・・・と思いましたが、後1回投稿できるかもしれません。その時は読んでいただけると嬉しいです。それではみなさん元気にまた次回お会いしましょう！

13・変化（前書き）

あけましておめでとうございます。遅れました、ロンロンの弟子です。昨年は結局急用が入り先週まで忙しくしていたため投稿が遅れました。今年はそういうことがあれば前もって連絡します。ということですのでどうぞ！

13・変化

場所は変わり、佐野家。

夜も明け日が昇る初夏のある日、星音は目を覚ます。

辺りをキョロキョロ見渡すと突然ニヤツと笑う。

支度を整えリビングへと向かうと朝食が置いてあり両親の姿はもうない。

星音は朝食を済ませ身支度を整え自宅を後にした。

「さあ、今日も頑張りましょう。」

フィルディアは今日も元気に生徒に挨拶しつつ出勤してきた。昨日と違い何か吹っ切れたように見える。

「まあ、俺は奴を探ることが先決なんだがな。奴が動くならそろそろ動くか。」

融合サミーも姿を消して隣を飛んでいた。どうやらフェイルディアは融合を許可したらしい。

「それも重要ですが、まず莉麻さんと話しあう方を優先しましょう。誤解したままではいけませんよ。」

「誤解ではない、そのままの意味だ。あいつが怒っても仕方のないことだな。」

サミーは少し寂しそうに答える。少しは気にしているようで、彼も少しずつ変わってきているようだ。

「……とりあえず放課後にお話ししましょう。それまで私のそばを離れないでくださいね。」

「だから俺は奴を……。」

フィルディアの言葉にサミーは……

「……!?!?」

だったが、何かを感じたのか後ろを見る。そこには一人の少女、星音が立っていた。

「先生、おはようございます。」

「……ええ、おはようございます。」

星音はそう挨拶して立ち去った。

「……遅かった、ヤバいことになったな。」

「これは一緒に行動した方がいいですね。」

そのまま二人も職員室へと向かった。

がらがら

「おはよう。」

星音は教室へとやってきた。しかし誰も挨拶は返さず数人の少年達が彼女を囲む。

「今日も来たか。」

「本当お前はいつまで通い続けるんだよ。あ、学園長の娘だからし
ようがなくか。」

はははと笑う少年達。それ以外の生徒はそのやり取りを無視してそ
れぞれのことをしている。まるでそれがいつもの事のように。

「……つぶぶ。」

星音は突然笑い出す。

「おい、何がおかしいんだよ。」

少年の一人が星音の肩を掴もうとすると

……急に強い力が働き少年は吹っ飛ばされて教室の壁に叩きつけ

られる。

「……え？」

他の少年達は何が起こったのか分からず、ぼかーんとしている。他の生徒も叩きつけられた音に驚き反応している。

「……そうよ、悪夢はおしまい。いい夢に変えてあげる。」

それからしばらくして教師が入ってきてホームルームが始まる。

「そういえば今日はみんな静かだな。やっと自覚が出てきたかな。」

いつも賑やかだったそのクラスは今日は一変して静かだった。いつもうるさい少年達も必要最低限のことしか話さなくなった。少年だけでなく全員が、まるで感情をなくしたように。いや、ただひとりを除いて。

「つぶつぶ。」

星音はその後もずっと笑っていた。その笑みは見る者を恐怖させるような不気味な笑みだった。

キンコンカンと鐘が鳴り、放課後となる。莉麻は今日も普通に登校し授業を受けていた。

「莉麻ちゃん、一緒に帰ろう！」

昨日と同じ少女が莉麻を誘ってきた。

「ごめんね、今日もフィルディア先生に呼ばれているんだ。」

そう、朝のうちにフィルディアに放課後昨日と同じ教室に来てくれと言われていたのだ。そっか、じゃあ先帰るねと少女は言いそのまま下校した。莉麻はそれを見送って昨日の教室へと移動した。

教室に着くとすでにフィルディアがいた。サミーも一緒だ。

「呼び出してごめんなさいね。貴女にお話しがありました。」

「いえ、私こそ昨日はいきなり帰ってしまってますみません。」

莉麻は頭を下げる。流石に反省したようだ。

「いえ、いいんですよ。ではお願いしますね。」

フィルディアが一步下がるとサミーが出てくる。

「・・・まあ、なんだ。ラルゴ使いの事で黙っていたことは謝罪する。だが・・・。」

「ううん、何か理由があったことぐらい分かってる。私こそ話を聞かなくてごめん。」

莉麻は2度目となる謝罪の言葉を口にし頭を下げる。

「・・・まあ、そのことはいい。ヤバいことになったからお前に伝えておこうと思ってな。」

「ヤバいこと？」

サミーの真剣な言葉に莉麻は耳を傾ける。

「今日俺の探してた奴が見つかった。だが手遅れでな、ちょっとまじいかもしれん。」

「・・・そんな！？一体どういうこと？」

「詳しく話してやる。ある事情で水晶になった俺は女の霊の搜索の為サミーを使い探していた。偶然にもティルスと会って奴の手伝いをしながらな。そしてその霊を見つけた俺は力不足だったためお前の肉体を借りて捕まえることに成功した。だが何が起こるか分からないと思った俺はもしもの時のためにラルゴ使いを知り合いに預け修行させることにしたんだ。そして俺は封印するためその方法を知っている人物に会いにこの世界に来た。その後は知っての通り逃げ

られて・・・その霊がある少女と契約をしてしまったらしいということだ。」

と一気に話すサミー。少し息切れしている。

「そっか、なんとなく分かった。お兄ちゃんが無事ならいいよ。でもその女の子は危ないんじゃない？」

「宿主に危害はない。だが周りにはすでに被害が出ている。今日一日学園内を調べてきたが、初等部という所のークラスがやられていた。明日にでも手をうち奴を捕まえることにする。」

「えっと、じゃあ・・・。」

私にもできることはと言おうとしたが

「お前には雪美という女を見ていて欲しい。もしかすると俺の探していた人物かもしれないからな。できるだけ情報を引き出してほしい。」

「そっか、いいよ。何かあったら私が雪美さんを守るから！」

えっへんと胸を張り答える莉麻。

「ふむ、そうしてくれ。一応話は以上だ。じゃあ気をつけて帰れよ。」

「はい！」

大きく莉麻は返事をしてその場を後にした。

「いいんですか、この世界の秘密を話さなくても。」

「いいんだ。余計なことを気にさせるとあの女の情報を集めるのに支障が出そうだからな。」

そう言ってサミーは窓から夕暮の空を見上げた。

異空間

「うん、順調だな。このままいけば……。」

「僕の出番って訳か。」

暗闇の中、謎の男と……白虎が何かしら話していた。
目の前の箱闇の中ぽつんと光っていた。

続く

13・変化（後書き）

どうでしたか？とりあえず次は来週になりますのでよろしくお願
いします。それではまた次回お会いしましょう。

14・偽りの歴史1(前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。お正月も過ぎ落ちついてきました。今回もいきます。それではどうぞ！

14・偽りの歴史1

場所は変わる。

沙汰達はエルドイからそう言われた。

「闇だと。例の寄生野郎のことか。」

「まあ、悪く言えばそうだな。だがこうなったのには深い理由がある。」

エルドイは一息つく。沙汰達も黙って話を聞いている。

「奴は元々一人の人間だった。だがある事件によって水晶の中に封印されてしまった。」

「まさか、その事件って……。」

ティルスが反応する。どうやら心当たりがあるようだ。

「ふむ、ヴィントルの災害のことだ。」

ティルスは驚く。ヴィントルの災害はこの世界の住民ほとんどが知っているほど有名な事件だ。まさかここでその話が出るとは思わなかったみたいだ。

「ちょっと待って下さい。闇の精霊は光の精霊の中に封印されているはずじゃないんですか。それが何故水晶なんですか。それに……もう何がなんだが……。」

ティルスは混乱している。スイングも頭を抱えている。だが沙汰とミュアは普通に聞いている。

「なるほどな、俺は分かったぞ。．．．一部嘘だな、都合のいいよ
うな歴史を教えているんだ!!」

「いや、流石に歴史を偽るなんて．．．。」

いきなりの沙汰の発言をティルスが笑って流そうとすると

「．．．やはり只者ではなかったようだな、その通りだ。」

「えええええ!?!」

当たった。

「さて、今回はここまでだ。どのように偽っているかはまたの機会
にしよう。もう夜も遅い。」

と言いながらもこの場所は洞窟みたいな場所だ。時間感覚はここに
住んでいるものしか分からないだろう。

「分かりました。今日はありがとうございました。」

「これに懲りたらもう覗きなんてするんじゃないぞ。」

懲りるわけがない、恐らくまたするだろう。ティルス達がそう思っ
ているとエルドイは振り返る。

「最後に一つ、最後の試練があるパレス、別名メディスクローズの

神殿の近くに見える遺跡に行ってみるといい。そこで全てが分かるはずだ。」

「!?!」

ミアがその言葉に反応する。しかしその反応を誰も見ていなかった。

「では失礼する。全く男と会うのはこれっきりにしたいものだ。」

今度こそ立ち去った。最後に変なことを言っていたが気にする必要はない。

「さて、今日はとりあえずこの辺にして後は寝ましょう。」

ティルスがそう言い4人は宿へと戻っていった。

夜中、女子部屋ではティルスがぐっすりと寝ている隣でミアはまだ寝ていなかった。

「……眠れない。」

いや、眠れないようだ。ミュアは窓辺にある椅子へと座る。そしてポーンと外の景色を眺めている。

「……………また遺跡に行くのね。」

ふとそう呟いた。遺跡、前に莉麻、謎の少女と共に訪れた場所。そこには何も無いようで何かがある、そんな雰囲気があったことをミュアは覚えていた。

そして自分の事を考える。ミュアは記憶が曖昧だが何故か泰人の事は覚えている、というより知っている。不思議なものだ。そう思った。

「……………。」

これ以上考えても無駄だと思ったミュアはもう寝ることにした。泰人と元気な姿で合うために。そして……………。

「……………何がしたいの……………かな。」

男部屋

「あの爺さんのせいで一時はどうなることかと思ったが、まあ無事に取り返したしいとするか。さて、改良改良。」

沙汰はまたパソコンを弄っていた。

「この石一体何なのかな。」

スィングは少女美弥から貰った石を眺めていた。

次の日、沙汰達は宿を出てこの場所を後にした。
そして青い森の中、この森を出ようと歩いていた。

「次の目的地は、プロフェン村です。そこは親衛隊の一人、青龍の故郷でもありメディスクローズの神殿に最も近い場所です。」

「なるほど、んでそこはどこにあるんだ？」

その質問にティルスが顔を暗くする。

「実は……。」

と、ティルスが話す前に森を出た。すると目の前には

「……え？」

「じじいじじいことです。」

反り立つ壁があった。垂直にそして上まで15mはある。

「ここを登れってことっすか!？」

「登る以外は浮遊の魔法を使うくらいしか……。ここはさっきの所と同様来る人を試しているようなんです。」

まさに挑戦者を笑うかのように立っている壁。それを見て沙汰はふと笑う。

「だったら、カイチヨーを使うしかないな。これでひとつ飛びだ。」

「でもカイチヨーは3人乗りなんじゃ……。」

カイチヨーは3人乗りです。

「大丈夫、昨日の融合の指輪を使って合体させればいいのさ。」

そう言っ指輪を取り出す沙汰は何か自慢げに見える。

「でも誰を何と？」

「ふふふ、考えてあるぜ。」

そう言っ沙汰はまた何かを取り出す。どうやら少年の姿をしたぬいぐるみのようだ。昨日泊まった宿の売店で買ったらしい。

「これで水の芸術家と融合させて人形ベースにすれば重さはオツケーだ。今度は失敗しないから大丈夫、安心してくれ。」

「……まあ、仕方ないっすね。」

渋々ながら指輪をつけたスイングは沙汰からぬいぐるみを受け取る。すると、ピカツと光り人形だけが残った。

「大丈夫か？」

「問題ない。」

という訳でスイングをしまい、沙汰はカイチョーを呼び出す。

「さて、一気に行くぜ！」

そう言って一気上昇していった。

「ふむ、ここまで来ましたか。私達の故郷に。」

シュパルツが出てくる。その後ろには白マントーも一緒にいる。

「俺は奴らを追うことにする。そろそろ出番だからな。お前は例の戦いを見てくるといい。」

「かしこまりました。」

そう言ってシュバルツはパッと消えた。

「……………奴らが登るまで待つか。」

白マンターはしばらくその場で待機していた。

続く

14・偽りの歴史1（後書き）

どうでしたか？次の更新は約1週間ということにしておきます。不安定ですみません。

それでは、また次回お会いしましょう！

15・計画（前書き）

1週間所か2週間もかかってしまいすみません。ロンロンの弟子です。サークル活動が忙しく時間がとれませんでした。・・・と言いつつはこれくらいにして本編にいきましょうか。それではどうぞー！

15・計画

フィルディア達は仕事を終えてマンションへと戻ってきた。するとサミーが水晶と分離する。

「わーい、なんか最近すんごく楽しいよー。」

サミーは楽しそうに部屋の中を飛び始めた。

「さて、どうしようかしら。貴方の仮説が正しいとしてその子がこの世界の鍵だとしたら……。」

「危険だな。今日奴が俺達の前に現れたのは余裕の表れだろう。確かにここまで俺のミスで奴を有利にしまったが、例の人物を見つけることができれば僅かだが可能性はある。」

水晶はテレビに今まで探索した結果を写す。これを見て検証しているようだ。

「もしこの世界があの子によって作られた世界、つまり夢であるならばここはあの子の思うままに作り変えることができますね。」

「俺の考えではここはあの少女の悪夢なのだろう。そしてその少女はここが現実だと思い込んでいる。それがなぜなのか、今思いついたことを話す。」

水晶は更にテレビの映像を別のものに切り替える。そこに映っていたのは

「・・・莉麻ちゃん？」

「莉麻達がディオールにいたということは、もう一つの世界の時間が止まっていることが分かる。もし時間を止められたときですべて寝ていた人がいるとしたらどうなるか・・・。」

その言葉にフィルディアはハッとする。何かに気付いたようだ。

「まあ、その考えで合っているだろう。寝ていて夢を見ているならば、そこから出られなくなりこの世界を現実だと思っていくのだろう。」

「・・・それって、もう一つの世界からディオールに渡る際に生じる副作用と考えられますね。それが関係ない人達にも影響を与えているということですか。」

「・・・だから俺は反対したんだ。」

水晶はそう小声でつぶやいた。フィルディアには聞こえていないようだった。

「では、これらをまとめてこれからの行動方針ですが、少女とあの方を分離させて説得し元の世界に戻ってもらうですかね。」

「言うことを聞かなければ封印する。だが分離と封印は俺たちでは難しい。その力をもつ例の人物、恐らく水本雪美だと思われるがあの女に協力してもらうしかないな。その為に向こうに莉麻を残し慣れさせ話を聞いてもらうと、こんな感じだろう。」

水晶はそう言いテレビへ映像を写すのをやめた。

「まだ時間はあるだろう。すぐに行動に移さないということは、まだ準備ができていないということだ。だがもって後2、3日だろうな。後は莉麻頼みとはかなり不安になる、失敗したかもしれない。」

「大丈夫ですよ、信じましょう。」

フィルディアが気持ちを込めてそう言うと、仕方あるまいと水晶が返した。

水本家

夕食を終えた二人は少し時間を置き、再び温泉に入っていた。莉麻が一方的に話題を出しているようだ。

「それでまだ二日しか経ってないけど、友達もけっこうできたんだよ。」

「そう、それは良かったわね。」

そう言って莉麻の頭を優しく撫でると、莉麻は嬉しそうにえへへと呟く。

「それでね……お姉ちゃん？」

雪美はボーっと上を見ていた。どうやら何か考え事をしているようだ。

「どうしたの、何かあった？」

「え、……何でもないわよ。」

そう言ってほほ笑む雪美だが莉麻には分かった、何か自分に隠していることがあると。

「そっか、ならいいけど……。」

そして莉麻は雪美に抱きつく。

「え？」

「今日一緒に寝よ、少し寂しくなっちゃって。」

莉麻は甘えた声を出す。雪美にお世話になっている為何かしてあげたいと思ったのだろう。

「……いいわよ、一緒に寝ましょうか。」

「うん！」

その後も雪美はボーっとしていた。莉麻はそんな雪美を見て少し心配になるのだった。

「大丈夫、私がお姉ちゃんを守るからね。」

時間は戻り、佐野家

星音はいつものように帰ってきていつものように着替え、食事を済ませてリビングでボーっとしていた。

いやしているように見えるだけだ。心の中で星音と少女は会話していた。

「良かったわね、これでもう苛められることもないのよ。」

「………違う、こんなのを望んでいたわけじゃないよ……。」

「

どうやら星音は少女のやり方が気に入らなかったようだ。やりすぎだと思ったのだろう。

「でも、約束は果たしたのよ。だから……。」

「いや……。」

頑なに拒否。

「……まあ、今日の所はいいわ。そのうち納得してもらおうから。じゃあお風呂でも入ろうかしら。」

「………。」

結局星音は心を許そうとしなかった。身体の方は少女が動かしている為少女はこの場は一回諦めてお風呂に入ることにした。

下着を取り出そうと部屋に戻り箆笥を開ける。

「・・・それにしても小学生にしてはきわどいの多いわね。」

「そ、それは・・・。」

お年頃なのかもしれませんねえ。

続く

15・計画（後書き）

どうでしたか？僕の考えでは小学生背伸びしてる少女がいるイメージなのでこんな子もいるのかなと。いや、相変わらず趣味が全開な気がしますね。

次回ですが実家に帰省するため不定期になります。できれば20日前後には投稿したいですね。遅いと3月に・・・、それは避けたい。それではまた次回お会いしましょう！！

16・因縁の対決・前編（前書き）

遅くなりました、ロンロンの弟子です。いやいや色々大変でした。まあ、後書きに書くことにします。それではどうぞ！

16・因縁の対決・前編

時間は温泉での出来事が終わったところまで戻る。

フィドウとテイライズが白虎の家で合流し今後について話し合っていた。

「私は明日一度城下町に戻ろうと思う。今回あったことを王に報告するために。」

「そうですね、それがいいです。」

その後も二人は今後について話をしていた。

夜、

パソコン
と音がした。

「な、なんですか。」

フィドウはその音に驚く。どうやら室内のパソコンからなっているようだ。

早速チェックしてみるとどうやら沙汰からメールが届いているようだ。

どうやらエルドイの話について書いてあるみたいである。それと・

「早速読んでみましょう。」

それを読んでいると、どんどん顔が青くなっていく。

「ん、沙汰からか。私にも見せてくれ。」

「え、いやこれは……。」

テイライズが横から画面を覗く。するとそこには一緒に添付されていた画像が写っていた。

そうかわいい少女姿のティルスが……。

「……………」

「……………あはは、いやあかわいいですね。」

……シーン

「……………あ、あの本題にいきましたか？」

メールの内容を開く。そこにはエルドイの語っていたことが書いてあった。

「ちょっと待て、歴史の一部が嘘だと!?!?どういことだ。」

「確か今知られてる歴史を書いたのって……。」

そう今のディオールの歴史を伝えたのは、青龍、朱雀、白虎である。ということ……。」

「……これはいち早く伝えなくてはいけないな。」

テイライズはそう言って部屋を出ようとする。それにフィドゥもついていく。

「貴方様一人では行かせられませんからね。役に立つか分かりませんが僕もついていきますよ。」

「……感謝する。」

そうテイライズは呟いた。

二人はそのまま丘の上までやってきた。

「さて、どうやって行きますか？」

「大丈夫だ。こんなこともあるつかともう手は打ってある。」

……すると、エンジン音が聞こえてくる。それがどんどん近づいてくる。

どうやら王族の車のようだ。

「この時間は列車もないからな。さっきこの近くの奴を呼んでおい
た。」

「流石ですね。」

車から一人の初老の男が出てくる。

「テイライズ様、フィドウ様、お乗りください。急いで城へ参りま
しょう。」

「宜しく頼む。」

「お願いします。」

二人は男の車に乗り、城下町に向かって出発した。

車に乗ってる間テイライズは夢を見ていた。

そうあのとき見てしまったティルスの少女化の夢だ。

そう、妄想100%の・・・。

「テイライズくん、おはよう。」

少女ティルスは今日も可愛かった。

私、テイライズは今朝もティルスと会っていた。私たちは同じ年だ。同じ学びやで過ごしてきた。彼女はとても可愛く人気があった。だが

「大丈夫、あたしはテイライズ君が大好きだから。」

そう言ってくれたのだ。私は王族の子だけあつて周りには何人か付き人がいた。それが嫌だった。もっと気軽に付き合える友人が欲しかったのだ。

そんなある日一人の少女が私に声をかけてきた。

「貴方いつもさみしそうだね。どうしたの？」

「別に、私はいつもこうさ。王族だからな。」

そう、そっけなく言った。私に付きまとう人間はどうせ、王族関係者と関わりを持ちたいやつだけだと思っていたからだ。だが

「王族とか平民とか関係ないよ。あたしはテイライズ君、貴方とお話したいんだ。」

初めて聞いた。今まで私自身と話をしたいなんて言われたことがなかったのだ。

正直とても嬉しかった。
そして私はティルスと会話をしたのだった。

「・・・ティライズ君？」

おっと話を戻そう。今は学びやへ登校する所だったな。
さて今日もティルスと共に行こうじゃないか。

「ああ、今いくよ。」

私は幸せだった。

キキーーーーー
と急ブレーキがかかる。

「な、何だどうした。」

テイライズはそれに驚き目を覚ました。どうやら車の前に人が立っているようだった。白いマントを被っていた。

「ふむ、どうしましょうか。」

初老の男はかなりできるようだ。目の前の男がやばいことを肌で感じ取った。

「仕方ないな、私が行こう。」

テイライズは不機嫌だった。いい夢を見ていたからかもしれない。車から出て男の前に立つ。

「全く朝早すぎだ、眠くて仕方ない。」

「だったらそこをどいて寝ている。」

だが男はどこうとせずマントを脱いだ。そこには一人の少年が立っていた。

「今あなたにを王に会わせるのは駄目なんだよ。悪いけどお前も眠っていてくんね?」

「そうか、だったら貴様を倒しても通させてもらうことにする。」

そう言ってテイライズが構える。

すると少年は術を展開する。陣が出現しそこから炎が生まれテイライズに襲いかかる。

「うーむ、あまり戦うのは好きじゃないんだがな。」

そう言つてテイライズは右腕を上げる。

するとピカツと光る。すると少し短めの剣を握っていた。

「・・・そら!」

それを振る。するとたちどころに炎が消える。

「やはりあんたもかなりやるようだな。ああ眠い。」

「人に知られたくないからあまり戦いたくないんだがな。・・・さてと、いくか。」

そう言つてテイライズは剣を構えた。

朝日が昇る中二人の男が戦闘を開始しようとしていた。

続く

16・因縁の対決・前編（後書き）

どうでしたか。

実は話をまとめた物を失くしてしまい探していました。

後引越しします。この二つで遅れていました。

さて、私としては番外編でも書きたい気分ですので、後編終わった
ら書くかもしれせん。15・5話でも書きますか多分。

それではまた次回お会いしましょう！！

17・因縁の対決・後編（前書き）

遅くなりました、ロンロンの弟子です。地震の影響で遅くなりました。

詳しくは後書きで、それではどうぞ！

17・因縁の対決・後編

テイライズが生まれる前の話。

「全くしくじったぜ。こんな失敗をするとは。」

城下町の外で一人の男は瀕死の重傷だった。今すぐに死んでもおかしくない、それほど大きな傷を負っていた。

「駄目だよ。いなくならないで、兄さん。」

そんな男を兄と慕っていた少年がいた。その少年は目に溜めた涙を溢れさせて男に呼び掛ける。

「……泣くな、マイブラザー。お前はどんな時でもよく寝る健康な男だったな。」

男は最後の力を振り絞り少年に笑いかける。そして

「……いいか、これから何が起こるか分からない。お前が俺の仇をとる気にいるなら……。」

そう言い目を閉じた。

「……兄さん？ねえ、目を開けてよ、兄さーん！ーん！！」

少年の悲痛な叫びが辺りに響いた。

現在

空にシュバルツがいた。

シュバルツは上空で二人の対決が始まる所を見ていたが

「・・・さてと、報告しに行きましょうか。」

どこかに消えた。

「早く終わらせて寝たいからね、こっちから行かせてもらおうよ。」

そう言うと、少年は高速で術式を組み上げていく。そして、完成した陣から巨大な岩が生み出されティライズに向かって発射される。

「私にその程度の術が通じると思っているのか。」

そう言って軽々とその岩を切り裂き、巨大な岩が一瞬でバラバラに

なる。

「だよね。じゃあこれで終わってくれないか。」

そう言つて、再び高速で術式を組み上げていく。そして、展開。そこから炎で創られた蛇が召喚される。火の蛇は、地を這つてテイライズに近づいていく。かなりのスピードだ。

「なかなかだな。・・・だが！」

テイライズは手に持った剣を小さくする術を唱え、ナイフサイズにする。そして、一瞬で蛇との距離を詰める。

「!？」

一瞬のことで蛇も驚いたようだ。それをテイライズは逃さず蛇を切り裂いた！少年は、蛇に再生能力をつけたのでそれほど気にしていなかったが、

シュワァァァー！

火の蛇は消滅した。

「・・・お前の剣っぽい物、魔術を無効化するタイプだな。とんでもないレアアイテムじゃないか。流星は王族というわけか。」

「そんなことはいい。もう分かっているだろう、貴様じゃ私には勝てん。」

思いつきつて言ったように聞こえるが、あながち間違えでもなかつ

た。

相性としてはティライズの方が有利なのは明確だ。

「そんなのやってみなけりゃ・・・・・・・・・・・・・・・・!?!?」

これまた一瞬だった。少年の目の前までティライズが来ていたのだ。流石の少年も今から術式はつくれない。

「ていや!?!」

いつの間にか元のサイズになっていた剣でそのまま少年を右肩から右下に向かいズバツと切り裂いた。

「ぐっ!」

痛みを耐えティライズとの間をとる。どうやら外傷はないようだが、凄く痛そうだ。

「私の剣は傷は残らない。だが、かなりの痛みがきているはずだ。」

「ちい、・・・・・・・・これはかなり効いたぜ。」

相当ダメージがあるようだった。傷はないとはいえ切り裂かれた時とほぼ同じ痛みがきている。普通なら立ってはいられないのだが、少年はきつそうにしながらも立っている。

「私の方が強いのは明らかだ。これ以上は止めておいた方がいい、そこで寝ている。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

その通りだった。今のままでは明らかにティライズの方が上だ。王族であるからそれほどでもない少年は考えていたようで、色々な意味でダメージは大きい。もう戦えるほどの力も残って

「・・・駄目だ、王族にだけは負けるわけにはいかないんだ!!」

少年は咆哮した。

そして自分の肉体に術式を描いていく。

「俺の兄さんを殺した王を許すわけにはいかない!!」

術式を描き終わると少年の身体が輝く。

そして徐々に肉体に変化が訪れる。

身体全体が毛深くなり、爪が鋭く、まさに二本足で立つ狼だった。

「なるほど、獣族か。そういえば昔、獣族の少年を連れた男が王の暗殺をしてきて撃退したって話を聞いたな。」

「それは違う!!兄さんは王の秘密を暴こうとして振り返り討ちにあった。どうして真実はいつも隠蔽されてしまうんだよ。」

そこでティライズは気付いた。沙汰から送られてきたメール、真実は闇のみぞ知る。

「だから俺はお前を王族にするためにある術式を使った。空間移動が使えない者が王になる、それは国の一大事だからな。そしてその隙を狙い王を暗殺する予定だったが、・・・それは俺一人ではできなかつた。だがある男が俺と組んでくれてな、ここまで上手くやってこれたんだ。だから・・・、ここで負けるわけにはいかない。」

そして動き出す。テイライズが身構えるより早く狼少年はテイライズに間合いを詰めた。

「・・・・・・・・ぬう。」

振りおろされた爪を弾こうと剣を出す。だが

パキーン

剣が折れる。

「・・・・・・・・し、しまった。」

遅かつた。剣で弾ききれず右腕を切り裂かれる。今度は豪快に地が噴き出た。傷口はかなり深い。

「ぐあああー!!」

あまりの痛みに声が出てしまった。右腕からはぼたぼたと血が流れている。

「さて、今度はこっちが追い詰めたぞ。観念して近くの病院で寝てるんだな。」

「・・・嫌だ、私もここで引くわけにはいかないんだ。」

なんとか立ってみせるが、見るからに右腕が痛そうで動きそうになり。

「だったら、立てないくらいにしてやるよ!」

そう言ってまた間合いを詰められる。剣が折れており対応のしようもない。

テイライズは覚悟を決めた。

「駄目です!!」

突如フィドウが飛び出しテイライズに体当たりする。そして狼少年に背中を向ける。

「何!??」

そのままフィドウは切り裂かれた。

「おい、大丈夫か!??」

テイライズは痛む右腕を抑えフィドウに駆け寄る。

「・・・テイライズ・・・様。」

気絶した。初老の男が駆け寄ってきてすぐに応急処置を始める。

「邪魔が入ったな。自己犠牲とは、お前も好かれているな。」

「・・・残念だがもう貴様との戦いを終わりにする。次で決着をつける！」

テイライズは表情を変えた。どうやら本気を出すようだ。左腕で折れた剣を構える。

「そんな剣ではどうしようもないだろう、俺の勝ちだ!!」

また間合いを詰める。そして爪を振りおろす。テイライズは折れた剣で弾こうと対抗した。

「馬鹿か、それじゃあ意味が・・・」

ガキーン

爪が弾かれる。

「何!!!??」

狼少年は驚き剣を見る。すると

・・・剣は確かに折れている。だが、剣から不思議な感じがした。

「・・・魔力補強か。」

そして狼少年は切られた。

狼少年は元の少年に戻った。どうやら気を失うと戻るようだ。

「……この男が私を王族にしたのか。それよりも、真実……と……は。」

テイライズも倒れてしまった。どうやら限界だったようだ。そして倒れた3人を初老の男が応急処置を施し、車に乗せて病院へと走らせた。

その様子を上空でシユパルツが見ていた。

「王子が彼を倒すのは予定外でしたね。彼はもう要りません、そろそろ最終段階に入りましょうか。」

そう言っつて姿を消した。

城で王は玉座に座っていた。

「……そろそろ限界なのかもしれないな。」

そう呟いた。

続く

17・因縁の対決・後編（後書き）

どうでしたか？なんか無理やり感がありますね。

そして地震の被害ですが、結構きついです。下手すると週1もきついかもしれません。落ち着けばいいんですけどね。皆さんも大変でしようが頑張つて乗り切りましょう。

・・・原発怖い。

そして次回は番外編にしようと考えています。なんか明るい話とか書きたい気分なので。

それではまた次回お会いしましょう！！

番外編 1・沙汰の発明（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。今回は番外編になります。何やろうか考えましたが久しぶりに主人公を出したかったんでこれで。ではどうぞ！

番外編 1・沙汰の発明

このお話は何でもありの番外編になっております。本編では大変なことになっていくキャラクターも普通に出てきます。そういう自由な所なのです。それでもいいぜという方はこのままご覧ください。

ここは番外編の世界。何でもありの世界である。今日は泰人と沙汰が発明品について語っていた。

「そういえばお前の発明品っていくつあるんだ？気になっていたんだ。」

「ふむ泰人、良い質問だ。流石は俺の親友！！」

発明品の事を聞かれて上機嫌の沙汰。泰人はそれほど興味はなかったが、今後のために聞いてみることにしただけだったが、思った通りの反応で特に驚かなかった。

「軽い発明品ならかなりあるが、どれも実用的ではないから使っていないんだ。だから今の所は金と銀の発明をよく使っているな。金が召喚獣で銀は物だ。それぞれ3つずつあるから計6だな。召喚の場合はこのミニパソを使わないと召喚できないんだけどな。」

そう言ってミニパソを見せる沙汰。自分と身内で作ったもので本人のお気に入りである。サミーから力を受け取り特別な能力を得たの

だ。

「このミニパソにも色々能力がついているけどな。とりあえず金と銀の説明かな。」

「そうだな、今後その6つが軸になってくるから俺も一応聞いておこう。」

泰人が出ていない間は沙汰が主役級となるため泰人自身も聞かざる終えない。かなり心配のようだが……。

「これ以外は今作る暇ないからな。まずは召喚獣だ。金のヒポポスだな、カバっぽい見た目でその口から出る特殊な液は術式や特殊な効果を無効化することができるからかなり便利だ。」

「そうだな、そいつのおかげで俺は命を救われた時もあったしな。結構信用しているぞ。」

沙汰が使うカバは見た目とは裏腹に意外に使えるのだった。

「そして次はカイチョーだな。空を飛べる鳥でな、なんと言葉も話すことができるとても賢い鳥なのだ。だけど、残念なことに3人乗りつてところは……。仕方ないね。だが、小さくすれば大量に召喚できるし戦闘向きだと思うぞ。」

「うーん、凄いやと思うんだけど……。なんだかなあ。」

綺麗な黄金の鳥である。知能も高いので自分で考え行動もできる。本人は名前を気に入っていないらしいが沙汰が無理やり納得させたのだった。

「お前は相変わらずだな。」

「ああ、それだけが取り柄だ。それで3つ目だがまだ本編で出していないから紹介はまた今度だな。ピンチにでもならない限りは使う気はないが。」

「どうやら最後の召喚獣はかなり凄いなものらしい。過度な期待はしないでください。」

「さて次は銀だな。導きのビー玉、変身の指輪、融合の腕輪の3つだ。これらは全部本編で出てるな。ビー玉は思いが強いほどその人の場所が分かるというすぐれものだ。強くなければ全く場所が分からない、まあこれ作るの一番大変だったから仕方ないね。」

「確かに思いや気持ちに反応するものだから大変そうではあるな。」

「そうだ。そして次は変身の指輪。こいつはつけた者の肉体を変化させるのだよ。本当は読心術が良かったんだけどなあ。」

「そう言っただけで妄想にふける沙汰。かなり危険な感じがする。」

「はいはい、とりあえず説明を続けてくれ。」

「そうだな、基本は見た目のみだ。だが今改良中でな、肉体強化や能力コピーも可能にするすぐれものだ。今ティルスに貸してるけど実はもう一つもう作ってあるのだ!!」

「取り出す沙汰。ティルスに貸しているものと同じタイプのような。」

「そろそろ完成も近いからな、楽しみにしているといいぞ。はははははははははは。」

「……とりあえずティルスが可哀想だな。全く仕方ない奴だ。はあとため息をつく泰人。気苦労が多い彼、大変です。」

「最後は融合の腕輪だな。あのふざけた爺さんに勝手に使われた奴だ。あれには流石の俺も困ったぜ。」

「……おまえでも困ることってあったんだな。」

「当たり前だ。俺の発明で分かりやすい犯罪されたら困るんだよ。」

「……おい、お前待て。」

この物語はフィクションです。分かりにくくても犯罪は犯罪ですので絶対にやめましょう。

「それでこれは色々なものと合体できるんだ。俺は肉体強化のために作ったんだがまさかあんな使い方があったとは。一応覚えておくか。」

「色々と使えそうでいいがあまり変なことに使つなよ。それ一歩間違つとヤバい代物だからな。変身の指輪もだけど。」

沙汰が取り出した指輪と腕輪を見る泰人。今泰人が近くにいないためスイングに全てを託すしかない。

「頼んだぞ!!」

番外編 1・沙汰の発明（後書き）

どうでしたか？

設定としてはかなり大雑把なので、細かくは気にしないで頂けると幸いです。

という訳で次回は本編です。投稿は出来る限り10日以内で行きたいですがどうなるか分かりません。努力します！
それではまた次回お会いしましょう。

18・始まりの合図（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。色々と忙しくなかなか時間がとれませんが、今回は1週間できました。それではどうぞ！

18・始まりの合図

場所は変わり佐野家

星音はちょうどお風呂に入っていた。

「貴女は誰なの、何で私と一緒にいるの？」

「さあ？それよりやっぱり小学生ね、色々と未発達だわ。」

星音の話を軽く流して少女は星音の身体を確認する。勿論小学生な為まだまだである。そんな体型が好きな人にはいいのかもしれないが……。

「ちょっと！気にしてることを言わないで。」

「へえ、気にしているのね。別にこの年ならこんなものだと思うけれど……。」

少女は内心笑みをこぼす。何やらいいことを思いついたようだ。

「じゃあ大きくなった自分を想像してみてはどうかしら？面白いことが起きるかもよ。」

「え？う、うん。」

とりあえず少女の言うとおりに自分の大きくなった姿を想像してみる。
……すると

ポンっ

成長した。

「さてどうなったかしら？」

鏡の前に立ってみる。

するとだいたい高校生くらいの成長した星音の姿がそこにはあった。胸も大きくなり他の所も成長している。

「嘘!どうして……。」

「これが貴女の力よ。思い通りになる世界、貴女の望んだ世界。ここがそうなのよ。」

ここぞとばかりに言葉攻めをする少女。星音にはかなり効いているようだ。

「もしかして貴女はもう一人のあたしなの？」

「うふふ、どうかしらね。貴女がそう思うならそうなのかもね。」

はぐらかした。徐々に距離は狭まってきたように思える。

「いつでもいいわ、貴女が私を信用してくれたら私に全てを任せてちょうだい。きつとうまくやってみせるから。」

「……うん。」

甘い誘いに乗ってしまった星音。少しずつ信用してきた証である。

「さて、じゃあ元に戻りましょうか。」

「えーっと、・・・あたししばらくこのままがいいんだけど。」

「そう？貴女がいいならいいわよ。」

そうして星音はしばらくその姿を満喫していた。

水本家

莉麻と雪美はその後お風呂からあがり、夜が更けていった。
そして莉麻は雪美と一緒に寝に雪美の部屋を訪れた。

トントント

「お姉ちゃん、入っていいかな？」

「うん、いいよ。」

返事が来たのでそのままドアを開けて入る。
部屋の中はベッド、机、箆笥、本棚と必要最低限の物しか置かれて
いなかった。

「ベッドは一つしかないから一緒のベッドで寝ましょつね。」

「うん！」

もう寝る準備はできている二人はそのままベッドの中へと潜り込んだ。

「……お姉ちゃん。」

「ん？」

ベッドに入って少し時間が経った頃、莉麻は雪美に声をかけた。

「何か私に隠してることあるでしょ。話してくれないかな。」

「……。。。。。。。」

黙ってしまふ雪美。どうやらかなり話していくことらしい。

「大丈夫だよ。話したらきつと楽になる、私を信じて欲しいな。」

「……そうね、じゃあ話してみようかな。」

決意を決めたようだ。莉麻と向き合う。

「実は最近姉さんが帰ってくるような気がするの。」

「それって、家を出ているっていうお姉さん？」

「そうよ。夢に見るの、姉さんが私の所に帰ってくる夢を。でもその姉さんは私の知っている優しい姉さんとは違う、冷酷で残酷な・
・変わってしまった姉さんなの。もし本当にこうなったらと思うと怖い、あんなに大好きな姉さんなのに・・・・・。」

雪美の身体は震えていた。目は潤んで今にも泣きそうだった。それは見ても分かる大好きな人を心配する女の子の姿だった。

「……私あまり頭良くないけど大丈夫だと思うよ。」

「……でも」

「だってお兄ちゃんがきつと来てくれるから。」

「え？」

莉麻はニコツと笑う。その笑顔を見て雪美は何故か安心できるような気がした。

「私がピンチになったらいつも助けてくれたよ。だから私のお姉ちゃんのお姉さんもきつと助けてくれるよ。絶対!!!」

「……ふふ、貴女は本当にいい子ね。」

雪美も笑う。莉麻の頭をそっと撫でてあげる。

「じゃあ私も信じてみようかしら。貴女の信じてるお兄さんを。」

「うん!」

こうして隠し事を話した雪美の表情は清々しかった。この後二人は仲良く抱き合って眠りに着いた。

それから数日、何事もなく時間が過ぎていった。

莉麻と雪美は更に絆を深め、星音と少女は徐々に打ち解けていった。水晶とフィルディアは何度か星音と少女を引き離す為に近づこうとするがことごとく邪魔をされ失敗。何かの時のための対抗策を考えることしかできなかつた。

そしてある日ついに恐れていたことが起こってしまう。

「畜生! なんだあの障壁は。どうしてあの子供に近づけないんだよ。」

「どうやら私たちが思っているよりも早くあの方がことを起こした

とみていいでしょう。あれから数日過ぎましたしもしかするともう・
・・・・」

職員室で仕事をしていたファイルディアはテレパシーを使いサミーと
会話していた。

「もう莉麻と奴らに賭けるしかないのか。．．．この俺がこの様と
は。」

「信じましょう、莉麻ちゃんと泰人さん達を．．．。」

場所は変わり星音の教室。
授業を受けていた星音がついに．．．。

「ねえ、ちよつといいかな?」

少女に心の中で会話する。

「ん、どうしたのかしら?」

「うん、そろそろ貴女の事を信じてみてもいいかなって思っ
て。」

その言葉に少女は微笑する。ついにこの時が来たのだと。

「いいわ、じゃあ私の事を信じるって思い続けて。」

「うん。」

こうして契約は完了した。

学園、この世界の雰囲気は急に変わる。
何かが始まる、そんな気がする空気だ。
果たして何かが始まるのであろうか。

続く

18・始まりの合図（後書き）

どうでしたか？

この話もそろそろ中盤ですかね。今年中には終わらせる予定ではありませんが。

次の投稿ですが、約10日前後だと思います。出来るだけ早くできるようにします。

それではまた次回元氣にお会いしましょう!!

19・最後の試練・前編（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。今回も時間が取れました。いつもこうならいいんですがね。今回は前編です。それではどうぞ！

19・最後の試練・前編

びゅーーーん

カイチヨーが一気に崖を登りきる。

「着いたぜ、ここがプロフェン村か。」

沙汰達はカイチヨーから降りる。目の前にはいかにも古そうな村が広がっていた。

ポケットから人形を取り出す。するとすぐに変化が起こり、スイングと人形に別れた。

「いやいや、これ結構楽つすね。全然違和感もないし。」

「そうなんだよ君、その違和感を失くすところにかなり力を入れているんだぜ。」

とまあ軽く会話をした後とりあえず村に入ってみることにした。

まずは宿を確保した。男女2ずつで。

「今日中にでも試練をすべて終わらせたいです。少しでも早く戻りたいですよ。」

少女テイルスの呟きを軽くスルーし、情報を集めるべくまずは宿の

人に話を聞くことにした。
沙汰は受付に行った。

「ちょっと聞きたいことが……。」

「旅の人、ちょうど良かった。長老が貴方達を呼んでいる。長老の家はこの宿の近くだ。」

そう言われたため、4人はとりあえず長老とやらの家に行くことにした。

「ここか、……分かりやすいな。」

裏に大きな屋敷があった。この古い村には不釣り合いだった。そしてここが長老の家のようにだ。

「……これだけ警備がしっかりしてれば分かるにきまつてるっすね。」

「それでは行きましょう。」

屋敷の前の警備の男たちはすぐに旅の者と知ると屋敷の中に通してくれた。
屋敷の中はとても広かった。なんか豪華な絵やら壺やらが飾ってある。

「・・・・・・・・豪華。」

「ああ、こんな人を拒絶した場所にあるのにな。まあ、こんな所だからってのもあるかも知れんが。」

長老の部屋に通された。そこには白い髭を蓄えたいかにも偉そうな男が椅子に座っていた。

「下がってよいぞ。」

「はっ！」

男たちは部屋を出ていった。

「さて座ってください、客人など何年ぶりのう。」

沙汰達は言われた通り座る。すると長老は話します。

「さてこんな辺鄙なところに来たのには何かあるのだろう。話してみなされ。」

「はい、実は・・・・・・・・。」

ティルスは試練の事を話した。

「なるほど、ついにこの時が来たのか。」

「何のことですか？」

すると長老は真剣な顔つきになる。

「ここはあの親衛隊の一人、青龍様の故郷じゃ。試練の神殿は親衛隊と所縁のある所に建てられた。いつかは来るとは思っておったよ。だが……。」

長老は4人の顔を見て言う。

「王子候補がおらんようじゃな。その娘はティルス様に似ておるようじゃが……。」

少女ティルスの方を見てそう言う。それに対して

「実は事情がありまして僕がティルスなんですよ。」

少女ティルスはそう答える。指輪のことも説明する。

「なるほど、それは災難でしたな。」

「分かってくれますか!！」

ティルスは嬉しそうだった。自分の理解者がいたのだ。沙汰達はほとんど気にしていないから理解者は嬉しいのだろう。

「となれば行きましょう。わしが案内しましょう。」

ということとで長老についていくことにした。

上空

白マントの男が屋敷から出ていく沙汰達を見ていた。

「……………」

「いかがですか？」

「……シユパルツか。」

男の後ろにはいつの間にかシユパルツがいた。男は特に気にしていないようだが。

「ご報告に来たのですがいいですか？」

「話せ。」

シユパルツはテイライズと少年の対決について話した。そのテイライズ達が王都の病院で入院していることも。

「確かに予想外だ。奴は白虎より少し劣るくらいの実力だ。テイライズがそれほど強いとはな。」

「はい。これからどうしますか？ティルスの抹殺は。」

「いや、それはもういい。闇の奴が動いた時からすでに違う手は考

えてある。」

.....

「なるほど。ではもう復活したのですね。」

「ふむ、やはりあれを玄武の孫に渡して正解だった。向こうの事が丸分かりだからな。フィルディアにも感謝しておこうか。」

「ということは逆に試練を合格してもらわないと困りますね。」

男は深く頷く。

「朱雀を倒せないと駄目だからな。まあ、駄目なようなら力を貸すしかないな。」

「分かりました。」

長老に連れられて4人はメディスクローズの神殿前まで来た。

「それでは良い結果を期待していますぞ。」

そう言つて長老はもと来た道に戻つて行つた。
メデイスクローズの神殿はさっきの屋敷くらいの大きさがある神殿
だった。

「さて俺がティルスと共に行くぜ。お前らはここで待っていてくれ。」

「では頑張つてきますよ。」

2人は神殿の中に入っていった。

「……………頑張れ。」

中はただただ広がつた。そして目の前に龍の石像があるのみで他には何もなかつた。

「来たか……………ん？」

石像が喋つたが急に口ごもる。

「ふむ、今度の王子候補は女装趣味でもあるのか。まあ、別に悪い
とは言わんぞ。」

「うわーん。」

勘違いされてしまった。

「さて始めるとしようか。今回はある作られた空間に行ってもらおう。そこでレゾナールと呼ばれる石を手に入れて来てもらう。手に入れた時合格としよう。それでは早速行ってもらおうか。」

「いつでもいいぜ。」

「大丈夫です。」

二人は答える。準備はできているようだ。

「……まあ、多少の事には動じないように気をつける。では行ってこい。」

そう言われて二人は違う空間に飛ばされた。

果たしてどのような試練なのか!?

続く

19・最後の試練・前編（後書き）

どうでしたか？今回は前・中・後編の予定ですので次も宜しくお願
いします。

さて、今日は僕の誕生日です。ここまでくるとあまり年とっても変
わりませんね。とまあ、そんな感じで頑張って行きます。

ではまた次回お会いしましょう！

20・最後の試練・中編(前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。さて変な天気が続きますね。どうか身体には気をつけてくださいね。僕は元気ですよ。それではどうぞ！

20・最後の試練・中編

一瞬の出来事だった。沙汰は見知らぬ場所に飛ばされていた。

「なんかテレビとかで見るような風景だな。」

まるで古の都である。レンガ造りの古い建物が町全体に建っている。そして気付いた。近くにティルスがないことに。

「とりあえず探してみるか。」

ティルスを探しながら沙汰は考えていた。今回の試練は最後なのだから難しいものになるだろう。

目的はレゾナルと呼ばれる石を見つけること。これに何か意味はあるのだろうかと思った。

「今までの試練を振りかえってみるか。最初以外はいずれも王と従者の力を見るような試練が多かった。4つ目は朱雀が関わっているらしいがちゃんと分かっていない。まあ、戦うことにはならないと思うが、一応考えの一つに入れておこう。そして今回か……。」

そう考えていると前の路地から一人の少女が飛び出してきた。見たことのある姿だ、というよりティルスだった。

「おう、大丈夫だったか？はぐれたから驚いたぜ。」

「……え？」

そう言われて沙汰は考えた。そして少女を見た。両手に指輪をして

いない。それに着ている服は純白のドレスだ。ミアが選んだ服ではない。

「ちょっとごっちい。」

「あのちよつと・・・。」

沙汰は出来るだけ気がなさそうな所へ少女を連れ込んだ。少女は特に抵抗しなかったがかなり戸惑っているようだった。

そして裏路地に少女を連れ込むことに成功する。

「さて、お前は何者だ？そっくりさんキャラクターはかなり重要だと思っんだが。」

「えっと、・・・とりあえず自己紹介しますね。私はティルアーネです、この国の王女をしているんですよ。」

と返された。名前が似ているのはこの際どうでもいいとして・・・

「あのさ、王女さんがこんな所にいるわけないだろう。誰かに狙われて逃げて来たんだったら別だが。」

「それは・・・。」

するとティルアーネは沙汰に抱きついてくる。

いきなりの事で沙汰も少し動揺するかと思いきやそうではなかった。

「ふむ、ティルスか。王女と融合でもしたのか。まあ不思議でもなんでもないが。」

「な、何で分かるんですか？」

ティルアーネは驚く。どうやら本当のことらしい。自分から話すまえに当てられたのには流石に驚いたようだが。

「こんな町中で普通の王女に会う訳ないからな。そいつがキーならお前かと思ったんだがその口ぶりでは恐らくあってるようだが、つか俺相手に女言葉はいらねえよ。・・・まあそっちに目覚めたんなら別だけどな。」

「違いますよ!!！」

ティルアーネは思いつきり否定する。

「さっきのは本物の王女です。今二人で一つの身体を共有している訳です。」

「知ってるよ。冗談に決まっているじゃないか。」

振り回されるティルアーネ。とても疲れたような表情をしている。

「さて、王女さんに質問だ。こんな所歩いてんだ。何かあったんだろっ?。」

「はい、実は……………」

いつの間にか出てきた本物のティルアーネの話はこうだった。

彼女はこの国、クリスタの王女で今日はお忍びでこの町をまわっていたようだ。

その時とある一人の男に襲われてしまい、逃げている所でティルスと融合。そして今後の事を話している所に沙汰と出会った・・・という事だった。

「じゃあそいつを倒せばいいな。さて、報酬何かないか？例えばレゾナルと呼ばれている石とかさ。」

「あ、はい。この国に伝わる宝石、確かにレゾナルと呼ばれています。」

そう言つて懐から宝石を取り出す。赤紫に光るそれは宝石を知らないやつが見ても丸分かりだった。

「じゃあ報酬を先にもらつと・・・」

スカッ

沙汰の手が空をきつた。

「何!？」

王女が何かした訳ではない。第3者が現れて奪つたのだ。沙汰は振り返る。そこにいたのは・・・

「ふむ、勝手に過程を飛ばされるのは面倒ですね。」

赤い服を着た男、朱雀だった。

「な、何故貴方がこんな所に!？」

ティルアーネ、いやティルスが後ずさりする。それを見た沙汰は瞬

時に理解する。

「お前が朱雀か。全く嫌な予感の方が的中しちゃったか。」

「面倒な会話はいりません。私を倒してこの宝石を手に入れば、一気に二つの試練を合格したことになり全過程が終了する訳です。いや、なんて面倒じゃないんだ。嬉しいですよ。」

朱雀は無表情のままはっはっはと笑っているような声を出している。

それはとても不気味だった。

「・・・こいつは少し危険かもな。」

流石の沙汰も危険を感じ取ったようだ。ミニパソを取り出して戦闘態勢に入る。

そして慌てているテイルアーネを戦闘場所から少し離れた所に避難させる。

「貴方は玄武の孫ではないですね。正直どうでもいいようなのと戦闘するのは時間の無駄でとても面倒なのですが・・・。」

「大丈夫だ。白虎やここまで出てきた変な奴らのデータは解析済みだ。そう簡単にはやられんし勝つ自信だってあるぜ。」

大きく出た。だが沙汰はかなりの自信があった。

あれから暇な時間は研究に使ってきたのだ。それもすべてテイルスの試練を合格させるため・・・だけではないようだ。

「なるほど。では白虎位はあるとみていきますか。ですが私は・・・

「

気がつくとも沙汰の後ろにいた。そして思いっきり背中を蹴られる。

「ぐあ。」

おもいっきり吹っ飛ばされる。

「彼より強いので気をつけてくださいね。」

そう言う朱雀の背中には赤く輝く翼が生えていた。

続く

20・最後の試練・中編（後書き）

どうでしたか？

さて次回はまた10日前後となります。

次はついに後編です。よろしければ見てくださいなね。
それではまた次回お会いしましょう！

21・最後の試練・後編1 (前書き)

どうも、ロンロンの弟子です。区切りが悪いため後編は2つに分け
ました。それではどうぞ！

21・最後の試練・後編1

一体どうしてこんなことになったのでしょうか。

私はクリスタの王女、ティルアーネ。

今日はお忍びでこの町に来ましたのにティルス様と名乗る少年？と一つになったり変な男性に追われたりと私、何かしてしまったのでしょうか？

・・・そもそも私は本当にここにいるのでしょうか？

ティルアーネという女性は存在している人物なのでしょうか？

よく・・・分からなくなってきました。

そして、この光景も・・・。

「ぐあー！」

蹴っ飛ばされた沙汰は住宅の壁に激突する。

壁にはひび割れが起きてその衝撃を物語っている。

朱雀はその光景を満足そうに見ている。

「沙汰さん！！！」

ティルアーネは駆け寄ろうとするが、沙汰は手でストップをかける。

「・・・お前はそこにいる。こいつはかつこよく俺が倒してやるからよ。」

そう言っただけで立ち上がる沙汰だが、元々身体を鍛えていないので少しのダメージでもかなり響く。しかも今回はかなりの実力を持つ男の蹴りをまともに受けたのだ。相当効いているのかかなりふらついている。

「蹴り一発でこれとは、面倒ではないですが少し拍子抜けですね。」

「まったく、俺はあいつみたいに打たれ強くないんだよ・・・やるしかないみたいだな。」

痛みを耐えながらも沙汰は朱雀を見る。隙がありそうでない。どうやら戦って勝つ以外宝石を奪えそうもないようだった。そう判断しミニパソを開き驚異的なスピードで入力していく。

すると目の前に陣が出現、そこからカイチヨーが召喚される。カイチヨーは沙汰を背中に乗せると上空へと上昇する。

「なるほど、なかなか賢そうな鳥ですね。それにしても私相手に空中戦とは、面倒ではないことばかりですね。」

朱雀はその赤い翼を広げ飛び立とうとする。

「ちょっと待ってください!！」

ティルアーネは飛び立とうとする朱雀にストップをかける。それに朱雀は素直に従いティルアーネの方を見る。

「どうして貴方がここにいるんですか？今僕は別の試練を受けているはずなんですが。」

そんなティルアーネの問いかけに対して、やれやれと朱雀は答える。

「このほうが面倒じゃないでしょう。それだけですよ。」

そんな一言だった。あまりにも内容がない答えだったためティルアーネも呆気にとられた。

すると朱雀は真面目な表情になる。

「一つ忠告しておきましょう。この空間で発生するダメージはこの空間を出た後にも継続されます。……さて、彼は無事に元の世界に帰れますかねえ。」

ティルアーネは一瞬恐怖する。朱雀から溢れる謎の気配に圧倒されたからだ。一体それがなんなのかは彼女には分からなかったが。

「では、私は行きますよ。せいぜい面倒にならないように祈ってください。」

そう笑って言うと朱雀は上空へと羽ばたいていった。

その光景を見ていた王女のティルアーネは茫然としていた。

いきなり色々なことが起こったのだ、無理もない。

「あのティルス様、少々お聞きしてもいいですか？」

「……え？あ、はい。僕の答えられるような範囲でなら。」

心の中でティルスに質問した。内容は沙汰と朱雀、ティルス自身のことだった。

それに対してティルスはこう答えた。

「僕はとある世界の王様候補なんです。沙汰さんは僕を守ってくれ
る付き人の一人です。そしてその試練としてこの世界に来たんです
が、どうやらあの人と戦わなくてはならないようです。あの方は朱
雀さんといって僕の世界の昔の王の親衛隊の一人でした。とてもさ
ぼり癖、怠け癖のあるやる気のない人でしたが実力は親衛隊でもト
ップクラス。しかも本気を出すと町一つが消えるほどらしいです。」

「でも、あの方とてもやる気に満ちていました。貴方の話のような
人には見えませんでした。」

ティルスは考えた。自分が初めて会った時は確かにやる気がなかつ
た。だが今は違う。

そこで考える。彼が本気を出さなくてはいけない理由。

「真実は闇の中……。やはりあの事件が関係あるのかもしれない
ん。」

「……え？」

そう呟いた。

カイチヨーに乗って沙汰は上空に来た。ティルスや王女を戦いに巻き込みたくなかったからだが、一方で失敗したとも思っていた。

朱雀には羽が生えていて明らかに空を飛ぶ勢いの羽だった。ということは空中戦の方が得意だと考えられる。

しかし今更遅い。沙汰は奥の手をいくつか仕込むためミニパソと向き合う。

そこに朱雀が追い付いてくる。

「見ただけで分かりますよ。貴方のそれは凄いと。全く一般人とは思えないくらいにね。」

そう言いつつ戦闘態勢をとる。沙汰には良く分からないがかなり鍛えられた構えみたいくらいは理解できた。格闘術初心者では全く歯が立たないことも。

「まあ、俺はあんたと格闘術で勝負したい訳じゃないし。さて、行くぜ。」

沙汰が入力を終わると沙汰の前に無数の小さな陣が出現、そこから

ミニカイチヨーが飛び出し朱雀に向かって行く。見た所数百匹はいるようだ。

「なるほど、これほどの数を召喚するとはなかなかやりますね。」

だが余裕そうに右腕を向ける。すると朱雀は炎の壁のようなものに包まれる。

ミニカイチヨーズは急に止まれず次々にその壁に突っ込んで燃え散ってしまう。

「・・・ちっ、止まれ！」

沙汰がストップをかけるが後1匹しか残っていなかった。

沙汰は距離をとるためか急降下を始める。

「逃がしません。」

壁を消して沙汰を追うように降下する。

「さあ、追いつきましたよ。」

すぐに追いつかれる。朱雀は火の玉を発射させる。

カイチヨーはかわそうとするがギリギリで羽に掠り燃える。

「ギャッ。」

相当熱いのか痛そうな声を上げるカイチヨー。

沙汰はしょうがなく家の屋根に跳び下りる。

「よし、戻・・・」

ドスッ

遅かった。すでに目の前に朱雀はいた。沙汰が気付いた時にはすでにカイチヨーは一撃を入れられ消滅した。沙汰は咄嗟に思いつきり後ろに跳ぶ。

「無駄ですよ。」

朱雀は掌を沙汰に向けるとさっきの火の玉の倍の大きさのものが沙汰に向かって行く。

「・・・カイチヨーは十分時間を稼いださ。」

瞬間、沙汰の目の前に陣が出現し、ヒポポスが召喚される。それと同時にヒポポスは火の玉目掛けて水を発射、・・・相殺する。

「なるほど、ならばこちらにも召喚といきましょうかね、面倒ですが。」

そう言うと朱雀は手を挙げる。すると上空を覆つように巨大な陣が出現する。

どうやら巨大な何かを召喚しようとしているようだが陣が巨大な分、召喚まで少し時間が掛かるようだ。

「何かヤバそうだな、出させてたまるか。」

ヒポポスが水を陣目掛けて発射する。
が、朱雀は火の玉を水目掛けて発射、相殺する。

「まあ、慌てないください。面倒な分結構凄いですよ。」
それから何度か試したが結局陣は消せない。
そうしているうちにも陣はどんどん完成していく。

「……………仕方ない、こっちも奥の手を召喚するしかないか。」
沙汰はミニパソに何かを入力していく。それは何かいつもと違う感じ
じがするようだ。
しかし、沙汰が完成させる前に巨大陣が完成しそこから何かが出て
くる。

ズズズツ

それは巨大な鷹のような鳥だった。だが全身が赤く輝いており何よ
り全長が30m近くあるほどの大きさだった。
そしてその鳥は何か不気味な力を感じる。強大な力のようだ。

「クエーーーーー!!!」

雄たけびを上げる。すると町全体が震える。
ビキビキビキという音が聞こえるほどだ。
思わず沙汰は両耳を押さえてしゃがみこむ。
だが、ヒポポスはもろに受けてしまい悲痛な声をあげて消滅してし
まった。

「・・・・・・・・こいつはやべえな。」

流石に沙汰もその力に気付いたようだ。
両足が震え恐怖すら感じる。

「さて、あなたの力を見せなさい。」

朱雀の声に合わせるように巨大な鷹は口から火を噴く。それはとてもない勢いで広まっていく。

「ちよ、待て。やばいって。」

沙汰は思いつきり助走をとり隣の屋根に跳び移る。
何とか着地に成功、元いた家の方を見ると・・・

何もなかった。

「ふむ、避けましたか。面倒ですが一撃で終わっては何とも呆気ないですからね。」

朱雀は上空で沙汰を見降ろすようにしてそう言った。
状況は誰が見ても一方的だった。

だが沙汰は笑っていた。まだ何かあるように。

「仕方ねえ、奴を出すか。俺は責任持たないからな。」

そして、沙汰の陣が完成し展開される。

そこから出てきたものは……………。

続く

21・最後の試練・後編1 (後書き)

どうでしたか？後編2は出来れば明日中に投稿したいと思います。
それではまた次回お会いしましょう！！

22・最後の試練・後編2 (前書き)

どうも、ロンロンの弟子です。いやはや長くなってしまいました。前回の最終話くらいになっています。そしてついに決着です。それではどござー！

22・最後の試練・後編2

「出てきやがれ、俺の切り札!！」

沙汰の陣から出てきたものは……真っ黒な蜘蛛だった。

「……ふっ、何ですかそれは。それで私のスラデイスに勝つつもりですか?」

どうやら鳥の名前はスラデイスというようだ。だが沙汰は本気だった。その蜘蛛こそが沙汰の奥の手なのだ。

「当然だ、さて行って来い。ミニカイチョー!」

生き残っていた最後のミニカイチョー。いつの間にか沙汰が回収していたようだ。

勢いよく沙汰の所からミニカイチョーが飛び立つ。

「その程度は焼き払ってあげますよ。」

「さて、悪いがそいつは攻略させてもらう。頼むぜ、SPD!!」

その蜘蛛の名前はSPD、スパイダーの略称だった。

SPDは糸を一本吐き出す。その糸はピンとまっすぐ伸びてスライズに向かって行く。

その糸もスライズの炎を受け切る。耐熱加工はバッチリだ。

「ふふ、それで貫くつもりでしょうが面倒なことにスライズは不死の効果を持っています。ずっと共に生きてきた私の相棒ですからね。それくらい当然……」

「だろうな。だと思ってミニカイチョーを先に行かせたんだよ。」

朱雀の話しの途中に割り込む沙汰。導きのビー玉を見る。するとそれにはミニカイチョーの居場所が映っていた。その場所は……

「よし、貫け!!」

そこ目掛けて勢いよく糸が伸びていく。

そうそこは……

「し、しまった!」

スライズの急所だった。そこを糸が貫く!

「グギヤアアア……」

とんでもない声を上げるスラディアス。そしてそのまま・・・陣の中へと逃げ帰っていった。

「ま、まさかその為に・・・!?」

伸びた糸は急に方向転換をして朱雀に向かって行く。いきなりの事で朱雀も反応が遅れてしまった。

「くっ！」

何とか炎の壁を張るも耐熱効果を持った糸に突破を許す。その糸は硬化し朱雀目掛けて振り下ろされる。

ズバツ

「クツ・・・。」

寸前かわすもちゃんとかわしきれず左腕が切り落とされた。

力なく沙汰とは反対の屋根に着地する。その姿はかなり痛々しかった。

「わ、悪いな。俺はこんな所で負けられないし……。」

沙汰も悪いと思っっているらしく謝る。

だが、朱雀は

「……ふふふふふふふふふふ、あはははははははははははははははは。」

思いっきり笑っていた。

「な、な!？」

その笑いは恐怖だった。左腕をなくした朱雀は笑っていた。そう凄く楽しそうに。そして

「……ディアスト。」

ズンッ

「……え?」

沙汰は殴られた。それも思いつきり。そして沙汰の瞳に映ったのは
・・・銀色の炎に包まれた朱雀の姿だった。

朱雀は自分の真の名前を言うことにより覚醒する。

それは白虎、玄武も同様である。青龍の覚醒だけは誰も見たことが
ないらしいが。

「グハア、・・・・・・・・ゲホツ。」

ふっ飛ばされはしなかったがさっきの倍以上の痛みが全身に走る。
正直立っていられる痛みでも正気を保てる痛みでもない。それほど
きつい。

「私の腕を落とすとは、・・・あの男を思い出しますねえ。」

見る者全てが恐怖するほどの笑みを浮かべそう言った。
明らかに先ほどの雰囲気と違った。

さっきよりも力が高まり誰が見ても分かるほどまでになっている。
しかし、沙汰は動けなかった。起きているほどがやっとなのだ。気
を抜くと気絶しそうだった。

「さて、そろそろ終わりにしましょうか。」

朱雀は構える。右腕に力を集中しているようだ。

そこにミニカイチョーが突っ込んでくる。

どうやら貫いた隙間から脱出したようだった。
それも彼の後ろへ。朱雀も気づいていないようだ。そして彼に接触
したと思った瞬間

シュツ

ミニカイチヨーは消えた。

「・・・な!？」

沙汰は驚いた。今回は壁を張っていない。なのになぜミニカイチヨ
ーは消えたのか。

そこで気付く。彼が纏っている銀色の炎、あれはさつきみたいな見
せかけではなく本当に存在しているのだと。それが耐熱効果で防げ
ないほどの熱さであるのだと。

「さて、この蜘蛛の黒さ。まさかとは思っていましたが今なら納得
ですね。全く面倒なことをしてくれました。」

いつのまにかSPDは朱雀に掴まれていた。
ギリギリと力を加えていき

グシヤッ

潰れた。

沙汰はこの隙にミニパソを弄っていた。
全身の痛みを抑え何かないと探していたが

気付くと今弄っていたはずのミニパソがなくなっていた。

「……………!?!」

沙汰は朱雀の方を見る。朱雀は沙汰のミニパソを持っていた。

「なるほど、確かにあの男の力を感じます。全く面倒なことを。だが、それも終わりですよ!!」

ガシャーーン

ミニパソが叩きつけられ大破した。

「あ、・・・あああああああああああ。」

沙汰は叫んだ。全身の痛みなどもうどうでもよかった。

彼の大事な宝が目の前で破壊されたのだ。もう何も考えられなかった

そしてすぐ目の前に朱雀がきた。すでに力の補給も終わっている。

「・・・・・・・・・・逝きなさい。」

バキッ

鈍い音を立てて沙汰は吹っ飛ばされそのまま下へと落ちる。

ベチャッ

そのまま動かなくなった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

そんな戦いをティアーネは遠くから見ていた。沙汰が距離をとってくれたおかげか彼女には被害はなかった。

傷だらけの沙汰が2階の屋根から落ちていった。それを見てすぐに走り出していた。

「だ、大丈夫なんでしょうか？」

「正直危ないと思います。だからこそ僕が行かなきゃいけない。」

だがドレスは走りにくかった。王女の許可を得て走りやすいように破る。

そして沙汰の所に辿り着く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え。」

ティルアーネは言葉を失った。

拳をもろに受けた腹の辺りから全身へと火傷の跡が見える。それもかなりの重症だ。

勿論骨折もかなりの箇所しているように見える。息はしているが凄く苦しそうだ。

このままほっとくと死んでしまいそうだった。

「とても頑張りましたよ、彼は。」

朱雀が下りてきた。左腕は相変わらずないが銀色の炎を纏っており彼を直視するのも難しかった。

「正直解放しなければ負けていました。あの男の力を借りたとはいえ、この私をここまで追い詰めたのは素晴らしいの一言に尽きます。特にあの蜘蛛は凄い。私にもスラデイスにも肉体防衛の術式が練りこまれていて並大抵の力では皮膚を割くことはできません。それをいとも簡単に貫く糸を出す蜘蛛ですからね。・・・故に彼をここで消すのはとても残念だ。」

「・・・さ、沙汰さんを、沙汰さんを助けてください!!」

ティルアーネはもう話なんて聞いていなかった。目に涙を溢れさせて朱雀に向かって叫んでいた。

「僕は彼を失いたくないんです!!」

「・・・なるほど、では教えてあげましょう。私の試練の意味を。」

ティルアーネの叫びに表情一つ変えずに朱雀は言い放った。

「この試練では人を失う痛みを感じてもらうことです。この前の自己犠牲とは違い、王は誰かを犠牲にしても生き残らなくてはいけない。その為の試練を私がやっているのです。」

「・・・そ、そんな。」

ティルアーネはまた言葉を失った。

この試練を受けた時から沙汰がいなくなることは決まっていたのか。では自分が彼を付き人に選んでしまったから彼は消えるのか。

そう自分に問いかけるも答えは出ない。

「誰しも失うのは悲しいもの。しかし、それを乗り越えた者こそ真の王にふさわしいのです。さてそろそろ終わりにしましょうか。」

朱雀は沙汰に手を向ける。沙汰は全く動かない。次に何かダメージを受けたらもう助からないだろう。

「ま、待ってください。何でもします。だから沙汰さんを助けてください。僕の大事な、大事な・・・友達なんです!!」

ピクッ

その時沙汰が少し動いたがそれには誰も気づかなかった。

ティルアーネの言葉に朱雀は少し考えて言う。

「・・・まあ、そこまで言うなら助けないこともありません。面倒な条件がありますがね。」

「・・・条件？」

ティルアーネは聞き返した。藁にもすがる思いで本当になんでもす

る気だったのだ。

「今回の試練を不合格にし、王になるのを諦めるのであれば彼を助けてあげましょう。」

それはかなり厳しい条件だった。

今までしてきたことがすべて水の泡になってしまふのだ。

泰人が、莉麻が、テイライズが、その他大勢の協力でここまで来たのにそれを無駄にするということだった。

しかしティルアーネはほとんど考えなかった。

なぜなら沙汰という存在は彼女の中でもとても大事なものだったからだ。

確かに沙汰は少々自分勝手な所もあった。他に手があったかもしれないのに自分を女に変えたり女風呂に入れたり嫌な目にもあつてきた。

だが、病院の時のように本当に困っている時は力を貸してくれる、良い人なのだ。彼女は信じていたのだ。

だから失いたくなかった、自分のかけがえのない友人を。

「分かり……………」

「待て。」

沙汰の声が聞こえた気がした。咄嗟に沙汰の方を見る。だが彼はほとんど動いていない。

「変身の指輪を通じてお前の心に語りかけてるんだ。身体と魂は離れていても一つだからな。」

その口調は沙汰本人のものだった。ティルアーネは安心するが

「よく聞け、正直俺はもう駄目かもしれない。ミニパソを失って・
・どうすればいいのかわからなかった。」

それはいつものような自信に満ちた声ではなく力のない声だった。ティルアーネは今まで聞いたことのない沙汰の声に戸惑いつつも心を傾ける。

「だが、お前の友達って言葉を聞いてな。俺、友達泰人しかいないしずっとできないと思ってたからな、嬉しかったよ。」

そこまで聞いてティルアーネは思った。彼は何かしようとしている。だが彼自身もう限界なんて超えてもう動くことすらできないはずなのに。

まさか彼は・・・

「ありがとよ、・・・泰人と莉麻ちゃん達を頼むぜ。」

「沙汰さーーーーーん!!!」

思わず叫んでしまった。朱雀は驚くがそれよりももっと驚くことが起きる。

「……………うおおおおおおお！」

沙汰が立ちあがった。右腕にはいつの間にか変身の指輪と融合の腕輪がつけられている。

「……………まさか、立ち上がりますか。面倒な。」

朱雀は本当に面倒そうな表情をすると手を向け銀色の3mクラスの大きな火の玉を沙汰に向けて放つ。

沙汰は逃げずにその火の玉に融合の腕輪をつけた手を向ける。

「……………ドレイン。」

そうポツツと言うとその火の玉は音を上げて沙汰の腕輪に吸い込まれて吸収される。

それに驚いた朱雀は何故彼が動けるか考えた。そこで変身の指輪が目に入る。

「……………なるほど、その指輪で肉体を構築しなおし立てるまでになった。全く面倒なことをしますね。後から苦しみが来るといふのに。」

融合の腕輪を使われている為下手に術を使うこともできない。そう考えた朱雀は構える。右腕に再び力を集中させる。

それを見た沙汰も先ほど吸収した力を右腕に込める。
どうやらお互いに次で決めるようだ。

「さて、今度こそ終わりです!!」

朱雀が一気に距離を詰めて沙汰に向けて拳を振る。

だが沙汰もそれに反応する。力を吸収し指輪も使い反射神経を極限まで上げたからだ。

沙汰もそれに合わせるように拳を放つ。

ガンッ

お互いの拳がぶつかり力勝負になる。

だが明らかに朱雀が押していた。

朱雀はリードを広げるようにどんどん沙汰を押ししていく。それに合わせて沙汰もズリズリと下がっていく。

「…………ぐぐぐぐ。」

沙汰はもうすでに限界を超えていた。自分の肉体に限界突破のドーピングまでして、それでも朱雀には届かない。

だが彼は諦めなかった。横を見るとティルアーネはが手を合わせて自分の勝利を祈っている。その思いに絶対に答えなくてはいけないかった。

確かに格闘術の心得なんて全くない。でもそんなのは関係ない。気持ちで沙汰は朱雀に負けなかった。

「負けるかああああ!!」

すると奇跡が起こった。

ミニパソから黒い光が出てくる。それがふよふよと宙に浮き沙汰の融合の腕輪の中に吸い込まれていった。

そして沙汰は急に力が湧いてきた。

今まで押されていた分朱雀を押し返す。

「……バ、バカな。こんなことでこの私が………負けるのですか。」

グシャーン

沙汰は思いつきり朱雀を押し返し住宅街へと叩きつけた。

朱雀は家の壁を何枚もつき破りやっとなまった時にはすでに意識はなかった。

「……か、勝った。」

ドサッ

気が抜けたのか沙汰はその場に倒れた。その表情はとても清々しい笑顔だった。

「やった？・・・勝ったのですか？」

ティルアーネは茫然としていた。だが朱雀は遠くで気絶している。沙汰が勝ったのだ！

「・・・これは？」

すると沙汰の近くに宝石が落ちていた。それはまさしくレゾナールで間違いなかった。

どうやら朱雀が吹っ飛ばされた時落としたようだった。

ティルアーネはそれを拾い上げる。すると

「試練は合格だ。元の世界に転送を開始する。」

と空から声がした。どうやらこれで試練も終わりのようだ。

「どうやらお別れの時が来ましたね、身体を貸してくれてありがとうございました。うございしました。」

ティルスは礼を言う。これでお別れかと思うと名残惜しい気がする。

「ティルス様、私は本当に存在する人間なのですか？」

「え？」

ティルアーネは自分の疑問を口にする。この世界は本当に存在するのか、自分は一体何なのかそれをティルスに問う。
するとティルスは優しく答える。

「この世界も貴女もちゃんという。だって僕が覚えています。誰かが覚えていればそこは存在している、そうでしょう？」

「えっと、あの、はい。」

ティルアーネは照れくさそうに答える。どうやらこつ言つ言葉はかけられたことはないのかもしれない。

「絶対また来ます。その時は僕の本当の姿で会いに来ます!!」

「・・・はい、私待ってます。その時には私と・・・。」

パッ

ティルアーネは気付くと元いた場所に戻っていた。
いなくなっていた人もいつの間にかいる。

「夢・・・だったのかしら？」

懐からレゾナルを取り出す。

あった。

やっぱり夢なのかと思ったが

「……ふふふ、また会えますよね。」

レゾナルには小さくティルスと彫られていた。

「……ここは？」

ティルスは目を覚ます。どうやら元の世界に戻ってきたようだ。

「やりました、僕達やりましたよ沙汰さ……ん？」

沙汰は倒れていた。近くには壊れたミニパソと融合の腕輪、変身の指輪が落ちていた。

怪我は治っていない。重症のままだ。

「……そ、そんな。」

カッーン

ティルスの指から2つの指輪が取れティルスは少年へと戻る。
だが本人は気付いていない。

「なんか光ったみたいすけど大丈夫つすか？」

スィングとミュアが入ってくる。2人とも少年ティルスを見て驚く。
それで試練に合格したと気づいたのだ。

「やったつす・・・ね？」

スィングも気づいた。沙汰が倒れているのを。一目見ただけで命に
危険があるほどだと分かる。

「・・・僕のために沙汰さんが、沙汰さんが!!」

ミュアは沙汰をしてみる。かなりの重症で放っておくと助からない。
この世界で一番の病院といえば

「・・・ティルス、・・・王都に転移。」

そう呟く。しかしティルスは首を横に振る。

「僕の方ではそれは・・・」

「諦めんな!!」

そんなティルスの両肩をスィングが掴む。

スイングはいつもの冷静な感じではない。

「君だったら助けられるさ。試練を全部終えたんだ、力も戻っているはず、信じるっすよ。」

最後はいつも通り優しく話す。

ティルスは涙をふく。そして顔を上げる。その表情は成長した少年の顔だった。

「やってみます。………転移！」

シュン

4人は姿を消した。

起きろ

起きろ

鳥頭

「全く面倒ですね。こっちのセリフですよ。」

朱雀は目を覚ます。どうやらメディスクローズの神殿の上空のようだ。

無意識に空を飛んでいたようだ。前には白いマントの男がいた。

「あんなガキに負けるとは。お前も腕が鈍ったか。」

「まあ、手を抜いたことは認めます。ですが彼はとても強かったですよ。白虎クラスはあるでしょう。」

その言葉に男は頷く。どうやらその点は認めているようだ。

「さて、逝くのか？」

「そうですね、ティルス君も心が強そうで良い王になります。私の出番はここまでですよ。面倒じゃなくていいです。」

そう言って朱雀は翼を広げると・・・身体が少しずつ消えていく。

「君自身はティルス君が王になるとティライズ君が王になると関係ない。あの少年の茶番につきあっただけです。本当は玄武の孫が強くなればそれでいい、そう考えているなら手を引いてもいいんじゃないんですかね。玄武の孫じゃ君には勝てません。」

「俺に勝てないようではあの化け物は倒せない。それにあの方は助きたい。・・・玄武との誓いだ。」

顔は見えないが男は少し悲しそうな顔をしているように思える。

「そうですね。私たちができなかったことを彼ら、泰人君たちなら

やってくれるそんな気がします。さてじゃあ逝きますね。玄武、白
虎と共に祈ってますよ。」

そう言って朱雀は消えた。

「さて、どうしますか？」

瞬間シュパルツが現れる。どうやら野暮だと思い席を外していたよ
うだ。

「テイルスが悪夢に出発するまで休憩だ。基地に戻ってる。」

「では行きましょうか。」

そう言って2人は姿を消した。

ここは謎の空間

「……沙汰？」

サラリーマン風の男が気付く。だが箱を見る。すると
バンツ

そこから白虎が出てくる。

白虎は少し疲れているようだが、すぐに話す。

「出来る限りのことはした。彼はもう僕より強いさ。もう行っちゃったよ。」

「分かった、ありがとう。じゃあ静かに眠ってくれ。」

それに頷いた白虎は消える。

「僕らの望んだ世界になるといいなあ。」

最後にそう呟いた。

「大丈夫、泰人たちならやってくれるさ。」

サラリーマン風の男はそう呟きその空間を後にした。

続
く

22・最後の試練・後編2 (後書き)

どうでしたか？

という訳でついに色々と複線回収していきましょう。

次回は泰人の修行、番外編です。良かったら見てくださいなね。

次は未定です。恐らくかなり遅くなると思います。

では、また次回お会いしましょう！

予告（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。GWは忙しく執筆活動できませんでしたが、そろそろ終わりが見えてきた所で予告を作ってみました。軽くネタばれも入っていますので宜しければ見てください。ではどうぞー！

予告

・・・時は来た。

新たな力を身に付けて主人公、茅野泰人が戻ってくる。

「やっと会えたな、莉麻！」

「お、お兄ちゃん!!」

そして動く真の敵！

その狙いとは何なのか？

「私はテイライズ達になんて残酷なことを・・・。」

「・・・ようやく出番がきたようだ。」

しかし、失ったものは大きかった。

親友の喪失に落ち込む泰人。

「・・・僕があの時意味をすぐ理解していれば。」

「・・・嘘だろ。沙汰あああ!!」

悪夢の中。
最悪の再会迫る。

「うふふ、やっと会えたわね。」

「……ねえ……さん？」

始まる悪夢での戦い。

戦いの中次々にいなくなる仲間達。

「君ならやれる、信じてるっす。」

「……やめろおおお！！」

そんなとき現れる最後の親衛隊、青龍。彼の目的とは？

「さあ、戦いのがきた。」

「……俺は。」

追い詰められていく泰人達。
ついに本物のサミーが動く。

「サミーにはとんでもない力が眠っている。俺様があの村を封印したのはそこにある。」

「あたちがみんなまもるの。」

「駄目よ、サミーー！！！」

明かされる意外な真実。

サラリーマン風の男の正体とは！！？

「こいつを、……泰人に渡してくれ。」

「貴方は、……まさか？」

そして戦いの果てに待つ結末とは。
今デイオールの運命を賭けた戦いが始まる！！

「ずっと会いたかったよ、泰人。」

「……梓由？」

予告（後書き）

どうでしたか？

一応この通り進めていく予定ですが少し変更になるかもしれません。そこはご了承ください。

さて次ですが、修行編の前に本編を一つ進めていきます。そのほうがいいかなと思いついて。

次の投稿は10日前後の予定ですがこれからまた忙しくなるので遅くても2週間以内を目標にします。

それでは本編でお会いしましょう！！

23・戻ってきた男（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。

ついにきました、主人公復活回です。

詳しくは本編で。それではどうぞ！

23・戻ってきた男

ここは学園高等部のとある教室。

雪美は授業を受けながら考え事をしていた。

「（莉麻ちゃんのおかげで前向きに考えられるようになりました。姉さんがどんなに変わっていったってちゃんと話せば分かるはず。うん、大丈夫！）」

そんな時だった。

急に嫌な気分がして辺りを見回す。しかし特に変わったことはない。雪美は自分の勘違いだと思い授業に集中しようとして黒板を見ると

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

教師にじっと見られている。雪美のことをじっと見つめている。今は現代文の時間で男性教師が教卓に立っている。その教師が雪美のことをずっと見ているのだ。

雪美は授業に集中していないことを気付かれたと思いおもむろに立ち上がる。

「す、すみません。別なことを考えていました。」

と謝罪する。

しかし男性教師は反応しない。それどころか周りの生徒達全員雪美の方を見ている。感情のかけらも感じないまるで人形のような目をしている。

「えーっと、一体何が……。」

すると嫌な気分がまた雪美襲う。少しめまいを感じたが事態は進んでいた。

教師、男子生徒、女子生徒例外なく雪美に向かって歩き始めた。

うあーといった言葉にならない声をもらしながら近づいてくる生徒達。明らかに様子がおかしい。

「……あ。」

雪美はようやく事態を把握した。そして扉の方から教室から出ようとする。

だが時すでに遅し。周りは生徒たちに囲まれている。

雪美はさっきの嫌な感じはこのことだと思いがだからといって事態が変わるわけではない。

「……嫌、来ないで……！」

大声で叫ぶが反応しない。

どンドン近付いてくる。

「た、助けて。誰か助けて……！」

恐怖で何も考えられなくなっていた。いや、別のことが脳裏をよぎった。

……自分はこのような状況の対処法を知っている。しかし、思い出せない。自分には何か使命があったような気がするのだが、霧がかかったように思い出すことができない。

思い出せたのは、……病室での姉の泣き顔。

「……いで!!」

何か大事なことを言われたような気がする。だがやはり思い出せない。

雪美も記憶が曖昧のようだった。

「……莉麻ちゃん。」

自分の事を頼ってくれた妹のような存在。

記憶喪失なのにいつも明るくて兄が大好きな優しい子。

つい言葉に出してしまった。それほどに最近の日々は楽しかったのだろう。

お菓子を作った。

料理も作った。

裁縫もした。

色々な話をした。

それは……昔を思い出すほどに。

そして目をつぶる。もう覚悟した。そして神に祈った。自分がこんなことになっているなら莉麻も同様だろう。だから彼女を助けてほしい、そう祈ることしかできなかった。

ガラッ

「お姉ちゃん!!」

「え?」

扉が開いた。

そこにいたのは・・・莉麻だった。

とつさに目を開き扉の方を見る。

そこには息を切らした莉麻がいた。どうやら走ってきたようで額には汗がにじんでいる。

正直嬉しかった。彼女は無事で自分を心配してここまで急いでくれたのだから。

しかし、この状況。雪美は莉麻を逃がそうと叫ぶ。

「駄目、逃げて！」

「・・・大丈夫だよ。今、助けるから！」

その表情はとても優しかった。

いつもの莉麻の笑顔だ。

それはとても信用できる、雪美はそう思った。

「んじゃ、さつさとやるかな。」

「え？」

見知らぬ男が莉麻の横に並びそのまま教室に入ってくる。

背は結構高い。そして見た感じ真面目そうな印象を受ける。

雪美はそう感じていた。

男は腰にしていたメジャーを外し構える。

「・・・覚醒！！！」

男がそう言つとメジャーが白く光る。
その光はとても綺麗で思わず見とれてしまふ。

「行きますよ。．．．ラルゴウィップ、タイプS。」

するとそのメジャーの測定部分が伸びる。そして左右に小刻みに動いている。まるで意志を持っているように。そしてウィップが動く。

「．．．薙ぎ払え。」

一瞬だった。

雪美の周りの生徒たちは吹っ飛ばされて壁に激突し気を失う。
男はそれを見て雪美の方に向かって歩く。後ろの莉麻もぴよぴよこついてくる。

「大丈夫ですか？」

そう言つて手を差し出す。

雪美は混乱してその手を見つめていた。

そこに莉麻が割り込む。

「言ったでしょ。お兄ちゃんが助けしてくれるって！」

その言葉を受けて思い出す。

そう彼女の言った言葉、兄が必ず助けてくれると。

「．．．うふふ、そうだったね。」

雪美は笑った。

そして、差し出された手を掴みお礼を言う。

「ありがとうございます、茅野泰人さん。」

時間は戻り、中等部教室。

莉麻は授業を受けていたが、変な気分がした為何かあったと分かった。

すると教室内の生徒及び教師が雪美の時と同様おかしくなった。

「み、みんな、大丈夫？」

必死に呼びかけるが反応しない。

それどころか一人の女子学生が莉麻を押し倒した。

「きゃー！！」

ここに来てから一番最初に友達になった子だ。

だが今の彼女は明らかにおかしい。

いや、他の生徒も同様だ。どんどん莉麻に近づいてくる。

「や、やめて。駄目だよこんなこと。」

生徒が莉麻の荷物を確認している。何かを探しているようだ。

その間にも他の生徒は迫ってくるし、女子学生は莉麻の服を脱がし始めた。

莉麻はもう訳が分からずやられていたが

ガラッ

「大丈夫ですか!？」

フィルディアとサミーが入ってくる。

サミーはこの状況を確認すると術式を組み立てる。

「邪魔だ、貴様ら!!」

そして闇の球を放ち次々に生徒を消していく。

そして女子学生一人が残った。

莉麻は助かったと思ったがまだだった。女子学生は突然莉麻の首を絞めた。

「……が、ぐ。」

それほど力は強くないものの痛みは感じる。

そしてサミー達の方を睨みつける。

「……人質ってことか。」

どうやらそのようだった。

流石に人質をとられてしまっは手が出せない。

サミーは術式を解いた。

「……ど、どうすれば?」

フィルディアは慌てていて正常な判断ができそうもない。

莉麻は思った。

もう駄目なのかと。

兄に会う前に自分は死んでしまうのかと。

「……………会いたいよ、お兄ちゃん。」

最後の力を振り絞ってそう呟いた時だった。

「……………今行くぜ！」

「え!？」

そう聞こえた気がした。だがそんなことを気にする余裕はなかった。

どんどん気が遠くなっていく。

だが、そんな時急にフィルディアが光出す。

そして光に包まれた。

「やっと来たか、全くタイミングが良すぎだ。馬鹿が。」

サミーがそう言うと光が収まる。するとそこにいたのは

「さて、やるか。」

茅野泰人だった。

「えーっと、一体何が……………」

腰につけたメジャー、ラルゴが喋った。どうやらフィルディアのよ
うだが事態を把握していないらしいかった。

「話は後、行きますよ！」

「あ、はい。」

そう言うと泰人はラルゴを構える。
そして唱える。

「我発動す、・・・スネイルシューター!!!」

するとラルゴが変形、蝸牛型の銃へと変わる。
そしてすぐに撃つ。
すると小さな水の塊が発射される。

突然現れた泰人に女子学生もすぐに反応できず発射された水の塊を
額で受けてしまう。

「ぐ、・・・あ。」

莉麻の首を絞めていた手の力が弱まる。
その隙に莉麻は脱出、泰人の方に向かう。

「ゆっくりお眠り。」

女子学生はそのまま倒れ気絶する。

莉麻は泰人に抱きつく。凄く嬉しそうだ。

「やっと会えたな、莉麻！」

「・・・お、お兄ちゃんーん！！！」

そのまま泣きだした。

泰人は優しくその頭を撫でてあげる。

兄妹の再会だ。

「さて、とりあえず確認をしたい。ラルゴ使い、修行は完了したのか？」

サミーが泰人にそう言うつと泰人はサミーの方を向き答える。

「そうだな、終わったよ。後、少しは事情も分かっているつもりだが、ヴィントル！」

「・・・ふん、まあいい。とりあえず今の状況を軽く話しておく。」

そう言うつとサミーは話し始める。

今の状況、そして何をするべきかを。

その間、泰人は箱を取り出し蓋を開けようとするつと簡単に開いた。そしてその中に入っていたのは・・・

ネジだった。

ドライバーを取り出し、ラルゴを見る。
ネジが一か所はまっついていないのを確認できる。
取り出したネジをはめてみるとぴったり合う。
そのままドライバーで締めていく。

ギョッ

きゅちりとネジを締める。

ラルゴにはあまり変化はないようだ。

「どうですか、フィルディアさん？」

「はい、何か力が漲るような気がします。このネジのおかげですね。」

とそつこう話しているうちにサミーの話は終わる。

「さて、雪美を助けに行くぞ。場所は分かるか？」

「あ、はい。泰人さん、私のバツクから高等部見取り図を出して下さい。」

泰人はバツクから紙を取り出し見てみる。すると教室の一カ所にマークが付けられている。
どうやらそこが雪美の教室のようだ。

「行くぞー!!」

サミーの掛け声と同時に泰人と莉麻も移動を開始した。

そして現在に至る。

泰人達は教室を脱出し学園のグラウンドまで来た。

「さて、ここからだ。奴が動き出した以上こちらでも動くしかないって訳だが。」

雪美にも一通り説明した。

最初はサミーの事を怖がっていたが、少し良くなったようだ。

「それで、捜しているのは私の事かしら？」

「!？」

一斉に声が出た方を向く。

そこにいたのは、星音だったが見た目が変わっていた。

そう、その姿は……。

「……ねえ……さん？」

そう。雪美の姉であり

「・・・・・・・・まさか!？」

泰人の友人でもある

「うふふ、やっと会えたわね。」

宇木風梓由だった。

続く

23・戻ってきた男（後書き）

どうでしたか？ やつといくつかの伏線回収できました。 忘れずにすべて回収しないとイケませんね。

という訳で次回は泰人修行回です。 今のところ前編後編の予定ですがどうなることやら・・・。

そして次回の投稿は1週間後の予定です、が忙しくなってきたのでまた遅くなるかもしれません。 来月土曜日の休日なしなので少しづつらいですね。

では、また次回お会いしましょう！

24・修行・前編（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。今回は修行編というよりも前置きの
ようなものですが見ていただけると嬉しいですよ。
それではどうぞ！

24・修行・前編

時間を遡る。

フィルディアが謎の空間を去った直後の話である。

「……うーん、ここは一体？」

泰人は目を覚めます。どうやら気絶していたようだ。直前の事を思い出そうとする。

「確か闇の精霊にやられて変な空間に飛ばされたんだっけ。そこでそこから脱出しようとしてスネイラーを召喚しようとして誰か来たんだけど……」

だがそれ以上思い出せない。だが顔は見たような気もする。それが誰か知っている人だった気もする位でそこまでだった。そして一通り思い出した所で辺りを見回してみる。

かなり広い体育館のような所だ。壁は茶色、出入り口など存在しない。2階もないし倉庫みたいなものもない、ただ広いだけの空間だった。謎の空間のように無限に広がっている訳ではないようだ。

そこで一つの仮説を立てる泰人。ここはさっきの所とは違い作られた場所であると。そして何かしら理由があって自分をこの空間に飛ばしたのだと。

それは何故か。自分を完全に消すためか、自分を助けるためか、もしくは……。

「ふむ、大体合っているな。まあそうでなくては。」

すると目の前に一人の老人が現れる。その姿は・・・

「爺・・・ちゃんか？」

そう。泰人の祖父、玄武だった。

だが玄武はずいぶん前に亡くなっているはず。泰人はいきなり現れた祖父に驚きを隠せなかった。

「生きて・・・いたのか？」

「いんや。」

あっさりと否定する玄武。拍子抜けした泰人はずっとこけそうになる。

「ここはワシが生きていた時に作った世界じゃよ。いつかお前がドイツオールに関わった時ここに送るようにヴェイントルと彼にお願いしたのだ。」

「えーっと、詳しく教えてくれるか？よく分からないんだけど・・・」

「全く仕方ないのう。とりあえず必要な所だけ教えとくか、詳しくは後でヴェイントルにでも聞くんじゃないな。」

と言って一息つく玄武。どうやら話すようだ。

「この空間はお前の魂を修行させる、そしてワシは案内役じゃよ、本物の代わりにお前に修行をつけるためにな。次に黒い水晶に宿っ

ている闇の精霊、ヴィントルじゃが奴は見た感じ悪そうに見えるだけで根はそこまで悪い奴ではないから協力してくれるだろうな。実際奴のおかげでここまで来れたんじゃから。」

それに頷く泰人。確かに闇の精霊に莉麻を奪われたが何か理由があるのだろう、そう思っていた。

こう簡単に信じたのも泰人が祖父が大好きだったこともあるだろう。いつも面白い話や遊んでくれたり、メジャーをくれたりしていたのでとても仲が良かったというもある。

「そして今倒すべき相手、そいつを倒せるのはお前しかおらん。その為にもここで修行して力をつけるとそう言う訳じゃ。」

「はい、質問。そういえばヴィントルって確かまだ爺ちゃんが生きているところに災害を起こした奴じゃないの？門番の人が言ってたけど。」

「ふーむ、その話には続きがあるんじゃが・・・門番か・・・そういえば彼には門番の事詳しく話してなかった。早とちりしたかもしれんな。まあそれはいい。それよりもしつかりと聞きなさい。」

そう言ってまた一息つくと話し始める。

「ヴィントルの災害、表ではそう呼ばれているが実際は違う。本当は他に黒幕がいるんじゃないよ。ヴィントルが闇の精霊になった理由は一人の少女を救うためじゃった・・・そう、光の儀式によって光の精霊ミアになって暴走してしまった一人の少女のために。だがヴィントルはその事実を隠ぺいするためヴィントルの災害ということにして王に頼んだ。とまあこんな感じじゃな。だからお前が聞いた話もほとんど嘘なんじゃよ、真実を知っておるのはワシと青龍、

ヴィントル、王位なものじゃな。まあ、朱雀は薄々分かっていたよ
うじゃがな。」

「ということはそのラスボスを倒せば全てが終わって昔のこともす
べて解決、ハッピーエンドって訳か。」

それに頷く玄武。闇の精霊、ヴィントルは悪い奴ではなく他に黒幕
がいる。それを倒せばいい。泰人はそう解釈した。彼という言葉も
気になったがここでは教えてくれないような気がしたため止めるこ
とにした。

「まあそんな感じじゃな。詳しくはヴィントルにでも教えてもらう
といい。さて早速始めようとするか。まずはこれを受け取るといい。」

そう言って何か投げてきたものをキャッチする。それはメジャーだ
った。ラルゴにとても似ていたが。

「修行用ラルゴじゃよ。それを使って技を安定させてもらおう。そう
いえばいくつの技が使えるようになったんじゃない？」

「えーっと、ラルゴウィップ、ラルゴウォール、スネイラーの3つ
かな。」

「なるほど、そういえばその3つしか教えていなかったか。という
ことは応用もーからということか。」

その言葉を受けて考える泰人ラルゴウォールの結界バージョンとフ
イルディアについて話そうと決断する。

「そういえば今は魂？だけなんだっけ。まあそれよりもラルゴウオールの結界みたいなやつができるんだけど、妖精のフィルディアさんの力を借りて。」

「妖精の力か。確かにそれなら力は弱いけど結界が使えてもおかしくはないか。それはそれとして早速やるとしようか。教えることは4つ目の技、覚醒状態、ウィップとウォールの応用方法、覚醒スネイラーの制御、実践による特訓とこんな感じかのう。では早速始めようか。」

こうして修行は始まったのだった。果たしてうまくいくのか？

続く

24・修行・前編（後書き）

どうでしたか？

説明だけで終わってしまいましたね。詳しくは次回になります。

さて次の投稿ですが来週を予定しています。その後しばらくは未定となります。

それではまた次回お会いしましょう!!!

25・修行・後編(前書き)

おはようございます、ロンロンの弟子です。

さて今回は修行編ラストです。話もそろそろ一つに集まりつつありますね。詳しくは本編で。
それではどうぞ！

25・修行・後編

玄武の修行が始まった。

まずは新技スネイルシューターの習得だが、ただ使うだけならばすぐにでもできる。という訳で覚えたうえで全ての技が使いこなせるように指導するのが目的だ。

「さて、シューターを出してみる。向こうにある動局的に当てていくだけじゃが、集中力と命中率を上げる大事な特訓じゃな。」

泰人は頷き修行用ラルゴをシューターに変化させる。そして的目掛けて撃ち込むが・・・ピュンと避けられてしまふ。どうやらの意志を持っているようだ。

「おいおい、そんなのありかよ。」

「実戦向けじゃよ。すぐにでも戦えるようにするには多少厳しくてもこれを通り越えられんことにはな、莉麻達を救うことはできんぞ。」

その通りである。今の泰人は戦闘知識もある程度はあるものの少し強い相手ならばすぐに負けてしまふ。泰人自身それには気付いていた。だからここにいるということも。

玄武の言葉に黙って頷きの当てを再開した。

「格闘術を身につけるにはかなりの時間がかかる。お前は打たれ強くはあるが攻めはいまいじゃからな。武器に頼つても勝つしかないじゃよ。頭の回転の速さと動体視力はかなりいいからそれを生かすしかない。鞭の使い方に慣れていない、となるとウィップの

バージョンアップしかない。後はラルゴウォール、別名蝸牛結界の制御、そして今やっているシューターの命中率アップ、これで十分戦えるじゃろうな。・・・真スナイパーの制御まで教えられればいいんじゃないが、時間があるかどうか・・・。」

最後の方はボソツと呟くように言ったため聞こえていなかったが重要な所はしっかりと聞こえていたようだ。泰人は集中力を更に上げる的を狙っていった。

その後時間で言うと約2週間ほど経った。

その間に泰人はシューターをかなり自由に撃てるようになった。そして門番から渡された箱、その中身が覚醒に必要なアイテムであると教えられその使用方法、そして覚醒後のウィップ、ウォールの使い方まで詳しく教えてもらった。

「まあ、こんなもんかの。さて後はあれじゃな。」

泰人は倒れて寝ていた。タオルがかけられているが床に直接寝ている為寝にくいだろう。だがかなりハードな特訓だったためそんなことも気にしていない。

そして玄武が泰人を起こす。

それに応じて泰人は起きるがまだ疲れが残っているのか眠そうだった。

「・・・睡眠時間4時間の毎日修行って流石に疲れたって。休ませてくださいよ。」

「それは何度も聞いた。ここが精神世界であつても休まねば疲れるのは当然じゃな。さて飯はこれじゃよ。」

そう言つてクッキーを一枚渡される。・・・どう見ても普通のクッキーだが、効果としてこれ一枚で一日分のエネルギー補給、満腹感が得られるという優れたものである。時間がない人にお勧めで王都の店で売っている。一つ日本円で約2000円である。

「・・・もうこれ嫌なんだけど。」

泰人はしばらくこれしか食べていない。流石に飽きてきていた。しかしここにはこれしかない。しょうがなく受け取ると口に入れる。味は豊富で色々ある。一応飽きないようらしい。今日はチョコ味のようで甘いものが苦手な泰人も普通に食べられる。

「苳麻のお菓子が恋しくなってきた。全部終わったら腹いっぱいになるまで作ってもらつぞおおおおお！！！」

テンションがおかしい泰人。しかし玄武はそんなこともお構いなしだ。

「さて今日が最終日じゃ。今日はあれを・・・。」

とそこで後ろから誰か近付いてくるような気配がした。玄武が振り返るとそこにいたのは・・・

「やあ、玄武。久しぶりだね！！！」

白虎だった。相変わらず元気がいい。その顔を見た玄武は露骨に嫌

そんな表情をする。

「いや、別にあんたは呼んどらん。早く逝って本物に会って来い。」

「ちよ。それひどいんじゃない!？」

漫才を繰り広げる二人。泰人はそんな2人をどうでもいいようなものを見る目で見ていた。

「僕が泰人の相手をしようってことさ。戦いに行く前にはちょうどいいだろう。」

「いや、これから最後の特訓をする所じゃからな……。」

と玄武が言う前に白虎が泰人に高速で近づく。泰人はそれにかろうじて反応して防御の体勢をとり、白虎の拳を受け止める。

だが受け止められたが威力までは止められず受け止めた手がジーンと痛む。

「いや、痛い。痛いから。いきなり何すんだよ。」

「当然、最後に手合わせしようと思っただけ。せつかくここまで来たんだし。」

突然自分勝手なことを言い始め攻撃してくる白虎。泰人はそれを避けつつ間合いをとる。

「仕方ない脳筋じゃな。泰人、しょうがないからそいつをぶっ飛ばして黙らせてやれ。」

「えー、俺この人とは戦いたくないんだけど。変だし自分勝手だし、なんか頭のネジいくつか飛んでるしおかしいだろどう考えてもさ。」

「さあ、どうした？反撃してきなよ。」

白い虎の猛攻をギリギリで避けつつ文句を言う泰人。だが白虎はそんな言葉が全く耳に入っていない。

「ああもう！！仕方ないな、やるよ、やればいいんだろう。」

半ばキレ気味で泰人は距離をとるとラルゴを構える。どうやらすでに覚醒状態らしい。

「蝸牛結界、拘束！！」

シーン

特に何も起こった様子はない。白虎は思いつきり笑う。

「いやー、面白い冗談だね。なんも成長してないのかい。」

そう言っただけで歩きだそうと足を動かそうとするが・・・動けない。というよりその場から動けなくなっていた。まるで自分の周りに見えない壁があるようだ。

「・・・成長しているようだ。これはかなり面倒な技だね。解除するには結構時間がかかるからその間に大きな攻撃技の準備でもされ

「ちやたまらないな。仕方ない、本気を出すかな。」

そう言つて白虎は懐からイヤリングを取り出して右耳につける。そして自らの名を呟く。

「……ジュライト。」

……瞬間パキーンと音がした。どうやら結界が破壊されたようだ。白虎はそのまま泰人に狙いを定める。白虎の周りには白銀の砂が舞つており、髪の毛が逆立っている。

そんな光景を見た後でも泰人は冷静だった。次の手段を用意するためかラルゴを構えて何やら呟いている。

「何をやっているか知らないけど一気に決めるよ。」

そう言つて距離を一気に詰める。そして強化した拳で泰人を殴ろうとするが……

「……蝸牛結界、転移！」

その拳は空を切った。白虎はかなり驚いたようだ。辺りをキョロキョロ見回すが見つからない。

だが急に自分を狙っている視線を上にかけて見上げる。

そこにはスネイルシューターを白虎に向けている泰人の姿があった。どうやら上空に移動したらしい。

白虎は避けようとするがすでに発射した後で間に合わなかった。

「ラルゴシューター!!」

そう言つて発射された水の塊は白虎の右耳についているイヤリング

を破壊する。すると白虎の周りに舞っている白銀の砂が消える。その反動でよるける白虎、どうやら覚醒状態は肉体にかなりの負荷をかけるようだ。

泰人はそこを見逃さなかった。シューターを瞬時にウィップに切り替える。

「アウト&チェンジ、ラルゴウィップ・タイプS!!」

自由自在に動くウィップが一本の槍のように鋭くなり、そのまま白虎の軸足となっていた右足を貫く。

「……ちっ。」

痛そうにしながら軸足を左にする。どうやら右足はかなりの重症のようであり血が出ている。立っているのもやっこのようだ。

「勝負あったかの。」

「……」

玄武がそう話す。誰が見ても勝敗は明らかだった。白虎は奥の手を失い機動力を奪われた。もう残っている手段は……

「やはり僕は親衛隊最弱だったのかもしれないな。」

ボソツと呟く。泰人はうまく着地し白虎の方を見る。

「玄武にも青龍にも朱雀にも黒の魔術師にも勝てなかった。イヤリ

ングの力を借りなければ覚醒もできない。ヴィントルの災害の時には結局何もできなくて、その後はあの悪魔にいいように利用されただけだった。そんな僕の存在価値ってなんなのかな……。」

「……………」

白虎は今までの不満を全て吐き出した。どうやら過去に何かあったようだ。玄武も何も言えずに黙っている。

「……………だったら、俺を強くしてくれよ。」

「……………え？」

「さっき言ってただろ。俺の修行のために来たってさ。あんたの最強の攻撃を俺に見せてくれ。絶対に無駄にはしない。」

真面目にそう言った。

白虎も最初は驚いていたが……急に大声で笑い出した。

「はははははははは、全くお前は変な奴だな。……分かった、こいつを受けきれれば合格だ。青龍や悪魔と戦うならこの技を打ち破ってみせろ！！！」

そう言っただけで地面に手をつける。しかしここは床だ。彼の力の源である土はこの下にあるのかも分からない。ここは作られた世界なのだから。だが作られた世界ならば……。

「この世界の一部を構築しなおい、大量の土を出現させればいいんだよ。」

すると床に穴が開きそこから土でできた虎が次々に飛び出してくる。全部出てきたときには10体になっていた。

「・・・あれをやる気か。」

玄武は分かっていた。白虎はの必殺技を。だがあえて口にはしなかった、この戦いが本当の意味で伝承になるならそれを邪魔はできないと。

泰人も構える。どうやらスネイラーを召喚するようだ。そして・・・

「合体せよ!!！」

「現れる、スネイラー!!！」

同時に声が体育館内に響く。

そこには体長10mクラスはある虎と蝸牛が睨みあっていた。どうやら互いに決め技を使うようだ。辺りに緊張が走る。

そして同時に指示する。

「いつけー、ラルゴブラスター!!！」

「決めろ、超虎口大砲おー!!！」

ラルゴの角から巨大な水の塊が、虎からは大きくて太い光線が発射される。

そして互いにぶつかり合う。

ものすごい音を立ててぶつかる二つのエネルギーの塊。威力はほと

んど互角のようだ。

「いっけえええええええええええええええええ。」

「うおおおおおおおおおおおおおお。」

互いに譲らなかつた。そして玄武は思った。

これは勝敗は関係ない。もっと他の意味がある。そうさっき思った
ような意味が……。

そして決着がついた。土でできた虎が徐々に崩れ始め威力が弱まっ
ていった。どうやら水分が土でできた身体を濡らし続けて形が保て
なくなってきたようだ。

「またか、この技がまた負けるのか。……だが今回の負けは
悪くないかもな。」

そう呟くと同時に虎は消滅。

残った水の塊は白い虎を飲み込み破裂した。

それからしばらく経った。

白虎は回復していた。そして泰人に何かを手渡した。どうやら虎の
形をしたアクセサリーのようだ。

「こいつを君にあげよう。きっと役に立つはずさ。」

「……ありがとう。」

泰人が受け取ると白虎の身体が徐々に消えていく。どうやら別れの時が来たようだ。

「……君に託す。後は頼むよ。」

そう言って白い虎は消えていった。

「そろそろ時間じゃな。もうこの世界も限界が近い。お別れじゃ。」

「ありがとう、爺ちゃん。……凄く大変だったけど何か色々学べた気がするよ。」

作られた世界は不完全だった。役割を終えた今消滅を迎えるのみだ。最後に玄武と泰人が握手を交わす。そして

「最後に言っておく。時間がなかったから出来なかったが、スネイラーは使わない方がいい。お前のためだ。後、……ラルゴの声に耳を傾けるといいかもしれんな。」

それがさ最後の言葉だった。それが言い終わると同時に二人はその

世界から消えていた。
そして作られた世界は・・・消滅した。

「ワシの孫だ。きっと大丈夫じゃろう。全てを頼むぞ！」

泰人は消えゆく意識の中そんな声を聞いた。
その後泰人が聞いた声は莉麻の声だった。

続く

25・修行・後編（後書き）

どうでしたか？主人公の空いてた時間も埋まり後は最後の合流をするのみにまりました。

さて、6月ですね。忙しい月になりそうです。

次回の投稿は未定になります。次の投稿の時にはツイッターでも呟きますかね。ツイッターは名前から飛べるプロフィールで確認できます。もし宜しければ見ていただければ嬉しいです。

それではまた次回にお会いしましょう！！

26・出陣(前書き)

どうも、ロンロンの弟子です。遅れてしまい申し訳ありません。完成いたしました。ついに色々と動きました。詳しくは本編で。それではどうぞ！

26・出陣

場面はディオール。

ティルス達は気付いたら王都内の病院にいた。どうやら移動能力が復活しているようだ。しかも時空を超えるだけでなく普通に移動もできるようになってきているみたいである。

ティルスはすぐにスエイゼルを呼んだ。スエイゼルは今手術が終わった所のように急いで駆け付けてくれた。そして傷だらけの沙汰を見るととても驚いた表情をした。

「・・・これはヤバいかもしれないな。すぐに手術をする必要がありそうだ。」

スエイゼルは看護婦にタンカーを持ってこさせると、沙汰を乗せて手術室へと入っていった。

ランプがつく。そこから長い時間ランプが消えることはなかった。

スイングを手術室前に待たせてその間に二人は行動を起こすことにした。周りの人から同じ病院にテイライズとフィドウが入院している情報を耳にした。まあ、有名人なので話が広がるのが早いのだろう。

ティルスは受付の人に話を聞き、部屋番号を教えてもらい向かった。関係者のみ立ち入り可能だったがティルスは関係者なので問題なかった。

部屋に入ると初老の男性と出会った。執事のように相手はティルス

に気付くと状況を話し始めた。

テイライズとフィドウを車に乗せて城へ向かう途中で謎の少年に襲われたこと。何とか倒すことができたがテイライズ、フィドウが重症を負って今手術を終わったことを話した。謎の少年も放っておけずに連れてきて別の部屋で入院していることも。

「今まで手術室前にて待機しておりましてまだ城へ報告しておりません。今落ち着いた所で向かおうとしていたのですが、ティルス様も来ていただけませんか？私だけでは全て説明できるかどうか不安です。」

「分かりました。僕達も王に報告することがありますので向かおうと思っただけです。ではお願いします。」

そうと決まると3人は城へと向かうことにした。

外に出るとすでに太陽が沈みかけてきれいな夕焼けが見えた。車に乗り込むと城へ向かった。

執事が兵士に話をつけてすぐに王との面会の時間をもらった。すぐに謁見の間に通される。

「・・・ふむ、最初来た時と仲間が違うようだ。というよりたった二人か。さて、話を聞こうか。」

「分かりました。」

ティルスは話し始めた。

莉麻が闇の精霊に連れていかれたこと、泰人がやられたこと、エルドイから重要な情報を聞いたこと、試練をすべて終えたが沙汰が瀕死になったこと、謎の少年の襲来でティライズとフィドウが重傷を負ったこと等々包み隠さずすべて話した。

「そうか、ご苦労だった。これで王の力は継承されたことになる。・
・だがまだやり損ねたことがある。違うか？」

「・・・え？」

ティルスは驚いた。てつきりすぐにも継承式の準備をさせられると思ったからだ。

「まだやりたいことが残っているのだろう。そんな表情をしている。だったら行って来い。すべて終えた時お前は王としての器として十分な存在となるだろう。・・・だが無理はするな。」

「・・・はい！！ありがとうございます。」

「ティライズ達はスエイゼルに任せておけば大丈夫だろう。さて、準備はちゃんとしておけ。もし欲しければ兵も武器も与えるが・・・」

その言葉にティルスは首を振る。

「大丈夫です。僕達で行ってきます。」

「・・・たつた3人は不安だが・・・、お前が言うならば大丈夫なのだろう。さあ、行くがいい。」

ティルス達は礼を言ってその場を立ち去った。

王は一人になるとすごく寂しそうな、悲しそうな表情をする。

「私はティライズ達になんて残酷な運命を背負わせてしまったのだろっ……。」

「……そんなことはどうでもいい。貴様、何故ティルスを行かせたりした？すぐにでも王位継承をさせておけばこれ以上苦しむ必要もない。」

王の頭に直接声が響く。なんというか機械音のような嫌な声だ。

「青龍を倒せる可能性が少しでも上がるならこの方法を選ぶさ。私は王位継承のためではない、お前を倒す人材を育てる為に彼らに訓練を与えたのだ。それに親衛隊の者達もお前などに利用されるくらいなら命を投げ捨てる覚悟だ。朱雀や白虎のように……。」

「完全ではないとはいえ我が術を受けながら抗うとは流石は親衛隊といったところか。そして玄武と魔術師を逃したのはやはり失敗だったようだ。茅野泰人と谷田沙汰という厄介な敵を増やしてしまった。あの時ミアが抵抗しなければ……。」

「過ぎたことは仕方ない。後は青龍とあの二人、不完全のミアがお前の頼みの綱だろうがそう簡単には……。」

「・・・貴様、ちゃんと見ていなかったようだ。ティルスと一緒にいた娘、あれが最後のピースだ。今のミアにあの娘を会わせれば、流石に覚醒ラルゴでも無理だな。」

王の表情が変わる。ティルス達を追おうと立ちあがるうとするが・・・
・・・身体が動かない。

「止める。今すぐ止めに行かなくては。」

「貴様はここでゆっくりと観戦していることしかできんだ。さて、準備ででしょうか。」

その言葉を最後に王は深い眠りについた。

ティルス達が病院に着くころには夜になっていた。
どうやら沙汰の手術も終わったようで、病室へと移されていた。
ティルスとミアはスイングの話聞く。

「あの先生が言うにはとりあえず一命を取り留めたい・・・
が、意識が戻る可能性は限りなく低いらしい。」

「・・・え？」

驚愕な表情をする二人。どうやら相当大変状態らしい。

「だから誰か一人はつきつきりでいた方がいいと思う。だから・・・」

」。

「だったら私がいるから大丈夫だ。」

その声に振り向くとティライズが起きていた。同室だったので声が聞こえていたようだ。

「どうやら沙汰が危険な状態らしいな。なら私がいるから君達は君たちにできることをしろ。」

「でも、僕のせいで沙汰さんがこんな状態に……………」

「だったら尚更だ。泰人達を連れて戻ってくる、これ以上に奴が喜ぶことがあるか？」

その言葉に頷くティルス。確かにその通りだった。もしかしたら泰人達を連れてくれば沙汰の意識が戻るかも、そう思うしかなかった。

「…………分かった。僕達行ってくる。でも無理はしないでね、君も重傷なんだから。」

「ふん、当然だ。…………お前も気をつけろよ。」

そう言ってティライズは眠りについた。疲れていたのにティルス達の為に無理していたのは誰が見ても明らかだった。

「じゃあ行こう。メディスクローズの神殿の隣にある遺跡へ！！多分あそこに行けば泰人さん達の居場所も分かるはずです。」

二人も同意見だったようで頷く。そして移動しようと集中しだした所で……

カランカラン

何かが落ちた音が部屋中に響いた。

音がした方を見ると融合の腕輪、変身の指輪、導きのビー玉が転がっていた。

「そういえば意識を失ってでもあれだけは手放さなかったんすよね。今手放したってことは……。」

ティルスは頷くと3つのアイテムを拾う。すると沙汰が笑ったような気がした。寝ているのに……。

「沙汰さん、貴方の気持ちは無駄にはしません。きっと泰人さんを連れて戻ってきますからね！」

そう言っただけでティルス達はその後を後にした。

3人は気がつくやうな遺跡の前にいた。それほど古くない遺跡のようだが、中に入ると祭壇のようなものがあるのが確認できる。

「……ここは願いの跡地。何かを失い何かを得る、そんな所よ。」

珍しくミュアが結構話した。
二人はかなり驚いている。

「前にある人物とここに来たの。大事な人を取り戻すために、
あの子を生贄にしようとした。」

すごくさみしそうな表情をする。いつも無表情なのでこれまた珍しい。

「でも、少なくとも今の私は違う。何かを犠牲にして幸せを掴んだ
ってそれは違うもの。私の幸せじゃない。それが大事な人の妹なら
尚更……。」

そう言っつて懐から石を取り出す。それはとても綺麗なエメラルドだ
った。

「私は梓由を止めなくちゃいけない。あの子は多分泰人という。そ
んな気がするの。だからこの石で泰人の居場所を教えてもらう。み
んな助けたいから!!」

そう言っつてエメラルドを祭壇に置く。すると祭壇が輝き始めエメラ
ルドが消えると同時にティルスに緑色の光が発射される。
光に包まれティルスは理解した。泰人の居場所を。

「時空転移!!」

そう言っつとティルス達は……

シュン

一瞬誰かがテイルスの前に現れた気がしたが確認できずその人物達も含め転移を開始した。

ギギギ

「さて、・・・ようやく出番がきたようだ。」

城の中で巨大な銅像が動きだそうとしていた。

続く

26・出陣（後書き）

どうでしたか？無口な子が喋り出すと話も後半だってそんな気がするのは僕だけですかね。

という訳で次回ついに決戦のメンバーが全員集合します。

投稿は恐らく10日前後になると思います。できれば早く投稿したいですね。

それではみなさん、また次回お会いしましょう！！

27・夢の世界（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回はとても短いです。区切りがいい所で止めました。それではどうぞ！

27・夢の世界

長かった

数十年間力が回復するまで

やっとここまで来たんだ

失敗は許されない

私は成功させる

妹を・・・生き返させるために

たとえどんな邪魔が入っても・・・ね

夢の世界

「・・・うふふ。」

泰人達の目の前で宇木風梓由は笑っていた。そう見た目は間違いない
く本人だった。

おとなしそうな感じ、まだ幼さが残る顔立ち。まさに本人だったの
だ。大人っぽい雪美とは正反対である。

「ねえ・・・さん・・・。」

動揺していたのは泰人だけではなかった。隣にいた雪美も泰人以上

に驚いていたのだ。どうやら彼女は梓由の妹らしい。本当かどうかは泰人には分からなかったが。

「いらつしゃい、雪美。私は貴女を迎えに来たの。私と一緒に帰りましょう。」

そう言つて手を差し伸べる梓由。雪美はその手を掴もうとふらふらと梓由のもとへと歩き出す。

目の焦点が合っていない。明らかに普通じゃなかった。

と、ここで泰人が冷静になる。梓由の方を見て何かを思い出すようにする。そして思い出す。一年前の出来事を……。

「……お前は宇木風梓由なのか？」

その言葉に梓由は反応し泰人の方を見る。

「うーん、そうと言えばそうだけど違うと言えば違うのかもね。私は宇木風梓由であつて宇木風梓由ではない。妹を、宇木風雪美を助けるために生まれた存在、光の精霊ミア。それが私よ。」

「ミアつてまさか……。」

泰人は驚いた。ミアは一年ほど前に行方不明になつている。そして宇木風梓由と会つたのも一年前、ということとは同一人物の可能性が高い。だが泰人には分かる、あの時会つた梓由とは全くの別人であることに。そして門番から聞いた話。……今考えてもまとまらないと分かつた泰人はとりあえず今すべきことを考える。

それは雪美とミアを引き離れた方がいいかもしれないということ。今はミアの思い通りの展開にさせてはいけない、そう考えた泰人は行動に移そうとしたが彼よりももっと早くに動いていた者がいた。

「行っちゃ駄目だよ、お姉ちゃん!!」

莉麻だった。腕を掴み必死に行かせまいとしている。

「私なんとなく分かるの。あの人は危険だよ。お願い、・・・行かないですよ。」

涙目になりながらも止める莉麻。すると雪美の足が止まる。
徐々に目に光が戻っていく。

「あ・・・。」

目に光が灯り正気に戻る。

そして雪美は莉麻の方を見ると、莉麻はまだ必死に腕を掴んでいる。
そんな莉麻の頭を撫でてあげると、向こうも気づく。

「もう大丈夫、安心していいよ。」

「・・・うん。」

雪美は安心した莉麻の表情を見るとミアの方へ向きなおす。もう大丈夫のようだ。

「姉さん・・・いえ、光の精霊ミア。私、思い出しました。私がここにいる理由を・・・私はもうこの世にはいない存在、つまり死んでいるんですよね。」

「・・・!!」

泰人と莉麻はその告白にとても驚く。だが雪美は更に言葉を続ける。

「そして私は長い間夢の世界の守り役として色々な人の夢を守ってきた。悪夢を見ている人がいたら次の日にはいい夢を見られるようにしたり、困っている人たちの相談に乗ってあげたり・・・、ずっとそんな日々を過ごしてきたの。でも心残りだった。置いてきた姉さんのことが気がかりでしょうがなかった。だから忘れるために名字は別のを語って過ごしていたの。でもできなかった。私には姉さんが・・・もしかして思っていたけど、貴女がここに来た理由って。」

「そうよ、話してあげる。私がここに来たのは、・・・・・・・・・・
・貴女を、宇木風雪美を生き返らせるためよ。」

「・・・・・・・・ふん。」

そして彼女は語り始めた。自らの過去を・・・ヴィントルの災害の全貌を。

続く

27・夢の世界（後書き）

どうでしたか？

短くてすみません。なんか前回の十八章並みに短くなりましたね。

という訳で次回は3日以内には投稿しようと思います。話は出来ているのでまとめる作業だけなので。

それではみなさん、また次回お会いしましょう。

28・偽られた歴史2（前書き）

おはようございます、ロンロンの弟子です。ついに第2部も30話・
・・・、予告を入れますが、突入しました！

ここまで来れたのは見ている皆様のおかげです。ありがとうございます
ます。

今回は光の精霊ミリアの過去話の前編です。ついに色々明かされま
す。・・・多分ミスはないはず。

それではどうぞー！！

28・偽られた歴史2

あれは今から約50年ほど前の話よ。

とある病院に一人の患者が入院していた。

その子の名前は宇木風雪美。元々体調はあまり良くなかったからずっと入院を繰り返す生活をしてたわ。

そして姉の梓由はそんな病弱な妹の事が大好きだった。例え身体が弱くても心は強いもの、それが口癖だったわね。とても仲良しな姉妹で病院中でも有名だったな。

ある日、一つの知らせが届いたの。

「姉さん、次の週になったら一度家の方に帰してもらえるみたいよ。」

「本当！？それはとってもいいニュースじゃない。」

いい知らせだったわ。体調も落ち着き、帰宅を許されたのよ。

しばらく入院してたから学校の方もほとんど行けていなかったあの子にとっては久しぶりに行ける学校がとても楽しみだったみたいで、よく梓由にも話をしてたっけ。

そして日々は問題なくこのまま過ぎていくのだと誰もが思ってた。

でもあの日、雪美の退院の日全てが始まったの。

その日梓由は悪夢にうなされて目を覚ました。

その夢は妹の身体から白い魂のようなものが抜け出てそれが黒い玉のような物体に飲み込まれて消える光景だったわ。

梓由は気がつく和家人を飛び出していた。時刻は夜中の2時、人気の

ない所を彼女はただひたすらに病院の方へと走っていった。距離は少しあったし時間がかつちやっただけだね。

勿論病院は閉まっていた。見回りの人が歩いているのが見えたわね。見つかったら帰らされると思った梓由はだれにも見つからないように秘密の入り口を使った。

1階のとある病室は窓の鍵が壊れてて侵入が可能だったの。頻繁に見回りの人が来るけど……。

見回りの人をやり過ごした梓由はそこから入って妹の病室へと入った。

そこにはちゃんと妹がいたわ。梓由は安堵した。

……だけど

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

変な音が聞こえる。妹の隣の機械からだった。そしてこの音は梓由も知っていた。

……心肺が停止した音だ。梓由は隠れてここに来たのにもかかわらず妹の方により大声を出した。

「雪美！雪美、死なないで！！」

梓由は必死に呼びかけた。だけどその音が止むことはなく、やがて来た人達に梓由は捕まってしまった。

次の日梓由は妹の病室にいた。

妹の顔には白いタオルのようなものが掛けられていた。

そんなんじゃない、妹の顔が見れないじゃない。そう思ったが急に悲しくなってきた。

どうやら妹の病状は本当に良くなりつつあったらしい。お医者さんの話でもこんなケースは初めて見たのだと言われた。そこで梓由は思い出した。妹の魂を飲み込んだあの黒い玉の存在を。そのせいで妹がいなくなってしまったのだと。

梓由は妹の死を受け止められずにいた。だからそんな発想をしてしまったのかもしれない。

「君は失ったものを取り戻したいのか？」

突然頭の中にそんな声が響いた。

「……え？」

突然聞こえた声にあの子は驚いていたわね。そりゃびっくりするでしょう。でも声の主は言葉を続けたわ。

「我は君の願いを叶えることができる。だがその代償を払ってもらうことにはなるが……。」

どうやら声の主は梓由と取引をするつもりだった。そう、あの子の精神状態をよく知っていたから。普通の人だったら聞き直すか、もしくは。

「……私、妹が戻ってくるなら何でもする。だからお願い、妹を

生き返らせて!!」

と願うのは当然よね。すると梓由を光が包む。

・・・そして光が晴れるとそこには当然梓由が立っていた。でもその梓由は

「・・・さあ、始めましょうか。」

この私、ミアになっていたけどね。

その後声の主は妹の魂を奪ったのは、黒の魔法使いヴィントルであると説明し私をディオールへと送った。どうやら特殊な術を使ったようだけどそこまでは私にも分からないわ。

そして私はヴィントルを探した。でも彼は簡単には現れなかった。人前にはめつたに現れず、時々親衛隊に力を貸しているという情報を得た私はまず一騒動起こすことにした。

町一つを消した所で奴らは来たわ。青龍、白虎、朱雀、そして玄武。彼らは私を止めるため全力で私に挑んできた。それはもう強かったわ、・・・力を得た私ほどじゃなかったけどね。

時間はかかったけど玄武以外は倒すことに成功した。残った玄武の使うラルゴの能力はとても厄介で結構な時間を使ってしまった。そこで来たのよ。黒の魔法使いヴィントル、そう貴方よ。

・・・まあ、いいわ。そして二人がかりで私に挑んできた。今更一人増えた所で問題ない、・・・それが甘かった。ヴィントルの強さは桁違いすぎた。

親衛隊の更に上に行く強さだったの。そこに玄武のサポートもあり、私は徐々に追い詰められていった。でも私は諦められなかった。雪美を、妹を救う・・・、私の使命はそれだから。するとまた声が聞こえてきたわ。

「どうやら苦戦しているようだな。ふむ、少し力を貸してやるとするか。」

すると私にまた新たな力が身に付いた。そして今度こそ彼らを追い詰めたの。

でも向こうの方が上を行ってたわ。

戦いの場所を私に気付かれないように願いの跡地に移していたの。

何か不思議な場所かなと思っていた時にはもう遅かった。ヴィントルは願いの跡地で自らの肉体と引き換えに私を封印した。

でも私も簡単に封印される訳にはいかなかった。力の半分を未来に飛ばしたの、これから生まれる子達に受け継がれるように。自由になったその時こそ妹を今度こそ救うそう決めたから・・・。

意識が戻った梓由は今までの事をすべて覚えていなかった、つまり記憶喪失になっていたの。

玄武は梓由が別世界の人間と知り、王に頼んで梓由の世界に飛んでそこで暮らし始めた。

そしてヴィントルは行方不明になった。きっと身体を失ったから次の機会を狙っていたのじゃないか。妹の魂を使い何をするのかは分からなかったけど、すぐには動けないみたいだったしこっちはこっちで体力回復のために休息を取ったわ。

戻ってきたときすでに3年の時が経っていた。梓由の両親や親戚を見つけれなかった玄武はしばらく面倒を見てくれて、一応感謝しているわ。きっと彼もヴィントルに騙されていたのね、可哀想に・・・

。。
その後例の事件にヴィントルの災害という名前が付けられたのを知ったわ。いつの間にかそう呼ばれるようになったから、誰がそう仕向けたのか玄武には分からなかったみたいだけど私には分かる。あの声の主がやったんだって。

梓由は不老不死になっていた。まあ、光の精霊である私を宿してるんだから当然だけどね。玄武は引き剥がそうとしたけれど出来なかった。どうやら雪美を救うまでは離れられないようになっていたみたいね。

その後玄武は結婚すると同時に梓由を養子にすると行ってきた。でも彼女は断り信頼のおける施設に預けられた。・・・恐らく名字が変わるのが嫌だったのかもね。

その人達は不老不死である梓由を受け入れてくれた。優しい人達に囲まれて幸せだったのだと思うわ。

それから何十年も時間が過ぎた。そこに来る人に時々怖がられた時もあったけど、ちゃんと話すといい子だって分かってもらえて打ち解けられた。玄武も頻繁に来てたわね、時々家族も連れて。小さい頃の泰人、貴方にもあったことがあるのよ。

時が経つにつれ私も徐々に力を取り戻してきたある日に悲劇が起こった。それが

玄武の死だった。

続
く

28・偽られた歴史2（後書き）

どうでしたか？この過去話はいつか書こうと思っていたので書いて良かったです。

今回は恐らく1週間ほどかかるかも知れませんが、本当はこの話で終わらせたかったです。本当はこの話で終りたので、ではまた次回お会いしましょう！！

29・偽られた歴史3（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回ついにほぼメインが揃います。

後昔話も終わります。

それではどうぞー！！

29 偽られた歴史3

6年前の夏ごろだったかな。

玄武は死んだ。90年近く生きてたから寿命だと思う。

でもこれが梓由の今後を左右することとなった。

デイオールで生きていればもっと生きることができたけど梓由のためにこっちで生きることを決めた、それは梓由が自分が玄武の寿命を縮めたと思っても仕方なかったのかも。

私も少し悲しかった。いい奴には違いなかったから……。

それから梓由は塞ぎ込んでしまった。大事な存在を失った、そうすると人間強いきつかけがないと立ち直れないものよ。

そしてそのまま5年過ぎた所で更に深刻なことが起こったわ。

施設の取り壊し。梓由の居場所がなくなってしまった。

別の場所を紹介されたけど行く気にはなれなかった。そして行く所もない、いまだに記憶の戻らないそんな彼女はとある川の近くで途方に暮れていた。

そんな時ね。貴方、……茅野泰人と会ったのは。

……そこからは私の記憶からは抜けているわね。どうせもう一人が持っているんでしょうけど。

私の記憶はそこから少し経った後の事、気がつくとその病院の前にいたわ。

そして私は自由に梓由の身体を動かせるようになっていた……けど力は四分の一になっていたわ。

残りの力を持っていたのは未来に飛ばした半分の力をサミーと莉麻

が持っていたわ。そして、もう一人の私、本当の宇木風梓由の記憶を持った存在。

でもすぐ見つかったわ。誤算はヴィントルがすでに莉麻とサミーを手にしていたこと。

だから私は宇木風梓由に会って莉麻を手にする話をしたら、時間がかかったけど説得することができたわ。

そして思い出した。願いの跡地のことを。もしかしたら莉麻を生贄にすれば雪美は帰ってくるんじゃないかって。

・・・うふふ、まあ落ち着きなさい。続きが聞きたいでしょ。

だけど邪魔をされた。ヴィントルにね。

その後は彼に取り込まれてここまで来たの。まさか雪美がいるなんて思わなかったから嬉しかったわ。

やっと、ようやく私は役目を終えることができる。雪美を取り戻して邪魔するヴィントルと泰人、貴方達を倒してね。

ヴィントルと分離した時力のほとんどが戻ったわ。全盛期の黒の魔術師には届かないけど、貴方達よりもかなり上はいつてるわね。それで動きやすいようにこの世界を形成している星音を取り込んでこの世界を手にした。後は決着をつけるだけ。

・・・さてこんな感じかしら。

ミーアの話が終わる。

泰人は莉麻の話でかなり怒っていたが落ち着いたようだ。

「・・・なるほどな、大体理解したぜ。だがお前は勘違いしてる。

お前に話しかけた声、あれはお前の思っているような優しい奴じゃ

ねえ。お前は奴に利用されているだけなんだよ。」

サミーが話す。今まで話を無関心っぽく聞いていたがちゃんと聞いていたようだ。

「それでもいいわ。どんな手を使ってでも雪美を救う。それだけよ。」

「ここでこの小娘を解放したら大変なことになるって言うっても信じねえよな。」

「当然ね。貴方の事は信じないわ、さてそろそろ終わりにしましよつか。」

ミアはそう言うつと右腕を突き出し何かを呟き始める。すると目の前の時空が歪み何かが出てくる。

「……どうやら金色に輝く鎌のようで、両手で持つ大きいやつだ。それを構えるミア。どうやら本気のようにだ。」

「……ちっ。おいお前ら、ここは一旦引くぞ。今の俺様達では勝てねえ。」

「俺も同意見だ。ここは体勢を立て直すべきだと思つ。」

サミーと泰人が言うつと、莉麻と雪美は渋々頷く。

「あら、逃がすと思つ?。」

そう言うつて鎌を振りおろす。

するととんでもない衝撃が泰人達の横を通過し少し飛ばされた。

体勢を立て直して衝撃が起きた方を見ると、地面がぱっかりと開いて数キロ続いていた。

「とりあえず今のは外したけど、今度は外さないわ。雪美、早くこっちに来なさい。」

「……駄目、こんなことは駄目だよ。」

しかし、雪美は首を振る。明らかに怖がっている。

「やっぱりヴィントルを倒さないと駄目みたいね。今度こそ覚悟しなさい。」

狙いをサミーに絞る。

サミーは避けようとするが明らかに間に合いそうもない。仕方なく何かを唱えようとする。

「終わ……。」

振り下ろす寸前、目の前に男が現れその腕を抑える。

男は白いマントを被った男だった。

「まあまあ、待ってください。ここで彼らを倒すのは得策とは言えませんよ。」

ひょこつと白マントの後ろから変な男が現れた。

その男は道化師のような格好をしている、シュパルツだった。

「……これもあの声の導きかしら。貴方達、何しに来たの？ 邪魔しにきたなら……。」

「いいえ、私達は貴方の助けになるように参上したのですよ。」

その言葉に驚くミア。どうやら彼女は彼らの事を知っているように敵対していたようだ。

「ほら、ヴィントルを見てください。何か唱えようとしていたでしょう。今は倒すよりも力を封じる方が先ではないですかね。」

「……そうね、貴方の言うとおり。じゃあこうするわ!!」

そう言つて鎌を投げる。サミーは唱えていた呪文を一度中断し即席の防御術で盾を展開する。

だが、鎌はその盾を破壊するのではなくすり抜けた。

「………しまっ」

遅かった。その鎌はサミーを……通過した。

「……え?」

泰人達は茫然としていた。

そのまま鎌はミアのもとに戻っていく。
すると

「ぐ、あああああああ。」

急にサミーが苦しみだす。

そしてサミーから水晶が抜け出てくる。

カッーン

水晶が地面に落ちる。

「サミーーーーーー!!!!」

瞬間ラルゴが光る。すると泰人からフィルディアに姿が変わる。
駆け出し落ちていくサミーに手を伸ばす・・・が

スカッ

空を切る。そして前を見るとミアアの隣でサミーを掌に乗せている
シュパルツがいた。

「お、おかあさ・・・。」

サミーは何かは話そうとしているが身体に力が入らないのかぐつた
りとしてしまった。

「さて、今ので少し力を使ってしまったし、今日は明日の説明をし
て終わりませうか。・・・ちよとどよくお仲間も到着したようだ
しね。」

その言葉に莉麻は振り返る。

すると先ほどミアアが鎌を取り出したように時空が歪み、そこから
3人の少年少女達が出てくる。

そうティルス達だった。

「……えーっと、ここがその世界ですかね？」

そう言っただけを見回すティルス。すると莉麻が視界に入る。

「あ、莉麻さん！！無事ですか？」

「あ、うん。私は大丈夫。どうやら新しい人達も来たみたいだね……
ってそれより！！」

そう言っただけミリアに向き直す。するとティルス達もその方を見る。

「……！！？」

ミリアがかなり驚いた表情をしていたがミリアは気にせず続ける。

「明日この世界でサバイバルゲームを決行するわ。参加者は総勢100名。そっちは泰人、莉麻とその3人の5人。こっちはこの二人。残りは適当に用意するわ。そして残り15人まで争ってもらって、決勝トーナメントをして決着をつけるの。私は決勝トーナメントからってことだね。そして、見事に優勝したらこのサミーちゃん
と私が借りてる身体を持ち主をお返しするわ。でも、貴方達全員がゲームオーバーした場合、雪美を私に渡してもらわね。開始は明日の朝9時に花火を鳴らすからそこでスタート。気絶したら脱落
この世界から消えてもらいます。まあ、外野は実際にはいない人たちだし問題ないわね。問題は貴方達。貴方達が脱落した場合人質に
加わってもらわね。全滅したら全員消えておしまい。もちろんその
の地面に落ちてる水晶もね。基本なんでもありよ。生き残ればいい
わ。以上だけど何か聞きたいことは？」

シユパルツと白マントは頷く。同意したようだ。そこでティルスが手を挙げる。

「今一理解していないんですけど、サミーと泰人さん達の知り合いが貴方達に捕えられていると。そして断ればおそらく……。」

「そうね、もし参加しないで逃げ出したらサミーには消えてもらうことになるわね。」

びくつとフィルディアが震える。どうやら今の言葉は聞こえていたようだが、どうやら話すほどの力が残っていないようだ。

「さて、私を楽しませてね。それじゃ……。」

「待って!!！」

ミアは声を出して止めようとしたがそれよりも早く止めた者がいた。雪美だった。

「それって戦争じゃない。……嫌だよ、私の為にみんなが争うなんて。だったら私、貴方と一緒に……。」

「駄目!!！」

今度こそミアが声を出す。彼女は沙汰達と行動している間も基本顔が見えないように過ごしていた。だが、今回は違った。彼女の素顔が明らかになった。

一緒に風呂に入って一緒に寝ていたティルスさえちゃんと確認でき

なかつた素顔が・・・

「・・・・・・・・貴女を止める。」

彼女を光が包みそれが止むとそこには、知らない女性がいた。

背は少し高めでかなり大人っぽい。白くひらひらした服っぽい何かを着ている。

背中には翼が生えて、頭には天使の輪がついているその姿はまさに、空想上の天使だった。

「あれは、・・・光の精霊ミアア。本で見た姿にそっくりです。」

ティルスが呟く。そう彼女は光の精霊ミアアの姿をしていた。

ミアアはミアアと向き合う。

「うふふ、その姿。久しぶりに見たわ。」

「・・・・・・・・これ以上好きにさせない。」

ミアアが銀色の鎌を取り出し構える。

「私は貴女、貴女は私。何故か知らないけど姿が入れ替わってしまった。・・・・やはり貴女が何かしたのかしらね。どうなの、宇木風梓由？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ミアア、いや梓由は構えたまま表情一つ変えない。
だが

「……姉さん？」

「……………!？」

雪美の声に後ろを振り返ってしまふ。

すると急にミアアの気配がなくなる。

慌てて梓由は振り返るがミアアもあの二人も、もう誰もいなかった。

「ではまた明日、決戦の日に会いましょう。」

その言葉がその場に響く中誰も動くことはできなかった。

続く

29・偽られた歴史3（後書き）

どうでしたか？

天使なのに鎌って不釣り合いですがそのギャップがいいと個人的に思っています。

という訳でついにサバイバルゲーム編に突入です。正式には次ではないんですが。

次の投稿は10日前後となりますがそろそろテスト勉強しますので遅れるかもしれせん。

それではまた次回お会いしましょう！！

30・決戦前夜（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。すみません、遅くなりました。
さて今回は準備回です。本番は次から・・・になるといいですが。
ではどうぞー！

30・決戦前夜

私は正直混乱していた。

いつもママって呼ぶサミーがああ時は

おかあさん

って呼ぼうとしていた。

何があったのか、あの子の心境の変化は、とても苦しんでいたのではないか

そればかり考えてしまっていた。

ティルス達はひとまず雪美の屋敷に来ていた。

フィルディアの部屋は学園内にあり危険だと判断し、ミアアの影響がないここに来るしかなかった。

全員居間に集まる。いつの間にか泰人に戻っていた。一通りのあいさつを済ませて莉麻が拾っていた水晶を机の上に乗せる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうやら力が戻っておらず会話ができないようだ。しかしまだ起動していることはなんとなく把握できた。呼吸音が聞こえた気がしたからだ。水晶が呼吸するかは知らないが、エネルギーを供給するための機関が働いていてその音だろう。それを確認し、泰人が話を切り出す。

「まずは情報の整理をする。簡単にまとめると、サミーと星音という少女を助けるには光の精霊が主催するゲームとやらで勝ち残ること。そしてこれには雪美を除くここにいる5人全員強制参加ってことだ。」

そう言っつて泰人は辺りを見回す。ここにいるのは自分を含めて6人と2つ。

莉麻、ティルス、梓由、雪美、スィング、ヴィントル、フィルディアである。

「とにかく俺もできる限りフォローする。まずは予選とやらを全員で生き残ること。作戦は生き残ることを第一に、とこんな感じか。でも強制とはいえ、みんなを危険に合わせたくないしやっぱリミアと交渉して……。」

それに参加者4人は首を振る。

「私は出るよ。お姉ちゃんの大事なお姉ちゃんを取り戻すためにね。」

「僕で力になれるか分かりませんが、精一杯がんばります。」

「……元々私の問題。……参加は当然。」

「危険なんてあんたも同じだろ。じゃあ俺っちも行くさ。」

どうやら参加の意思は固いらしい。泰人は尊重させることにした。

「分かった。だったらやって……。」

「ちょ、ちょっと待ってください!！」

雪美がストップをかける。

「み、皆さんが戦いに行くなんてやっぱり駄目です。私……。」

そんな雪美の手を梓由が握る。

「……大丈夫、みんな強いから。……私たちがきつと全て終わらせて、貴女も、梓由もみんな助けるって約束するから……ね。」

「ねえさん……うん。」

そう言い終えて梓由に抱きついた。相当寂しかったのだろう。梓由もなだめるように頭を撫でている。

「さて……と、そろそろ出てきてもいいぜ。沙汰！」

と泰人は不意に声を出す。しかし誰も答えない。当然である。

「全くあいつも人が悪いな。せつかくの再会だからってドッキリでも仕掛けてるんだらうけど。」

「……あの、泰人さん。沙汰さんのことで少しお話が……。」

そう言って話を切り出した。

沙汰が朱雀との戦いに勝利したが意識不明の重体で病院に入院していることを。

「……………あいつがそんなことになる訳が……………」

泰人は周りを見る。莉麻も驚いているようで梓由とスィングは目を逸らしている。これだけで彼には本当であることが分かる。

「……………すみません。僕がもっと早くに沙汰さんの限界に気づいていれば。」

「……………沙汰。」

そうポツつと言うと泰人は動かなくなってしまった。相当ショックで理解するのに時間がかかるようだ。

莉麻も泰人ほどではないにせよ落ち込んでいるように見える。

「……………とりあえず明日のこともあるし部屋割り決めて早めに休んだ方がいいっすね。えーっと、部屋割りは……………」

「……………決めてある。」

梓由はそう言うと言紙を取り出す。どうやらもう決めていているらしい。それを机の上に広げる。

そこにはこうあった。

りま、ゆきみ

わたし、ティルス

たいと、スィング、変なの

「……後、今の私は梓由じゃなくてミュアだから……宜しく。」
そう言い終わる。

「ちょ、ちょっと待ってください!!もう男に戻ったのにミュアさんと一緒ですか!?!」

「そっだよ、ね……ミュアさん。女性と男性組に分ければ問題ないよ。」

すると梓由……ミュアはティルスに近づきポケットから例の道具を取り出し……指にはめる。

「ちょ、ま……」

少女になった。

「……問題ない。」

「ありますよ……!」

というわけでこの通りの部屋分けになった。

莉麻、雪美部屋

「・・・せつかく会えたのに一緒にいれないのは寂しいかも。」

雪美はそう呟く。二人は一緒に雪美の部屋で泊まることとなった。莉麻は少し立ち直ったようだ。

「莉麻ちゃん、お兄さんのお友達はきつと大丈夫！貴女が信じてあげないとお兄さんも立ち直れないでしょ、ね。」

「・・・うん、ありがとうお姉ちゃん。」

「さあ、じゃあ温泉に行きましょう。今日の疲れを取ってゆっくり寝ましょう。」

ということで二人は温泉へと向かっていった。

ミュア、ティルス部屋

「もう、どうしてここまでして・・・。」

空き部屋を借りたミュアとティルス。もう指輪は取ってしまっていた。

まあ、寝る場所はベッドが二つあるので問題ない。

「……修行する。」

「……え？」

気がつくとは別空間に来ていた。あまり大きくない空間だが小学校の教室位はありそうだ。

「……今の状況で戦えるのは私と泰人だけ。……あの道化師みたいのは何とかなりそうだけど、それでもミアと青……マントの男に勝つことは無理だと思う。……だから貴方にも一通りサポート位できるようになってもraitたいの、少しでも勝算を上げるために……。」

ミアは本気だった。この一日でティルスを一通りできるサポートキャラに仕上げようというのだ。

「……そうですね。僕も足手まといだけは嫌です。どうかお願いします!!」

「………始める。」

こうして二人のティルス強化訓練が始まったのだった。

泰人、スイング部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

一応歩いてきたが椅子に座ってから泰人は言葉を発そうとしなかった。まだシヨックから立ち直っていないようだ。

「・・・・・・・・・・どうしようか、うーん。」

スイングはとりあえず泰人落ち着くまで一人にさせることにしたらしく部屋を出ようとする。と水晶が光りだした。どうやら起動を開始したようだ。

「・・・さてと、ようやく喋れるようになったか。聞け、ラルゴ使
い。」

机の上に置いていた水晶が復活した。だが泰人は相変わらずである。どうやら話だけは聞くようで水晶の方は向いている。

「谷田沙汰のことだ。さつきティルスの話聞いた限り、あの朱雀を倒したらしいな。朱雀を倒したってことはとんでもなくドーピングしたんだろ。大方生命力を力に変換して無理やり強化したんだろ。普通奴ならそんな強化したら持たずに即死だ。どうやらまだ生きていらしいが医者たちじゃどうしようもないことだ。このままだと・・・間違いなく数日で死ぬだろうな。」

「ちょ、ちよっ・・・・・・・・」

スイングが話を切ろうとする・・・が水晶からの圧力でそれ以上話せなかった。

泰人は変わらないように見える。どうやらそこまでは分かっていたようだ。

「・・・奴の意識を取り戻す方法が一つだけある。」

ガタッ

泰人が立ち上がり机の上の水晶を持ち上げて顔を近づける。

「頼む、教えてくれ!!どんなことでもするから・・・・・・頼む。」

必死に頼み込む。そして水晶を机の上に戻す。

「力に変換した生命力は使用后、使用者の周りを浮いているものだ。それを再び生命力に戻して奴の肉体に戻せば意識を取り戻すだろう。だが、そんな術が使える術師はほとんどいない。俺様位のもんだ。」

水晶は泰人を見る。泰人は頭を下げた状態から動かない。本気で頼んでいることがよく分かった。

「・・・俺も甘くなつたな。仕方ない、取引でもするか。」

「取引?」

「ああ、俺を奴の所に連れていけば奴を元に戻してやる。だがそれまでは俺様の命令は絶対服従だ。ミア、青龍、そして・・・あの悪魔を倒すまでお前には手伝ってもらおう。」

「・・・悪魔ってなんだ?」

泰人は気になって聞き返す。そういえばミアが聞いた声、それなのではないかと考えてみる。

「大方分かっているとは思うがミアを裏で操ってるいわばボスだな。悪夢神っていうらしいが俺は悪魔って呼んでいる。全ての元凶だ。」

「・・・やつぱりあんたが雪美の魂をここに連れてきたわけじゃないってことか。」

「当然だ。意味のない行動はしない。・・・万が一俺が死んだら全てが終わる。ディオールもお前たちの世界も悪魔の手に落ちるだろう。まあ、そんなことは興味ないんだが玄武の頼みだから仕方ねえしょうがなくやってるのさ。」

最後の方は本当にめんどくさそうに言う。どうやら水晶が消滅すると世界が終わるようだ。

「・・・じゃあ協力するしかない。沙汰も救いたいけど、なんか大変になることも阻止したいから。お前の命令に従うよ。」

「いいだろう。さて、作戦会議でもするか。その小僧も来い、ミアと青龍との対決について説明してやる。」

「え？あ、はい。」

そう言つて3人で作戦会議を始めた。

「その前に、おいフィルディア。起きてるか？」

「・・・はい。」

ラルゴが反応する。どうやら話は聞いていたようだ。

「……………サミーの事は俺の不注意だ。すまなかった。」

「……………いいえ、気にしないでください。」

「ふん、ならいい。さて始めるぞ。」

水晶は少し照れくさそうにしながらも作戦会議を始めた。

そして思い思いの夜が更けていく。
それを上空から見ている者が一人。

「……………越えてほしいものだな。」

そう呟いた。

決戦の時間が刻一刻と近づいていた。

続
く

30・決戦前夜（後書き）

どうでしたか？次回からついに戦闘回となりますが、その前に番外編をまたやろうかと思っています。どうなるかは分かりませんが。次の投稿ですが、8月4日辺りを考えています。それまでは忙しいので。

ではみなさん元気でまた次回お会いしましょう！！

番外編 2 ・ 泰人を攻略せよ！！ ・ 前編（前書き）

どうも、ロンロンの弟子です。時間ができたので投稿しました。

今回は番外編です。物語には関係なくキャラクターも結構崩壊することもありますのでそれでもいいという方はどうぞ！！

番外編 2 ・ 泰人を攻略せよ!!! ・ 前編

「おつきくなりたい!!!」

ここは番外編の世界。

今日も本編とは関係のないお話が始まるようですね。

沙汰の部屋

谷田沙汰はゲームをしていた。最近発売したPCのシミュレーションゲームだ。選択肢によって話が変わるゲームである。

特に興味はなかったのだが、宣伝がすごかった為購入し今やっているのである。

「うーん、ここからバッドエンド続くな。一度間違えたら最初からとか……。」

そしてあまりに集中しすぎて後ろにいるお客さんにも気付いていなかった。

「おつきくなりたいたいよ――――――！！！！！！」

抱きついてきた。

しかし沙汰はまだゲームに集中している。

「むむむ、……えーい。」

「ってことがあったの。お兄ちゃんったら、貧乳とかひどすぎだよ。」

ブンブンと莉麻は怒っていた。胸の事を言われて怒っていた。それを聞いて沙汰は少し怖くなっているようだ。

「そりゃ、普通怒るだろ。っていうかそれ本当なら凄くやばいぞ。」

茅野泰人は超がつくほどのメジャーマニアで世界中の珍しいメジャーを収集するのを趣味としている。そして沙汰は最近デルタ式とかいう珍しいメジャーをかなり無理して購入したことを聞いていた。確か3万くらいしたようなと。

「だから巨乳になってお兄ちゃんをぎゃふんと言わせたいの。協力してくれない？」

「まず謝ってこい。話はそれからだ。厄介事のごめんだ。」

「えー！ー！！」

文句言う莉麻だったが、沙汰が本当に動きそうもなかったので仕方なく自宅に戻る。

「仲直りできたよー！ー！ー！ー！！」

すぐに沙汰の部屋に戻ってきた。元気だった。

沙汰は再びゲームをしていたが今度はちゃんとセーブし中断する。

「ラルゴの力で直したんだって。パワーアップしてるからそういうこともできるみたい。」

「覚醒ラルゴか。・・・俺もいつか見れるのかな。」

と本編の話をしつつ本題に戻す。

「で、おつきくなりたいの。貧乳って言われて黙っていられないもん。前使ったあれ貸してよ。」

「変身の指輪か。あれは一応莉麻ちゃんを大人っぽくしたらああなるって仮定の一つなんだ。将来有望だぞ。今すぐじゃなくていいじゃねえか。おつきくなってからざまーみるって言ってやればさ。」

「・・・うーん。」

沙汰は言わなかった。これは最大限美化した場合であると。

「（まあ、ああなる可能性は限りなく低いけど0じゃないし嘘じゃないな。）」

そう思っている間にも莉麻は考えをまとめていた。

「……………それでも今やりたいの。お願いだから協力してよ！」

「だが、いきなり大きくなると流石に俺がやったってばれるぞ。またラルゴプラスター受けるのはごめんだ。」

「・・・そっか、何か手を考えないとね。」

うーんと考える莉麻。この時もう沙汰にはある考えが浮かんでいた。

「宇木風梓由つて貧乳なんだよね。恐らく莉麻ちゃんよりもさ。だが泰人はあの子を好きになった・・・ってことは？」

「・・・お兄ちゃんは貧乳派ってことね。」

「そういうこと。あの発言も照れ隠しだったのさ。妹じゃ奴はそれを隠すだろうが、宇木風梓由が迫れば流石の奴も欲望に従順になるだろうな。っーことでどうぞお入りください。」

ガチャッ

扉が開いて入ってきたのは小柄な少女、宇木風梓由だった。莉麻と
同じ年と言っても分からない。そんなかんじである。

「・・・えーっと、今日私なんて呼ばれたんですか？」

本物である。恐る恐るといったように沙汰に話しかける。

「それはな・・・莉麻ちゃん、これつけて。」

そう言つて沙汰は莉麻に融合の腕輪を渡しそれを莉麻はつける。

「・・・あ、あの嫌な予感がするので私はこれで・・・。」

そう言つて部屋から出ようとす梓由を沙汰は見逃さない。

「莉麻ちゃん、梓由の手を掴むんだ。」

「はい。」

「え？・・・キャー！！！」

がしつと掴む。

すると光が溢れる。

「さて、泰人。悪いが覚悟してもらおうぜ！」

そう沙汰は呟いた。

さて今回はここまでといたしましょうか。
この続きはまた次回であります。
では。

後編へ続く

番外編 2 ・ 泰人を攻略せよ!!! ・ 前編（後書き）

どうでしたか？たまには楽しい一日を書きたいと思いついて。

この続きはまだ考えていません。出来たらそのうちに投稿します。

さて次回は今度こそ8月5日前後です。本編を進めていこうと思います。

ではまた次回お会いしましょう!!

31・ゲーム開始（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。とても遅くなりました。お盆前に一回は投稿したかったのですが。

今回はついにサバイバルゲーム編スタートです。何回まで続くかまだ決まっていますが見ていただけると嬉しいです。

それではどうぞ！

31・ゲーム開始

ミアは教室にいた。

真夜中の月明かりだけが照らす暗い教室の中、机に座っていた。

彼女は今まで雪美のためだけに行動してきた。それが存在する意味であり、全てだったから。

その為にたくさんものを犠牲にした。・・・玄武もその一人だ。そしてやっと雪美と会えた。例えヴァントルに捕まっているとはいえ喜んでくれると・・・思っていた。

しかし彼女はミアを拒否した。それが分からなかった、いやヴァントルのせいだと思っていた。

でも何か引つかかる。

ちゃんと考えていなかったが何故この夢の空間に雪美がいるのか、何故夢の世界の守り役なんてやっているのか。

そもそもヴァントルは夢の世界に関する術は使えないし雪美が守り役とは知らなかった。

とここから一つの考えに辿り着く。

「・・・本当にヴァントルがやったのではないの？」

もし謎の声が全てを仕組んで自分にヴァントルを始末させるつもりだったとしたら。

・・・首を振る。

ここまでできてしまった。もう後戻りはできない。彼女はやるしかなかった。

雪美を救うために。

「私はあの子を救うための存在だから。」

朝

泰人達は再び居間に集まった。朝食を取りある程度の準備は整えていた。

時間は午前8時。開始まで後1時間だった。

「さて、最後の仕上げだ。莉麻、エプロンを出して身につける！」

「うん。」

ヴィントルに言われた通り、莉麻はエプロンを身につける。

……もちろん服の上からなので問題はないぞ。

「よし、じゃあ俺を掴んで胸の前まで持っていけ。」

莉麻は言われた通り黒い水晶を掴むと胸の前まで持っていく。

すると水晶はずぶずぶと音を立てて胸の中に入っていく。実際はエプロンの中だが。

「……あ、あん。」

変な声を上げる。微妙に当たるので仕方がない。

と全部入りきる。エプロンは特に変わった所はない。

「おい、聞こえるか？」

突然エプロンから声がした。どうやらヴィントルのようでエプロンとの融合に成功したみたいだ。

「バツチリ！流石ヴィントルさんだね。」

「別に大したことじゃねえ。念のためにエプロンにミアの力の欠片を宿しておいたんだ。ミアの力を宿した物、生物じゃないと融合できないんだ。」

便利な力には必ずと言っていいほど欠点もある。

しかしその場にいたラルゴ・・・フィルディアは考えた。

ヴィントルの持つていミアの力は全て本人にとられてしまった。しかしサミーとは合体することに成功している。そして前回のこと

・・・すべてを組み合わせると・・・。

そこまで考えたが今は他のことに集中しなくてはいけない。彼女は頭を切り替えることにする。

「あの、泰人さん。少しいいですか？」

「ん？」

そこにティルスが泰人に話しかける。どうやら何か用なようだ。

「実はフィルディアさんにお話がありまして、ラルゴを貸していただけませんか？」

「ああ、別にいいぜ。」

泰人はティルスにラルゴを渡す。

ティルスはそれを受け取り、話しかける。

「フィルディアさん、実は相談があるんですけど……。」

・

・

・

・

「という訳なんですが、どうですか？」

「そういうことですか。分かりました、私にできることは喜んでお手伝いさせていただきますわ。」

と二人の間で何かを決めた所で全員の準備が整ったようだ。
居間に全員が準備万端でそろった。

「さて、そろそろ時間だな。お前ら、行くぞ!!！」

ヴィントルの掛け声一同はそれぞれ返事を返して外に出た。

午前9時、花火が上がった。どうやら開始の合図だった。

するとキーンと言う音がする。どうやらマイクの音みたいだ。辺り

を見るとあらゆる所にスピーカーが取り付けられていた。

「はい、皆さんおはようございまーす！私がこの大会の主催者であるミーアです。これから大会の説明をします。ま、雪美と王子隊の人達だけ聞いてもらえればいいんだけど。」

泰人達は屋敷から離れた公園で話を聞いていた。

「どうやら泰人達は王子隊と呼ばれるようだ。そんなことはどうでもいいが……。」

「貴方達はこの大会で優勝することを目的にしてもらうわ。誰か一人優勝した場合私は全てを諦めて貴方達に従うわ、約束しましょう。でも全員失格になった場合、雪美は渡してもらわうわ。ルールは昨日大まかに説明したけれど、サバイバルね。残り15人まで戦ってもらうわ。失格条件は気絶、もしくはヴィントルの消滅のどちらかね。雪美には手を出さないし同伴も許すわ。後、参加者のほとんどは私の力で作り出しているから気兼ねなく倒してね。思考は普通の人間ベースね。さてこんな所かしら、せいぜい足掻いて生き残ってみせなさい。」

ピンポンパンポン

と音が鳴り放送が終わる。どうやら始まったようだ。

「さて、どうするか……ん？」

泰人は何かを見つめる。

公園にあった看板に何か張られている。

そこにはこうあった。

第1回サバイバルゲーム・特別ルール

下記の者を倒した人にはそれにふさわしい物あげますよー。
実力が飛びぬけているので皆さん頑張ってくださいね。

茅野泰人・国1つ

茅野莉麻・高級料理店の食べ放題券、何人様でもOK

ティルス・海外旅行1週間、5名様まで

ミア・謎の薬

黒い水晶の破壊・何でも願いを3つまで叶える

以上4名+1つです。では健闘を祈りますよ。

ちゃんと名前の下には写真も載っている。・・・謎の薬とは何なのか。

「・・・俺たちは眼中になしか。」

スィングは自分の名前がないため少し落ち込んだ。

「・・・俺やられると国一つとかおかしすぎだろう。」

「それほどまでに危険視されているということですよ。さてどうしましょう・・・・・・・・。」

ティルスは何かに気付きそつちを向く。すると複数の人間が草むらに隠れていることが分かった。

これも昨日の特訓の成果の一つである。

そのことを何気なく泰人に小声で伝えた。

泰人は頷きラルゴを取り出した所で相手が草むらから飛び出してきた。3人の女性でナイフのような武器を所持していた。

「貴方達には悪いけどやられてもらいます。」

そのなかの一人がそう言つて3人の連携で攻めようとするが・・・急に動きが止まった。何もない所で何かにぶつかったようだ。見えない壁があるように。

「いったー、何ですかこれ？」

少女が手を出す。すると前には何かがあるようで触れる。

どうやら周りにそれがあるようで3人娘は動けなくなっている。そう、ラルゴの結界だった。

「アウトアンドウィップS!!」

瞬間的に結界を解きウィップで急所を突き気絶させた。これがほんの数秒の出来事だった。

「こんなものかな。とりあえず3人片づけた。女の子相手だから手加減しておいたよ。」

「はい、では少し待ってください。・・・あ、ラルゴも貸して下さいね。」

ティルスは気絶している少女の一人に近づきポケットから融合の腕輪を取り出して自分の腕につける。

何も身につけてない手でラルゴも握りもう片方の手で少女の手を握る。

すると少女の身体がビクンビクンと痙攣する。

「えーっと、これマジマジと見ると犯罪している気分になるっすね。」

とスィングが感想を述べると痙攣が止まり大人しくなると目を開く少女は両手を目の前に持ってきて開いたり閉じたりしている。

見た目から見た年齢は莉麻と同じくらいに見える。童顔だが、本当は18だったりする。

「えーっと、成功したようです。私フィルディアです。」

どうやらフィルディアの精神と少女の肉体を融合したらしい。この方が色々動きやすいと判断したためだ。

話し合っていたのはこのことらしい。ミアによって生み出された者達は限りなく人間に近い存在なので融合は可能なのである。ティルスはこのことを読んでいた。

「・・・っか、ティルスはよく沙汰の発明を使いこなしてるな。

あいつの発明なんて一歩間違えたら危険なものだろう。」

「昨日は特訓しましたからね。使い方はある程度慣れました。」

泰人にラルゴを返しながら話していると目の前に倒れていた少女二人は消えていった。どうやら失格になると消えてしまうようだ。

といっても一度気絶している肉体に入っている為、フィルディアは大会参加はできない。

「そういえばこの人の記憶によると車を持っているみたいです。こちらです。」

フィルディアに連れられていくと公園の外れに車が止めてあった。軽自動車であり人数は乗れないようだが。

「よし、じゃあ俺とスイング、ティルス以外の3人以外は車で移動だな。女の子たちをこれ以上歩かせる訳にはいかないしな。」

ということと泰人、スイング、ティルスは歩きで莉麻、ミア、雪美、フィルディアは車で移動と決まった。

「お兄ちゃん、何かあったら連絡してね。絶対だよ。」

「・・・信じてる。」

「すみません、参加していない私まで気を使っていたいで。」

「運転は大丈夫です。任せてくださいね。」

とそれぞれと挨拶を交わし泰人達は行こうとする。

「ちよつと待て！」

エプロンが泰人を止める。

エプロン・・・ヴィントルの声に泰人は歩みを止めて振り返る。

「いいか、何があっても覚醒スネイラーの使用はするなよ。今の貴様じゃ絶対使いこなせないからな。」

「……ま、大丈夫さ。大抵の奴はあれを使わなくても倒せるからな。心配しなくていいぜ、じゃあ行くこうぜ。」

そして泰人達は行ってしまった。

「……何もなければいいがな。」

フィルディア達も車に乗り込み発進させた。

「さーで、今回は泰人が3人撃破。残りは97人だよ。以上スピーカーの放送でした。」

31・ゲーム開始 (後書き)

どうでしたか？

これから脱落者もどんどん出ます。主人公勢はどこまで残るのでしようか。

というわけで次回です。

次回の投稿は1週間以内でできればいいと思いますが、できるだけ早く投稿できるように頑張ります。

ではまた次回元気で会いしましょう！！

32・武者蜥蜴隊の罫（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回は敵部隊参戦となり次に繋ぐ回となります。

それではどうぞ！

32・武者蜥蜴隊の罠

学校の放送室にミリアはいた。

一通りの放送が終わり休憩に入るようだ。

「そろそろ私が作った3つの部隊が動く時かしら。どうなるか楽しみね。」

そう呟いてモニターを見ることにした。

午前10時・森の入口

「いや、やめて。来ないで……。」

「おいおい、君も参加者だろう。だったら……ふふふ。」

「兄貴、俺もう我慢できねえよお。」

一人の少女が複数の男達に囲まれていた。どうやら全員参加者らしい。

少女の仲間らしき男は倒れている。どうやらもうやられてしまっているようだ。

少女は座り込んで動けなくなってしまうている。怖いのだろう。がくがく震えている。

手下の男一人が前に出てきて巨大化し少女に襲いかかる。

「んじゃあ、いただきまーす!！」

「え、・・・キヤーーーーー!！」

少女はそのまま一口に食べられてしまった。

男はごつくんと飲み込む。そして美味しそうなる表情をする。

この男たちは王子隊討伐グループの一つである陸の部隊、武者蜥蜴隊である。

全員で5人。リーダーは兄貴と呼ばれた細身の男。サングラスをかけた優男だ。

そしてでっかい男が一人。残り3人は下っ端のようで二人の後をついてくる。泰人達の世界の住人に見えるがミアアが作ったためこの男たちも能力が備わっている。どんな能力かは分からない。

「さて、狙いは王子隊だな。メンバーはこの手配書を見るに4人か。・・・さて、あれを披露してくれ。」

「おう、調子はいいぜ兄貴。・・・ほら。」

でっかい男は地面に手を当てる。すると目の前が盛り上がっていき、どんだん人の形をとっていく。

数十秒で形成が終わり、そこには先ほどの少女が立っていた。しかし服装がメイド服で目に光はなく無表情である。

「流石分かっているな。いつも通りいい出来だ。さて、そろそろ報告があるはずだが。」

「リーダー!！」

そう言っていると一人の下っ端がやってくる。

「ご報告します。王子隊は二つに分かれたようでAは徒歩、Bは車で移動中です。Aのほうは男3人、手配書の2人と知らない男が一人、車の方はちゃんと確認できませんでしたが全員女のようにでした。」

「なるほど、今はどこにいるのだ。」

「はい。Aはこちらへ、Bの方は町の中心の方へ移動中です。」

「そうか、了解した。今からAの方を仕留める。お前も加われ。」

「はい!!」

一礼して下っ端も隊に加わる。これでメンバーは6人となる。

「さて早速……。」

リーダーの男は先ほど作られた少女の人形の顔を触る。すると目に光が灯りリーダーの男を見ると跪く。

「ご主人様、何なりとご命令ください。」

さっき震えていた少女とはまるで別人である。いや見た目以外は別人だが。

「下っ端どもに作戦は伝えてある。3人いるがこの男の動きを封じる。残りは軽く片づくだろう。」

そうやって少女に針と手配書を渡す。手配書は看板についてあるもののほかにも街の至る所に山積みになされており自由に持っていくことができる。リーダーの男は泰人を指さす。

「了解いたしました。それでは行ってまいります。」

そうやって下っ端3人連れてその場から移動した。

同時刻・町外れ

「ラルゴシユート!!」

泰人はスネイルシユーターのトリガーを引くと水の塊が発射され目の前で構えていた男の額に命中し男は倒れて気絶する。

見ると今の男を合わせて3人ほどの男が倒れている。全員泰人が倒したのである。

「流石泰人さんです。3人を1分以内に倒すなんて。」

「だな。俺っち達の出番はねえかもな。」

「そうでもないさ。これからどうなるか分からないからな、気を引き締めていこう。」

3人が決心を新たに進もうとした時だった。

「キヤーーーーー!!!!!!!!!!」

「今のは！？行ってみよう。」

森の方から叫び声が聞こえた。3人はその方向へと走っていく。するとそこでは一人の少女を3人の男たちが囲んで何かしようとしていた。

「メイドサイコー。」

「メイドサイコー。」

「この誰かに仕えてるって感じがたまんねえな。早速襲っちまおうぜ。」

「こ、来ないで……。」

襲われる寸前のようだ。

泰人はラルゴをスネイルシューターに変化させて男たちの額に3発撃ち込む。

パン、パン、パン

見事に命中し男たちはドサツと音を立てて倒れる。気絶したようだ。

「大丈夫ですか!？」

駆け寄る泰人。メイド少女は泰人を見ると安心した表情をする。

「はい、助けただきありがとうございます。」

メイドが立ちあがると残りの二人も追いついた。

「それで、どうしてこんな所に一人で？今町は危ないから参加者じゃないなら外に出ない方がいいよ。」

「実はご主人様とはぐれてしまいましたして探していたのです。ですがどこにもいないので思い出のあるこの森かと思いい来たのです。」

3人は話し合う。このままメイド一人で行かせるとまた何があるか分からない。ここが夢の世界でこのメイドが作られた存在だったとしても3人はどうしても見捨てることができなかつた。

「何かあつたら俺が処理する。だから少しだけ付き合つてやるうぜ。」

その言葉にティルス、スィングが頷く。

「メイドさん、だつたら俺たちも一緒に探しますよ。貴女一人だとまた襲われたらどうしようもないし。」

「本当ですか！？ありがとうございます。」

お礼を言うメイド少女。

そしてメイド少女を連れた3人は森へと向かつて歩いていった。

「……………ふふふ。」

移動途中にメイド少女が不気味に笑う所を誰も確認できないまま……。

続
く

32・武者蜥蜴隊の罖（後書き）

どうでしたか？メイドサイコー。

誰かに仕えているっていうあの感じがいいですね。

ご主人様って呼ばれてみたいです。

でもメイド喫茶には行く気はないという不思議な弟子である私。リアルで女の子に言われてみたいです。

という訳で次回は日曜日更新予定です。頑張っ間に合わせます。それでは皆さん元気でまた次回お会いしましょう！！

33・武者蜥蜴隊VSスイング・前編（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。投稿遅れてすみません。今回は前後編にしました。前回の続きでもあります。それではどうぞ！

33・武者蜥蜴隊VSスイング・前編

佐野星音の夢の世界は今、光の精霊ミアの支配下にある。

そして開始されたサバイバルゲーム。参加者は泰人達以外はミアによって作られた存在・・・と思われていたがそうではない。

シユパルツ、白マントの男のようなイレギュラーが存在する。とはいつてもこの二人のような自分から参加した訳ではなく、強制的に参加させられているものもいた。

時の止まっている泰人達の世界の住人や重症者の夢は今とても不安定な状態にあり、このゲームによる影響も大きい。夢の欠片が悪夢に迷い込んでしまうこともあるのだ。

無意識に存在を作り出したためその事実気づくのが遅れたがミアはメイドの少女を見たときその事実気づいてしまった。

確認をとる。迷い込んだ欠片の数は・・・7。そのうち2人は知っている人物だが残り5人は一般人。メイド少女がその一人だった。夢の欠片がゲームオーバーした場合消滅し、現実からも消えてしまうのだ。

ミアは考えた。別に自分には関係ない、雪美を救うことには繋がらない。・・・だが手助けしなくてはいけないと思う心があった。何故かは分からないが宇木風梓由と共にいた期間が長かったせいだと思う。

仕方ないと思いつつ放送に入ろうと思った・・・がやめる。武者蜥蜴隊との対決、これに勝てたらご褒美として救済処置をあげよう。そう思った彼女は放送しようとしていた手を止め、再び静かに観戦することにした。

ここはどこ？

私は誰？

気付くと私は森のような場所の入り口にいた。

しかし記憶が曖昧で一般知識以外は全くと言っていいほど思い出せない。

名前も、自分がどこ出身なのかも。

「君どうしたの？」

そんな私に男の人が話しかけてきて説明をしてくれる。

どうやら今ここではサバイバルゲームをしているようで私はその参加者らしいのだ。

でも覚えがない。そんな物騒なことに私が参加するはずがなかった。聞けば今この町全体が戦いの舞台らしくここにいる人達は雪美という女の子を除いてみんな参加者らしい。

でも私はやっぱりサバイバルゲームなんかしたくない、一刻も早くここから離れたい。そのことを男の人に話すとその人は私を町の外に連れ出してくれると約束してくれた。

この人が信用できるのかどうかは分からない、でも今の私にとってはとてもありがたいことだったので頼ることにした。

そんなときに武者蜥蜴隊と名乗る人達が現れたのだ。

私が狙われていたようで男の人は私をかばって大きな人にやられてしまった。

私は逃げ出したが、すぐに大きな手に掴まれてしまった。

怖かった。何をされるか分からない恐怖でリーダーみたいな人の話もちやんと耳に入ってこなかった。

すると大きな人が大きな口を開けて私を食べようとしていた。私はもう駄目だと思った。目を閉じて終わりを確信した。

気がつくとは私はメイドになっていた。身体も自由に動かせなくなつておりリーダーの男の人の操り人形になっていた。

なんか身体が変に感じた。先ほどより重いような、まるで自分が土でできているような感覚だった。

リーダーの人は私に命令をした。どうやら手配書の男の人を騙さなくてはいけないらしい。見ると優しそうな青年だった。私はこの人を騙さなくてはいけないのか、胸が痛かった。

ことはスムーズに運んだ。男の人は私を助けてくれた。演技とは言え凄く嬉しかった。

・・・言いたかった。逃げてと。このままでは私は貴方にひどいことをしてしまう。その前に逃げてほしかった。でもその男の人と残りの二人は私に騙されて森の入口まできてしまった

今私は写真の男の人の後ろにいる。警戒はしていないようだ。このままでは私は・・・。

懐から先ほど渡された針を取り出す。

止めたかった。止まって！！

そう願うも身体は勝手に動いてしまう。

そして・・・ついにやってしまった。

ブスッ

「・・・え？」

そう言つて男の人は倒れた。

・・・やつて・・・しまった。助けようとしてくれた、優しい人を私は・・・。

そんな会話をしていた。

泰人の応急処置はスィングに任せてティルスは状況を分析する。敵は3人。兄貴と呼ばれた細い男と明らかに強そうな大きな男、そしてメイドである。

こちらは最大戦力の泰人を失い、自分は戦闘能力が低くスィングは未知数。とても勝てそうにない。

逃げた方がいい、そう思ったがもう一度ちゃんと見る。メイドをだ。メイドは笑っているように見えた。2人の男と仲がよさそうに……。だがティルスが注目したのは目だった。

メイドの目は曇っていた。明らかに正常な人間の目には見えない。そう……。何者かに操られているようなそんな目だった。……。助きたいがティルス達に余裕はない。

ティルスは決心する。向こうは泰人を無力化したことで油断しているらしくまだ何か話している。

そんな隙を見てスィングと会話を交わす。

「スィングさん、泰人さんの具合はどうですか？」

「専門じゃないし、よく分からないがこのままだと気絶するのも時間の問題だ。ここは退いて早く薬を探した方がいいな。」

「そうですね。ここは一度退きましょ……。」

「……………待て。」

二人の意見がまとまろうとしている所で泰人から待ったが出る。苦しそうに話す。

「……………ティルスはわかってるはずだ。あの子は助けなくち

「やいけないと。」

「……分かっていきます。でも、僕たち二人では無理です。向こうは操る術を使っている以上強敵と判断しなくてはいけません。泰人さん抜きでは勝つことは……。」

「……スィングに頼むしかない。」

二人同時にスィングを見る。スィングは驚いた表情をしている。

「無茶です。スィングさんではあの人達には……。」

「……いや、分からないさ。こいつには秘策がある。何とかなると思うぞ。」

「……確かにそうかもしれねえな。」

スィングは頷く。それにティルスが反発する。

「駄目です。無茶はしないでください。僕はこれ以上仲間を失うのは嫌です。」

「……だがこう考えたらどうつすか、毒を持ってたなら奴らはほぼ100%解毒剤を持っているだろう。それを奪うためなら……とかね。それに手負いの泰人連れて強敵から逃げられる訳がない。本当は分かっていたんじゃないっすか。」

「……。」

確かにそうだった。ティルスは逃げられる可能性が限りなく低いこ

とが分かっていた。でも仲間を失いたくない、だから退くことを選んだ。

「俺っちを信じてほしい。さっき泰人が言った通りヴィントルから奥の手をもらっている。簡単には負けないっすよ。」

「・・・分かりました。泰人さんは僕が守るのでよろしくお願いします。」

ティルスは思った。信じてみると。それが、仲間だというものだと。決意した所で向こうも話し終わったらしい。

「さてお祈りは済んだかな？そろそろ終わりにしようかな。」

「いいや、そう簡単にはいかないっすよ。」

スィングは立ちあがり男たちの方に向かっていく。すると目の前に下っ端が現れる。

「へへっ、無名の奴なんてリーダー達が動くまでもない。俺がやってやるぜ！..!」

右腕を振りパンチを繰り出す。スィングはそれを顔面で受ける。

「さあて、こんなもんじゃ・・・・・・え？」

下っ端が倒れる。見ると殴った右腕からどんどん干からびていくのが見えた。身体の水分会が蒸発して行っているのが分かった。

「なるほどね、君は結構やるようだ。身体を鍛えているのかな、も

るに受けたようだだけだ。」

「いや、痛かったっすよ。身体は軽く鍛えているけどね。俺っち漁師っすから!!」

と言いきり戦う構えをとった。

続く

33・武者蜥蜴隊VSスイング・前編（後書き）

どうでしたか？

ようやく彼の戦闘まで来れました。まあ次回からですが。

1期の話までは戦わせるつもりはなかったのですが、それだと空気キャラになる可能性もあったため今回ついに初戦闘となりました。漁師の卵なので身体も軽く鍛えています。1対1の喧嘩くらいならなんとかなる程度ですが。

さて次回ですが出来れば今週中に上げたいと思います。遅くても日曜の夜中には投稿したいです。

それではみなさん元気でまた次回お会いしましょう！！

34・武者蜥蜴隊VSスイング・後編（前書き）

おはようございます。ロンロンの弟子です。

日が過ぎてしまいますみません。というより投稿遅れてすみません。今回は後編です。戦闘シーンですがやはりうまくはいかないものです。

それではごっごー！

34 武者蜥蜴隊VSスイング・後編

時間は戻り昨晚。

泰人とスイングはヴィントルから力をもらっていた。

「まずはラルゴ使いな。お前のいつも使っている物、ラルゴ以外で何かあるなら出せ。」

「えーっと、やっぱりこれかな。」

と泰人が力をもらっている間、スイングは考えていた。今のままでは自分はお荷物ではないかと。勿論ここにいるのは場違いであることは分かっていた。だが知ってしまった以上何かしなくてはならない、そう考えていた。泰人達の役に立つことをしたい、サミーを絶対に助けたい、そんな気持ちだった。

「さて、次はお前の番だ。何かあるか？」

「えっ。・・・ああ、これくらいしかないけどいいっすかね。」

スイングは美弥と呼ばれた少女から貰った白く光る石を取り出す。それを見たヴィントルは黙った。そして少し経ってスイングに聞く。

「こいつはどこで手に入れた？」

「えーっと青い森から行ける村にいた少女が洞窟の奥の方で見つけたって聞いたんすけど。」

「……こいつは白魔石はくませきといって魔物が宿っている魔石だ。もう取れなくなったと聞いていたがまだ残っていたのか。それにこの輝き……上級クラスが宿っているようだな。そいつを俺様の近くに置け。」

スィングは言われた通り白魔石をヴィントルの近くに置いた。すると白魔石はカタカタカタつと何回か揺れて止まる。

「これでいい。こいつはお前を主人として認めようだ。上級ランクなのにまだ子供のようなだが……まあそれは別にいい。この石を持っていて出来ることは二つ、個人能力の強化と宿っている魔物の召喚だ。能力強化は持っているだけで勝手に強化され、召喚も宿っている魔物の声を聞けば簡単にできる。これがあれば十分戦えるはずだ。」

「そうっすか。ありがとうっす！」

スィングは意志を再び手に取りポケットへとしまった。

「一つ言っておく。強化だけならいいが無闇に召喚するなよ、それは秘密兵器みたいなものだからな。」

スィングは頷いた。

現在に戻る。

メイド少女は驚いていた。

もう諦めていた。だが希望が見えたのだ。

スイングが見せたあの力は彼女を少し元気づけたのだ。

もしこの呪縛から解放されたらちゃんと謝ってお礼を言おう、彼女はそう心に決めた。

「さてと、下っ端は他にはいないようだな。どっちでもいいから相手になるっすよ。」

スイングは辺りを見回して他に誰もいないことを確認する。

武者蜥蜴隊の他のメンバーは泰人に倒されたため、残っているのはリーダーの男と巨漢だけだ。

「兄貴、こいつは俺が倒す。後ろで見ててくれ。」

「うん、いいさ。だが気をつけた方がいい。僕が見るにこいつはまだ何か隠していそうだ。」

リーダーの男はそう言って後ろに下がると同時に巨漢が前に出る。

「お前はなかなかやりそうだから名乗っておく。俺のコードネームはガトルだ。召喚術を得意としている。」

「いやあ、名乗ってくれるとはビックリだ。俺っちはスイング。漁師見習いで水関係の効果持ちっす。」

互いに挨拶を交わすとガトルは地面に手をつく。すると地中の中から大型の斧が出てくる。

ガトルはそれを手に取ると構えた。

「この辺の地中は武器庫になっている。俺はこれらを自由に使えるんだ。」

そう言つてスイングに向かつて大きく踏み出す。

スイングは思ったより相手が早かつたのに驚きつつも冷静に相手を見る。

ガトルは斧を思いっきり振り上げて振り下ろす。大型のため少し動作が遅かつた為スイングは無理なくかわすことができた。振り下ろされた地面は大きく抉られ一撃でも受けたらただでは済まないことを物語つていた。

「いやあ、やばいつすね。受けたら気絶じゃ済まないな。」

「回避力はなかなか。だつたらこれでどうだ。」

斧を右手で持ち左手を地面につける。

すると目の前の地面から剣を持った鎧が5体ほど出てきた。

「うーん、流石に多人数相手は俺うちには無理かもしれないな。．．
．．だけど無理でもやらないと駄目つすね。」

スイングが覚悟を決めると鎧が一斉に襲つてきた。

スイングはその辺から石をいくつか拾うとそれを鎧たちに向かつて投げつける。

石は鎧に命中しめり込んだ。

「強度は低いようだ。さてと出来るか分からないけど頼むつす。」

ポケットから白魔石を取り出すと思いつき握る。すると鎧の石が

めり込んでいた箇所からぼろぼろと崩れていき砂となって散った。

「いやあ、この子の力を使って石を相手に当てれば触った時と同じ効果が出るかと思っただらうまくいったっすね。……ん？」

急に後ろから何やら嫌な予感がして振り向く。するとガトルそこにはガトルがいて左腕を振り上げて今にも殴りかかろうとしていた。どうやら鎧は固かったようで本命はこっちのようだった。武器を持つていない所を見ると本当に奇襲狙いらしい。

スイングは鎧に目がいつていてガトルの事を忘れてしまっていた。だがまだ避けられる距離だ。

咄嗟に右に飛び出そうとする……が、そこにはメイド少女がいた。

「……すみません。」

ドン

思いつき押し戻された。

ガトルの方を向くがもう間に合いそうもない。何とか両手でガードしようとするが無理だった。

ドスッ

腹に喰らって倒れた。

何とか意識は保ているようだがかなり痛そうだった。

「よくやった。褒めてやる。」

「……ありがとうございます。」

途切れ途切れになりながらも言葉を繋げて頭を下げる。
だが彼女の表情は暗かった。本当は喜んでいないように。

「スイングさん!？」

ティルスが駆け寄ろうとするがスイングは右手で制止するようにサインする。

「……来るな。何とかする……」

そう言っただけ立ち上がる……が足がぐぐぐに震えてあまり持ちそうになかった。

「とどめだ。」

ガトルは再び斧地面から取り出してスイングに振り下ろす。
動けないスイングに避ける手はなかった。

「スイングさ……」

ティルスが叫ぶ。また一人失ってしまうのか、こんなことならやり止めておけばよかった。ティルスはそう考えずにはいられなかった。

ここにいる誰もがスイングはもう駄目だと思った。……ただ一人を除いて。

「……俺たちはここじゃ消えねえ。」

斧の刃を掴む。すると刃は一瞬で錆つきぼろぼろと散っていった。そしてその掴んだ腕は……液状化していた。

メイドは己自身と戦っていた。もう少しでガトルの呪縛から解放されるのだ。ここで自分が足を引っ張るわけにはいかなかった。彼女は力を振り絞り針を手放した。

「……………後は頼みます。」

カラン

「……………馬鹿な!?!」

ガトルは驚いた。今までも人をベースにした人形を作ってきたが意思に反したのは初めてだったからだ。

だがそれが隙になってしまった。それを逃さずスィングは液状の腕を伸ばした。

「包め!」

腕が網状に広がりガトルを包むと一気に水分を吸い取っていく。最初は抵抗していたが徐々に力を失っていき最後には意識を失った。

「やった……………つす。」

バタッ

スィングも倒れて気を失って倒れてしまった。

慌ててティルスが駆け寄る。気を失ったら退場、その言葉が頭の中に響いていた。

「その彼なら大丈夫だ。自分で寝たりする分には失格にならない。」

第三者の関与がなければ問題ない。」

そう言ってリーダーの男が出てくる。だが戦う気はないらしい。ティルスに何かが入った袋を投げて渡す。

「解毒剤だ。それで泰人という男も助かるだろう。その代わりにこの場は立ち去らせてもらう。いずれガトルの仇は討たせてもらうよ。では。」

そう言い残してリーダーの男は去っていった。ティルスは急いで袋を開ける。そこには液状の薬が入っていた。それを泰人に飲ませると落ち着いたよう呼吸も意識も安定する。

「助かったよ。ありがとう。」

「いえ。僕はスィングさんを診てくるので彼女はお願いします。」

そう言ってティルスはスィングの手当てに向かった。

「さてと、君は大丈夫だったかい？」

「・・・はい、大丈夫です。すみません、私のせいで迷惑を。」

「仕方ないよ、君はあのガトルとかいう男に操られていたんだからね。さてどうでしょうか・・・」

するといきなり彼女の身体が崩れ始めた。元々彼女はガトルに飲まれて再構築された存在、ガトルがやられた今存在が消えようとしていた。

「どうやら私駄目みたいです。こんな私の為に命がけで助けてくれた貴方達には感謝の言葉では足りなくらいです。ありがとうございまして!!」

「駄目だ、消えないでくれ……。」

泰人は腕を掴もうとする……がすり抜ける。すでにそこには誰もいなかった。

「そ、そんな……。」

泰人はがっくりと肩を落とす。目の前で無関係な女の子が消えてしまった所を見たため無理はなかった。

「……もうしょうがないわね、特別処置をとります!」

突然ミアアの声が聞こえる。すると泰人の目の前に光の粒子が集まり人の形をとる。

それはさっきのメイド少女だった。

「えーっと私、生きてるの?」

「泰人、よく聞きなさい。武者蜥蜴隊をほぼ壊滅させたから特別に教えてあげる。今この世界で無関係な夢の欠片が5つ混じってしまったわ。しかも参加者としてね。その子はそのうちの一人よ。その人達は別に関係ないんだけど特別に助けてあげることにしたわ。まあ助けるのは貴方達、私は居場所を教えてあげるだけ。手を出しなさい。」

泰人は手を出す。そこに再び粒子が集まり地図ができる。

「それで探すといいわ。一度確保した欠片の人達には手を出さないけど貴方達が助けないと命の保証はないから注意してね。その人達がゲームオーバーしたら人質に加わらずそのまま消えちゃうから。じゃあ頑張ってね。」

ピンポンパンポーン
放送が終わる。

「あいつ、勝手なことばかり言いやがって。・・・後4人助けるのか。最優先だな。」

「あのいいですか？」

「ああ、そういえば君の名前を聞いていなかったね。なんていうんだい？」

そう言われて彼女は考えた。メイド服という分かりやすい個所はあるがやはり名前は必要だろう。これから泰人達についていくのだから。だが記憶はない。というわけで即興で考えた。

「私の事は・・・メイディアと呼んでください。」

こうしてメイディアが仲間に加わった。

「さて今回で武者蜥蜴隊も1人を残して全滅。後は関係ない所で行われたその他の戦闘を含めて脱落者は15人。残り人数は82人です。皆さん頑張ってくださいね。以上スピーカーの放送でした。」

続く

34・武者蜥蜴隊VSスイング・後編（後書き）

どうでしたか？今回でついに白く輝く石の伏線回収できました。これからまた出てくると思いますのでよろしくお願いします。次回は1週間後を予定しています。今度こそ間に合わせます。それでは皆さん元気でまたお会いしましょう！

番外編3 ・キャラクター設定1（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回は分かりやすいようにキャラクター設定集を作ってみました。今回は主人公メンバーです。それではどうぞ！

番外編3・キャラクター設定1

今までなかったのでキャラクター設定を載せたいと思います。
今回は主人公メンバーで。

かやのたいと
茅野泰人

この話の主人公で高校2年生。身長176cm、体重64kg、血液型O型、好きなもの：煮物、苦手なもの：甘すぎるものと高い所、趣味：特にないがメジャーを弄るのが好き、好きな女性のタイプ：ロリで貧乳、家族構成：父・母・妹、成績：優秀で学年トップ、運動能力は人並みより少し上、武器：祖父から受け継いだメジャー（ラルゴ）で能力は主に4つ。1・測定部分が鞭に変化するラルゴウイップ。2・ラルゴが巨大化して主人公を守る盾になるラルゴウール。3・巨大な蝸牛に変身する能力で名前はスネイラー、必殺技は角に水のエネルギーを溜めて発射するラルゴプラスター。4・銃に変形するスネイルシューター。容姿：黒髪で普通の体格、性格：昔はあまり人が近寄らないような独特の雰囲気で奇想天外なことをよくしていたが最近はおかしいため人が変わったように周りに流されるようになった。一人称は俺。

かやのりま
茅野莉麻

泰人の妹で中学2年生。身長152cm、体重43kg、血液型O型、好きなもの：甘い物全般と兄、苦手なもの：虫と暗い所、趣味：お菓子作り、好きな男性のタイプ：兄、家族構成：父・母・兄、成績：アホの子であり良くない、運動能力は少し高い、武器：母から貰ったエプロンで今は着ると治癒能力を使うことができる。容姿は栗色の髪でふわふわロングヘアで垂れ目、性格：とても人懐っこくすぐに友達ができる、普段は気遣いもできる優しい子だが兄とその友人に対しては我儘な一面を見せる。兄が好きだが彼女はいて

もいいらしい。一人称は私。

たにださた
谷田沙汰

主人公のたつた一人の友人で高校2年生、自宅は主人公の家から近い。身長168cm、体重58kg、血液型AB型、好きなもの：パソコン弄り、苦手なもの：自分が認めた人以外の人間全般、好きな女性のタイプ：気配りができ自分の趣味を理解できる人、家族構成：父・母・兄、成績：理数系は凄いがその他は良くなかつ特に英語は駄目、運動能力は低いが意外に力はある。武器：手作りのパソコンで3種類の生物を召喚できる。1・カバのヒポポス、黄金の液を出しかかった物の効果を無効化する。2・鳥のカイチョー、自分で意識を持っており3人まで人を乗せて飛べる。3・蜘蛛のSPD、黒い蜘蛛で絶対に切れない糸を使用する。伸縮自在。容姿は茶髪で少し小さめの体格、性格：かなりのパソコンオタクで異世界での力を手に入れてから好き放題している。だが意外に熱血で認めた人間の手助けはする。一人称は俺。

ティルス

異世界ディオールの王候補の一人で元一般人。年齢10歳、身長140cm、体重37kg、血液型A型、好きなもの：友情、苦手なもの：女装、好きな女性のタイプ：包容力のある年上の女性、家族構成：不明、成績：詳しくは分からないが良かったらしい、運動能力は高い。能力：時空転移能力で3日に1回別の世界に飛べる。容姿：黄色髪で中性的な見た目でどっちでもいける、性格：内気で人を仕切るのには向いてないが、いざという時には頼りにならなくもない。一人称は僕。

ティライズ

異世界ディオールの王候補の一人で貴族。ティルスのライバルだが仲が良い。年齢10歳、145cm、体重40kg、血液型B型、

好きなもの：特になし、苦手なもの：特になし、好きな女性のタイプ：特になし、家族構成：不明、成績：詳しくは分からないが凄く良かったらしい、運動能力は凄く高い。能力：どんな武器でも使いこなすことができる。容姿：金髪で体格がいい、性格：プライドが高く喋り方は少し乱暴だが自分よりも他人のために行動できる。一人称は私。

サミー

異世界ディオールの妖精村に生まれた妖精だが全ては謎に包まれている。年齢約4歳、容姿：手のひらサイズでピンク色の髪でカワイイ系、性格：とにかく子供。一人称はあたち。

フィルディア

異世界ディオールの妖精村の妖精で現在はラルゴに魂を宿している。年齢約36歳、容姿：手のひらサイズでピンク色の髪でキレイ系、性格：包容力がありいつでも丁寧語で喋る。一人称は私。わたくし

スイング

異世界ディオールで漁師の卵。年齢は19歳。身長180cm、体重70kg、血液型A型、好きなもの：魚料理と海、苦手なもの：高い所、趣味：釣り、好きな女性のタイプ：巨乳、家族構成：父・母、成績：普通、運動能力は人並み、能力：人以外の物体の水分を調節する能力、容姿：青髪でしつかりした体格、性格：思いつきりの良い海の男タイプ。一人称は俺っち。

初めての人用に軽く世界背景を。

時代は近代、異世界ディオールと現実世界で起こるストーリー。

異世界では魔術道具や能力者が住んでいる。

そこでは二人の王子候補がそれぞれ試練に挑む。
恐らくこんな感じですよ。
以上になります。

番外編3・キャラクター設定1（後書き）

どうでしたか？

後で敵キャラクターや宇木風梓由等の設定集も作れたらなと思います。恐らくすぐには無理ですが。

次回は出来れば近日中に投稿します。

それでは皆さん元気でまた次回お会いしましょう!!!

35・道化師の暇つぶし（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。すみません、キャラクター設定出して遅れました。今回は再び伏線を張る回になります。それではどうぞ！

35 道化師の暇つぶし

「さて、体勢を立て直すためにも彼女たちの力を借りようかな。」

武者蜥蜴隊のリーダーはあの後森を早々と抜けて海辺まで常人以上のスピードで走ってきた。

海辺にはビーチがあり、その近くにはステージがある。そのステージでは女の子3人組がリハーサルをしていた。3人とも背は同じくらいで、強気そうな子、天然そうな子、普通の子の3人である。少し派手目な服装から見てアイドルのようだ。

「やあ、ビギンクガールズの皆さん。ちょっと助けてほしいんだ！」

リーダーが話しかけると3人はダンスをやめてリハーサルを中断する。

4人は休憩室に移動して会話する。

「聞いたわよ、無名の男に負けたって。全くあんたたちは駄目ね。」

「姉さん、それは言いすぎだよ。あのスイングって人今まで力隠しててミア様も把握できていなかったんじゃないかな。」

「そうですね、この子の言うとおりですよ。言いすぎはいけません。」

「・・・むー！」

どうやら3人は姉妹で天然長女、強気次女、普通の子三女のようだ。

「いや、ツンデレちゃんの言うとおりだ。僕の判断ミスだったよ。だからこそこうしてお願いに来たんだ。」

「誰がツンデレですって!」

突っかかる次女を長女と普通の子が止める。いつもの事のようにすくに収まる。

「そうですねー、協力をお願いしましょう。昼過ぎからライブをしますので裏方に回ってくださると助かりますわ。」

「了解したよ、じゃあ行ってくる。」

そういつてリーダーの男はスタッフルームに移動した。

「お姉ちゃん、いいの? あいつあたし達利用する気だよきつと。」

「うふふ、大丈夫よ。私たちのライブを見ればいくらリーダーさんでも堕ちちゃうわ。」

「だといけど……。」

3人は再びリハーサルに戻った。

午前10時30分・町中

スイングがガトルを倒したころ、莉麻達は車で町を回っていた。いざという時に地の利を生かす為だ。

回ってみた所、ヴィントルが回った時とそれほど変わっていないかった。雪美はある程度しか分かっていなかった。ヴィントルの指示に従って回ったのだ。

しかし変わっている部分もあった。

近くに海があり、どうやらそのビーチで昼ごろからステージでライブがあるようだ。さっき立ち寄った喫茶店で町中の地図を配っていてもっと早く来ればよかったと後悔していた所だ。

「私ライブ見に行きたいな。だってなんか面白そうだもん。」

「………罨。だから反対。」

「私もです。行くなれば泰人さん達と合流してからにした方がいいですよ。」

「そうだよ莉麻ちゃん、ここは慎重に行こうね。」

「……残念。」

3人に反対されたため彼女たちはライブを見には行かないらしい。そして再び移動するべく喫茶店から出る。すると目の前に変な男たちがいた。

どうやら大会参加者のようだが海辺のビーチに向かっているようだ。

「おい聞いたか、噂によるとビギンクガールズのライブ見に行くといいことがあるらしいぜ。」

「聞いた聞いた。ダンスや歌に能力向上効果があつて聞いた参加者をパワーアップさせてくれるんだつてな。」

「最大30人までだつてさ。13時からだけでもつ行こうぜ。」

そう行つて走り去つていった。

それを聞いた莉麻が目を輝かせる。

「それ凄いね、やっぱりみんなで……あ。」

急に莉麻の瞼が落ちる。……目が開くと目つきが鋭く変わつていた。

どうやらヴィントルが身体の所有権を奪つたようだ。

「これは遊びじゃねえ。いいから他の奴らの言つことを聞け。」

「(……はい。)」

ヴィントルが心の中にいる莉麻に説教する。どうやら反省したようだ。

「さて、参加者討伐はラルゴ使い達に任せて俺たちは一度身を隠した方がいい。確か町外れに廃屋があつたな。もし誰かいたらぶつ倒してでも確保するぞ。」

莉麻になつたヴィントルの一声に他の人達も頷き車へと移動しようとする。

……が一人の男が立ちふさがる。

「き、君達あの手配書の子達だよねえ。……うわぁレベル高いな

あ、いいなあ。」

背は高くなって眼鏡をしていて体格がいい男だった。ちょっと危ない感じがする。

気持ち悪かったのでヴィントルは追いつ返そうと前に出る。

「おい貴様、通行の邪魔だ。そこを退きやがれ！」

「うおう、言葉使い悪い美少女とか最高！これはお持ち帰りしたいなあ。」

まるで話を聞いていない。

話すだけ無駄だと分かったのかヴィントルはその男を倒そうと構える。

「おう怖いなあ。君ちよつと落ち着いてこつち見てよ。」

「あん!!!?」

その時ヴィントルの視界に男の眼が入った。ヴィントルの動きがピタリと止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ふひひひひ、いやぁ上手くいきましたな。では早速・・・。」

危ない男がヴィントルに近づこうとする。

だがその前に雪美、ミュア、フィルディアが立ちふさがる。

「やめてください。今すぐ彼女に掛けた術を解きここから立ち去っ

てください!」

フィルディアが男にそう言う。

しかし男はその言葉を聞き流しているらしくヴィントルに近づく。

「うーん上玉だね。持ち帰って飾りましょー。」

雪美とフィルディアが止めようとするがすぐに振りほどかれてしまう。どうやら狙いはヴィントルだけのようだ。

ミュアは正直なところ手加減ができないため攻撃すると男が消滅してしまう恐れがあったがそうも言っていられない状況にある。

「……………仕方ない。」

諦めて鎌を取り出そうとすると……

ドスッ

鈍い音がして男が急に吹っ飛ばされる。

何事かと思いき急に心配がした方を見ると道化師の格好をした男が立って蹴りの動作をしていた。

そう、シュパルツだ。

「暇なので見にきました、まさかヴィントルがこんな簡単に罠にはまるとは……………情けないですね。」

笑いながら話すシュパルツ。固まったヴィントルを見ては爆笑している。とりあえず危害を加える気はないと思ったのかミュア達はじっとしていた。

すると男が起き上がってくる。

「痛いなあもう。そっちのお兄さん邪魔だよ。痛い目見てもらおうかなあ。」

するとその体格からは信じられないほど俊敏にシュパルツとの距離を詰めて懐からナイフを取り出すと脇腹目掛けて……刺そうと思っただが

「……え？」

いなかった。シュパルツは目の前にいなかった。そして男は嫌な予感がして後ろを向くと

「ウォーミングアップにもなりませんね。」

すでにシュパルツの左ストレートが放たれた後だった。綺麗に男の顔に吸い込まれるようにヒットし男はそのまま吹っ飛ばされると店の壁を壊して止まった。すでに意識はなく失格になったようだ。

「いやいや、何か面白いことはないですかねえ……。」

「ま、待ってください！」

そう言って立ち去ろうとするシュパルツをフィールドアが止める。シュパルツは振り向く。

「助けてくれてありがとうございます。ですが何故敵対関係である私たちを助けてくれたのですか？」

「この世界は面白いことが少なく暇でしてね。ヴィントルをからか

いに来たのですが・・・そうだ！」

何か思いついたような表情をして言葉を続ける。

「茅野泰人君に伝えておいてください。残り20人以下になった時貴方との決着をつけに行きますと。それまでやられないで下さいと・・・。お願いしますね。」

そう言い終わるとシユパルツはその場から姿を消した。

「・・・・・・・・泰人はやらせない。」

ミアが最後にそう呟くとヴィントルが意識を取り戻した。

「今回は戦闘が少なかったため脱落者は1人。残り人数は81人です。皆さん頑張ってくださいね。以上スピーカーの放送でした。」

続く

35 道化師の暇つぶし (後書き)

どうでしたか？あまり女の子の敵キャラクターを出してこなかった
ので新鮮な気分です。

次回は約1週間後を予定していますのでまた見ていただければ嬉し
いです。

それではまた次回お会いしましょう!!

36・恐怖のステージ（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。

遅れました。台風の影響を思いっきり受けましてアパートが川の氾濫で沈みネットも使えずやる気もなくなってしまいました。一応今は回復したので大丈夫です。

さて今回は本番ですね。色々と動きます。
ではどうぞ！

36・恐怖のステージ

あたしたちは3人いつも一緒だった。

両親もいなくて貧しかったけど、町中で3人歌ったり踊ったりして過ごす毎日があたしは好きだった。

でもそんなあたしたちの運命を変える出来事がある日起こってしまった。

そう、あの場所・・・クリスタ王国で。

ヴィントル達はあの後車に乗り込み町外れを目指した。

移動中、雪美は泰人にあらかじめ渡しておいた通信機で連絡をとり廃屋で合流するようにと約束をした。

町外れの廃屋は誰も人がおらずここ最近使っていた形跡もなかったため利用させてもらうことにした。

そして少し経って泰人達がやってきた。メイディアはお初だったので軽く自己紹介をし、今までの経緯を説明した。

「・・・なるほどな。まあ、気が向いたらその迷い込んだ奴を助けてやらんこともない。」

ヴィントルはそう言ったが残りのメンバーはそれが照れ隠しであると瞬時に分かったが言うことはなかった。

そしてこれからの作戦を立てることにした。

午後12時40分・廃屋内

「はい、それでいきましょう。」

作戦はこうだった。

ビーチで行われるライブ、これによってどのようなことが起こるの
かの確認に泰人、ヴィントル、スイングが向かい残りはここで待機。
ミュアとテイルスは何かあった時のための見張り。
このように決まった。

「何があるか分からないから車は使わない方がいいな。移動は徒歩
にしようか。」

「分かった。」

泰人とスイングも移動方法を決めて出発しようとした。

「あ、あの！」

「ん？」

メイディアに話しかけられて振り向く泰人とスイング。
彼女は何か言いたそうにしていたが首を横に振り言うのをやめたよ
うだ。

「頑張ってください。」

その言葉を受け3人は廃屋を出た。

「さて、俺様は先に行くぞ。お前たちも早く来い。」

ヴィントルは何かを呟くと背中から黒い翼が生えて飛んで行ってしまった。

泰人達はボーッと見ていた・・・

「って、俺達場所知らないんだよ。待ちやがれ！」

が我に返るとヴィントルを追っていった。

午後13時・ビーチ

会場には30人の参加者である男たちが今か今かと待っていた。一般人はどうやらこのイベントには来ていないようだ・・・というより門前払いらしい。

見た所女性の姿はない。どうやらこのゲーム自体の参加者は男性がほとんどのようで女性はこのイベントには興味を持たなかったようだ。

「実は俺、ビギンクガールズって知らないんだよね。新しいアイドルグループなのか？」

「何でもこの大会のために他国で有名な3姉妹の踊り子を主催者がスカウトしてきたんだってさ。」

「マジかよ、じゃあ期待できるな。…………お、始まるみたいだぜ。」

ステージに3人の女の子たちが上がってきた。そう、ビギンクガールズだった。

「やつほー、みんな集まってくれてありがとう！」

「ま、どうせ能力アップの為だけに来た人がほとんどなんでしょ。」

「まあまあ、それよりも今日は楽しんでくださいねー」

3人別々のあいさつをしてライブは始まった。

同時刻・町外れ

「おい、貴様ら。やる気がないなら先に行くぞ。全く体力のない奴らだ。」

ヴィントルは空を飛びながら呟く。

泰人とスイングは走ってなんとかヴィントルに追いついていたが流石に疲れてきたのかペースが落ちてきた。

「いや、無理だつて。…………はあはあ、ずっと全力とか無理あるつての。」

ヴィントルの飛ぶ速度は泰人達が全力で走ってようやく追いつく

そうやって二人は姿を消した。

場所はビーチに戻る。

あれからライブは順調に進み、1曲目、2曲目と終わっていく。ステージは盛り上がり参加者達も能力アップのことなんて忘れて楽しんでいた。

そんな中武者蜥蜴隊のリーダーは裏方の仕事をしていた。

「・・・あれ、こんなはずじゃなかったんだが。」

何も起こらないステージを見て拍子抜けしていた。彼はステージ開始と共に何か起こると考えていたためここまで順調に進むと逆に不安になったのだ。

「彼女たちがこのまま何もアクションを起こさないでライブを終わらせるなんてありえない。・・・何かあるはずなんだ。」

ついついステージに集中してしまっ。

それを三女は見逃さなかった。彼女はすぐに次女に合図を送る。

次女はそれに頷き前が出る。

「さあ、次はあたしのソロでいくよ！みんなちゃんと見なさいよね。」

すると彼女の衣装が一瞬で変化する。一気に露出度が上がり際どい

衣装になり、それに男たちは釘づけになった。

「じゃあ始めるわよ！」

こうして・・・禁断のステージが始まった。

「さて着いた・・・！！？」

それから少し経ってヴィントルが到着する。

そして彼は見たのだ。男たちが三人の少女に跪いている光景を。

「さてさて、皆さん。この手配書に載っている人達を倒しちゃってください。お願いしますね。」

そう言つて長女が一枚の紙を取り出す。それは泰人達が載っている手配書だった。

スィングも追加されている新バージョンのようだ。因みにスィングを倒したのものには様々な宝石を与えると書いてある。

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！」

男たちは雄叫びを上げる。どうやら普通じゃないようで狂っていた。ふと見るとステージには檻があり一人の男が捕まっている。どうやら武者蜥蜴隊のリーダーのようだ。

「さて、あんたもまんまとかかってくれたわね。精神力が強いみた

いだから身体が利かないくらいで済んだみただけだね。」

「……………」

男は喋らない。どうやら口を利く力も残っていないようだった。

ヴィントルは瞬時に理解した。このステージはやはり罠で参加者を手駒にするつもりだったのだと。

流石に分が悪いと判断しその場から離れようとするが

「……………！姉さん達、そこに誰がいるよ。」

三女が気付く。同時に残りの二人も見る。遠くの物陰から見ていたのだが気付かれてしまった。

逃げるのは無理だと判断したのかヴィントルは素直に出てくる。

「よく気づいたな。結構やるじゃねえか。」

「あ、ありがとうございます。」

ぺこりと頭を下げる三女。何敵にお礼言ってるのよと次女に叩かれていた。

「貴女は茅野莉麻さん……ではなくヴィントルさんですね。うふふ、早速この人達と戦ってくれませんか。」

長女がそう言うのと男たちは一斉にヴィントルに襲い掛かる。

「……………上等だ。こんな奴ら蹴散らしてやるぜ。」

そしてヴィントルも戦闘態勢に入った。

そんな中泰人達はまだ走っていた。

「いやいや、俺っちそろそろ限界だな。」

「……もういいよ。後少しで着くから歩いていこうか。」

と行って歩き始めた。

彼らが着くまでもう少しかかりそうだった。

続く

36・恐怖のステージ（後書き）

どうでしたか？

やっぱり布面積が狭い服は好きです、はい。

しかしメイド服は別です。誰かに仕えるならばやはりあの恰好でないとイケませんね、はい。

まあ適材適所というやつですね。

さて次回ですが、先にコピーを投稿しますのでその次になります。

恐らく番外編になると思いますが。

それではみなさん災害に負けず元気でまた次回お会いしましょう！

37・魅惑の力(前書き)

おはようございます、ロンロンの弟子です。
遅くなりました。また忙しくしていました。

今回はついに海の隊との対決です。陸の隊より話は長くなる予定です。

それでは本編をどうぞ！

37・魅惑の力

私達は歌と踊りで色々な国を回ってきたんだけど、ある時クリスタ王国に立ち寄ったの。

そこはなんかレンガ造りの建物等のどこか昔風の感じがする所だったけど居心地は良かったね。

王女様にもちらりと会ったけど凄くかわいい人だったな。口数が少なくて手を振ってるだけだったけど。

一月ほど経ったある日、私たち姉妹はそろそろこの国を離れようと思っただけで最後に町中を見て回ろうってことになったの。

凄く楽しかった。色々なものを見たり、買ったり、良い一日だった。・・・そのまま終わって欲しかった。

気がつくとも私達は路地裏にいたの。どうやら道を外れちゃったみたいで急いで戻ろうとしたら・・・見てしまったの。そこで行われていた・・・人体実験を。

ヴィントルは落ち着いていた。30人もの男達に狙われているというのに全く焦っていなかった。

「・・・あのさ、本当に大丈夫なの？さすがにこれはまずいんじゃない？
」

心の中で莉麻が語りかける。どうやら彼女は心配しているらしい。

「問題ねえよ。・・・お前の力を使わせてもらっぜ。」

そう言うとヴィントルは手を空にかざす。天気は好調だ！男達がすぐそこまで迫っていた。ドスドスととんでもない勢いで走っており目は血走っていて狂っている。

ひゅーん

上から何やら物が落ちてくるような音がした。

一斉に上を見ると普通では考えられないものが落ちてきていた。

「えーっと、・・・やかん？」

莉麻はそう呟いたがその通りだった。巨大なやかんが男たちの頭上目掛けて落ちてきた。男達は気付いて上を見たがもう遅かった。

グシヤン

物凄い音を立ててやかんは男達を押し潰した。

「・・・やっと着いたぜ。」

「俺っちもさ、流石に疲れた。」

泰人とスイングが到着した。すぐにビーチに向かうと・・・でっかいやかんがあった。数十人の男達が潰されているのが見える。傍に立っていたヴィントルは泰人達に気付き声をかける。

「全く貴様らが遅いからもう終わっちまったよ。」

二人はボーっとそれを見てこう言うしかなかった。

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

泰人達が感心していると三姉妹が彼らに近づいてきた。

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

「やかんすげー！」

なんて言う訳がない。どうやら少し感心しているようだ。

「ふーん、なかなかやるわね。この辺で一度自己紹介でもしようか。」

少女達は横並びに一瞬でなる。これぞ日頃から鍛えている技である。健康そうな足が眩しいぜ！！！！！！

「まずあたしたちは海の隊・ビギンクガールズね。あんた達が倒したのは陸の隊・武者蜥蜴隊、後もう一つ空の隊なんてあるけどあいつらの力なんていらぬ。あたし達だけで十分よ。」

「出来れば私達でなんとかしたいわね。」

名乗っている時は攻撃してはいけない、それは鉄則なのだ。やかん下の男たちの何人かはもともと動こうとしていたが名乗りが始ま

った瞬間ピタリと止まった。狂っていても話の分かる奴らである。

「さて名前だけどあたしは次女のサロン、こっちの天然が長女のフロン、でこの普通の子が三女のミカゼよ。」

「あらあら、私は別に天然じゃないですよー。」

「……特徴がないのが特徴だもん。」

と一通り紹介が終わる……と同時にやかんの下から数人這い出てきた。どうやら8人ほど無事らしい。一応他の参加者よりは強そうに見える。

「ツンデレサイコウダー!!」

「テンネンノオツパイサイコウダー!!」

「フツウダー!!」

口々に叫んでいる。催眠状態から解けてはいないがやはりイかれていた。

「……きめえ。」

「……私来ない方が良かったかも。」

「……どうでもいいな。」

「俺っちは天然好きっすね。」

泰人達も口々に呟く。若干一名おかしいが……。

「変なこと言っていないで奴らをやっつけなさい!!」

サロンがそう言うと男達は奇声を上げて再び襲いかかってくる。

だが泰人達は気持ちを切り替えて集中していた。ヴィントルが泰人に視線を向けると泰人はスイングにラルゴを渡す。スイングは受け取り力をラルゴに込めて泰人に返す。

この間約5秒。

男達は目の前まで迫っていて既に攻撃の体勢に入っていた。しかし泰人は瞬時にスネイルシューターに変形させ、男達に向けて八発撃った。勿論近くの奴からだ。

パンッ

軽快な音になり水の塊が発射される。狂っているとはいえ、8人はなかなかの手練れである。すぐに攻撃をやめて避ける体勢をとると楽々避ける。

だが水の塊にはさつきスイングが力を込めた時に追加能力である追尾が搭載していたのだ。塊は急にグルンと軌道を変えて男達に向かっていった。

流石の男達もそれは予定外だったようでそれに当たってしまった。

ドンッ

鈍い音が男達の後頭部から聞こえ全員意識を失い倒れる。どうやらやったようだ。

「まあ、こんなもんだろ。」

泰人はラルゴに戻した。

三姉妹は少し驚いていた。たった数分で30人全員がやられたからだ。でも予想範囲内ではあった。

そう彼女達にはまだ手があったのだ。

「……ふふふ、さて始めようかしら。」

「……ん？」

サロンの一言に泰人達は一斉に彼女の方を向く。しかしそれが罠だったのだ。

彼女の眼が妖しく光る。まずいと思ったがもう遅くそれを思いつきり見てしまったのだ。

数秒後

「……何ともないが、何か効果があるのか？」

ヴィントルはどうやら何ともないようだ。しかし横を見ると

「……」

「……」

泰人とスィングは完全に動けない状態だった。表情は苦しそうで意識はあるようだ。が意識を保つので精いっぱいのように見える。

「あらあら、大変ですね。」

フロンがにこやかに笑いながら言う。悪気はないようだが今の状態だとそうとられても仕方ない。今度はヴィントルが追い詰められた。

「だが俺様だけ効かなかったのは……そういうことか!」

ヴィントルは自分の身体を見る。そう今ヴィントルは茅野莉麻、女の子である。

どうやらサロンの魅惑の力は男の身体にのみ効くようだ。

「今更分かって遅いわ。じゃあ姉さん、宜しく!」

「はい。」

フロンは既に杖を取り出し空中に陣を描いていた。

そしてそれが完成するとそれが光り、陣の中から巨大な角の生えた悪魔が現れる。

「……こりゃ、洒落にならんな。」

ヴィントルは苦笑いを浮かべた。泰人とスイングが動けないこの状況では分が悪いと悟ったようだ。

「うがあああああ!」

悪魔はヴィントルに向かって殴りかかってきた。

「ちっ……。」

ヴィントルは右手の掌を悪魔に向ける。

すると悪魔の攻撃を遮るように巨大なまな板が出現する。

悪魔はそれを思いつき殴る。一応壊れていないが軽くミシミシと音が鳴っていてあまり持たないのは誰が見ても明らかだった。

「……こいつは終わったかもしれない。」

ヴィントルは諦めモードに入っていた。そうしている時にも悪魔の猛攻は続く。ドスドスと音を立てて殴ってくる。そろそろ突破されそうだった。

だがフロンは追い打ちをかける。

ヴィントルの横に術式が見えた。ヴィントルが見るとそれが何なのかすぐに分かる。

……転移の陣だった。

「……おい、とことんやるつもりか!？」

ヴィントルの言葉には耳を貸さずに陣は完成しそこからティルス達が出てくる。

「……え?ここはどこですか……。」

ティルス達はパニックになっていた。だがそれは三姉妹にとってチヤンスだった。

「ティルス!こっちを見なさい。」

「はい?」

37・魅惑の力（後書き）

どうでしたか？

番外編上げると言って本編の方ですみません。番外編は次上げます。さてつぎは番外編です。土日には完成すると思います。今度こそ間に合わせます。頑張ります。

それではみなさん忙しさにも負けずまた次回お会いしましょう！！

番外編 4 ・ 泰人を攻略せよ！！ ・ 後編（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。

ついに後編が完成しました。少しエッチいかもしれませんのでそこはご了承ください。
それではどうぞ！

番外編 4 ・ 泰人を攻略せよ!!! ・ 後編

ターゲット・茅野泰人

身長・176cm

体重・64kg

血液型・O型

好物・和食

苦手なもの・甘すぎるもの

趣味・特にないがメジャーを弄るのが好き

友人・谷田沙汰

好きな女性のタイプ・ロリ、貧乳

家族構成・父、母、妹

成績・優秀で学年トップ、運動能力は人並みより少し上

武器・ラルゴ

何もない日常に不満を持っており一度かなりの事件を起こしたことがあるが、詳細は不明。

奇想天外な行動をするが、最近は周りがあるの上をいくため苦労しているらしい。

学力はトップクラス。特に文系がいい。

独特な雰囲気から普通の人には好かれない。変な人達にはよく好かれるようだ。

特に妹の莉麻からはとんでもなく好かれている。LIKEではなくLOVEらしいが本人は妹はあくまで妹としか見ていないらしい。

「今回のターゲットはこんなものかな。さてこれを見てどう思う?」

「嫌だよ、お兄ちゃんにもLOVEでいて欲しいもん！」

ここは番外編の世界。今回は前回に引き続きお送りします。
この会話はとある部屋でのものだが詳細は伏せておこう。

「さて、作戦だが（ドキッ！お兄ちゃんがそんなことしていたなんて！！・・・わたしにもしてくれたら許してあげる）作戦で本当にいいのか？・・・俺がこの役とか絶対おかしと思うが。」

「だって他の人は巻き込めないもん。それに私がいいって言うてるから問題ないよ。」

何やら言い合っている。どうやらお兄ちゃんなる人物に対して何かを行うようだ。

「・・・まああいつの驚く顔見ればこれくらい安いもんかな。それじゃあ、作戦開始だ！」

「らじャー！」

こうして秘密裏に（ドキッ！お兄ちゃんがそんなことしていたなんて！！・・・わたしにもしてくれたら許してあげる）作戦は実行に移された。

「全くあいつはしょうがないな。ま、直ったからいいけど。」

俺はそう呟きながら新しいメジャーを見た。いつみてもかつこいいフォルムだ！これを手に入れただけでも俺のテンションはマックスだぜ。

「……でも、たまにはあいつに付き合っただけでもいいかな。」

「……ただいま。」

莉麻が帰ってきた。少しは反省して欲しいものだが、あいつには無理だよな。

そう思っていると莉麻が俺の部屋に入ってきた。

ガチャ

ふむ、服装が変わっているようだ。見たことないけど新しく買ったのか。

「た……お兄ちゃんただいま。さっきは本当にごめんなさい。」

「!!!!!!?」

何が起ったのだろうか？

あの莉麻が俺に謝ってきた……だと？

訳が分からないがとりあえず言葉を返そう。

「お、おう。分かればいいんだ分かれば。」

「ありがと。それで、お兄ちゃんにお客さんが来てるよ。」

ガチャ

「たいとーーーーー!!!」

ん？何かやってきたぞ。聞き覚えのある声だ。
何かはいきなり俺に抱きついてきた。

ギューーーー

「おいおい、いきなりどうしたんだよ梓由。」

「えへへ、だって泰人に会いたかったんだもん」

抱きついてきたのは梓由だった。どうやら莉麻が連れてきたみたい
だがいつもと様子がおかしい。

いや、番外編の世界だから問題ないと言えばそれで終わりだがいつ
もはもつと静かなのだ。これはありえない。・・・となると奴か。

「うむ、よく分かった。一度落ち着こうか。」

梓由と莉麻を座布団に座らせる。現況には思い当たりがある。

「恐怖の沙汰がやったんだって俺にはすぐに分かったぞ。さあ白状
しろお前ら。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人は黙った。これは当たったな。
全くあのやる……

ドンッ

ん？なんだなんだ。

梓由に押し倒されたぞどういことだ……。

「そんなことはどうでもいいの。今は私だけを見て！」

「えーっと……。」

やばい。

顔が近いぞ。なんかいい香りがするぞおい。

つかこんな所莉麻の奴に見られたら……

「あ、私は気にせずどうぞどうぞ。」

気を使われてしまった。

なんてことだ、いきなりすぎてついていけないぞ。

そうしている間にもベッドに寝かされた。梓由に押し倒された状態である。これ他の奴から見たら間違いなく勘違いされるぞ。

「たいとー」

スリスリ

すりよってきやがった。いや、気持ちいいんだけどさ、やっちゃん

けない範囲は俺にも分かる。嬉しいがここは我慢だ。そう、これは罠だ！

俺は多少力を入れて引き離す。

「だーかーらー、駄目だつて。君はわ……一応若いんだから大切にしないと。」

もし昔のことがなければ母さん達より上だからね。一応はつけておいて損はないはずだ。

「もう照れちゃつて。じゃあこっちも本気でいこつかな。」

ん？なんだ、いきなり力が強くなったぞ。

俺は再びベッドに押し倒された。……絶対あいつの発明だな、間違いないから後で覚えていろよ。

「ねえ、あの時の返事まだだよ。……聞かせてよ。」

控えめなお胸さんが当たっている。……ちよいやばいかもしれんがここで負けるわけにはいかない。

俺には世界中のメジャーを収集する夢がある。いけ俺、前から考えていたあの言葉を言うんだ。

「……俺はお前の事が好きなのかもしれない。だけどまだ待つて欲しい。本編は終わってないからな。全て終わらせて改めて俺から切り出すよ。……それで勘弁してくれないか。」

「……やっぱり……そうなんだよね。」

俺がメタ発言を言うと梓由は黙ってしまった。

ベッドから降りて立ち上がる。

「うん、分かった。私、待ってるから。行こう、莉麻ちゃん。」

そう言って莉麻を連れて部屋を出ていった。

やっと一息つける・・・と思ったが莉麻がひょっこり顔を出す。

「さっきの後に私にもやってよね」

ボタン

閉まった。

あいつ、考えやがったな。・・・ま、後でどっか連れてくか。

莉麻の部屋

莉麻達が部屋に入る。

「・・・結構疲れたな。まず元に戻るか。」

莉麻はそう言うと指にはめていた指輪を外す。

すると莉麻が一瞬で沙汰になった。・・・恰好はいただけない。

「んじゃ、俺速攻で着替えるから。そつちも早く戻つとけよ。」

そう言って部屋の隅で着替え始めた。

梓由も腕輪を外す。すると莉麻と梓由に分離する。

梓由は気を失っている為、莉麻は自分のベッドに寝かせる。

「お兄ちゃんに梓由さん。・・・お似合いなのかな。」

そんなことを考えていると沙汰が着替えを終えて戻ってきた。

「いやいや、成功だな。あいつのあの表情見ただけで満足だな。こんなときの為に変身着替えセット用意しといて正解だった。」

強化した変身の指輪は自分の性別、年齢だけでなく他の人にも変身できるようになったようだ。いたずら目的で追加したらしい。

「そうだね。後でまたやつてもらおうと。」

そう（ドキッ！お兄ちゃんがそんなことしていたなんて！！・・・わたしにもしてくれたら許してあげる）作戦は梓由と莉麻が融合し、沙汰は莉麻に変身する。そして融合梓由がいちゃいちゃしてるのを変身莉麻が目撃し後で同じことをしてもらう約束するという作戦だったのだ。

莉麻は2度おいしい思いをし、沙汰は泰人の驚いた表情を見れる最高の作戦だった。

「いや、良かったよ。ゲームのデータ消えたのはこれでチャラだな。後は奴に気付かれる前にここを脱出して奴の気が晴れるまで家に籠れば前回みたいな失敗はない！さて、じゃあ俺はこれでサラバだ！」

そう言って莉麻の部屋を出ようとドアを開けると

「よお」

泰人がいた。

「いや、待ってくれ。これは違うんだ。俺はただ遊びに来ただけで・・・」

「ほう、莉麻に入れ知恵して梓由を変にした張本人が遊びに来たねえ・・・」

どうやら話は聞かれてなく勘違いしているようだが、沙汰がやばいものには変わらない。

「あのですね、俺のゲームデータが・・・」

「ちょっと、外、出よっか。」

「嫌だ、やめてくれ、やめろおおおおおおおおおお」

沙汰は発狂した。

そのまま引きずられて外に出てラルゴブラスターを喰らったのは言うまでもなかった。

莉麻は寝ている梓由を見た。

どうやら身体に異常はなく気持ちよさそうに寝てる。
さっきやったことの夢でも見ているのだろうか。

「私も・・・負けてられないね。」

莉麻はそう呟いて沙汰が吹っ飛ばされるのを見に行った。

後日、泰人と莉麻は町まで買い物に行ったらしい。
莉麻はとても喜んでいたので泰人も一安心だった。

沙汰の部屋

「今度こそ・・・次回こそ成功させるぞおおおおおお。」

全身傷だらけで寝ている沙汰は次の作戦を考えるのだった。

というところで2回に続いたこの話もおしまい。
番外編の世界にも色々あるのです。

さて、それではまた会う日まで！

終わり

番外編 4 ・ 泰人を攻略せよ!!! ・ 後編（後書き）

どうでしたか？

一応本編とは関わりないのでこのことが伏線になったりはありません。

・・・いや、変身機能だけは本当なんですけど。

というわけで次回ですが今週中には投稿する予定となります。

次からまた本編に戻ります。どんどん進めますよ。

それではみなさんの元気でまた次回お会いしましょう!!!

38・攫われた泰人（前書き）

こんにちは、ロンロンの弟子です。早めに投稿できます。嬉しいです。

寒くなってきましたね。体調には気をつけましょう。
では本編どうぞ！

38・攫われた泰人

実験台になっているのはまだ小さな男の子、女の子でした。私達は見ていられずに止めに入りました。結果は目に見えていますけどね。

私達は捕まり城の牢屋に入れられました。救いだっただのは妹達と一緒にだったことですね。

そしてそこで衝撃の事実を知ることになったのです。そう、クリスタ王国の裏側を・・・

テイルスが光ったことに対してサロンは不審に思う。彼女の力では光は発生しないからだ。魅惑の力が作用するのは肉体と精神である。精神力が高ければ抵抗はできるが肉体にも魅惑が掛かっている為動けなくなるのだ。

そして光が止むとそこに立っていたのは・・・

「・・・またこの格好になるんですか。」

女の子テイルスが立っていた。

数秒前

テイルス達が部屋で休んでいるときいきなり見ている景色がビーチへと変わった。

テイルス達がパニックになったがミュアは落ち着いていた。敵対組織の仕業と分かったからだ。

「あらあら？」

「ちょ、ちょっと！そんなのありなの？」

「え？」

サロン達が明らかに動揺している。それだけこの作戦には自信があったようだ。

ティルスはもじもじしている。

「……とりあえず最悪の事態は免れたみたいですがこれ恥ずかしいです。」

変身の指輪では服装は変わらないため男の時のままである。

「……加勢する。」

今がチャンスだと思ったミュアはヴィントルに近寄り肩に手をおく。

「……私の力使って。」

「よし、あれやるか。」

悪魔の一撃でまな板は粉々になってしまったがそれがヴィントルには都合が良かった。

右腕で高速に空中に闇の術式を描き、完成する。

悪魔は一撃を放った後なので体勢が崩れている。

「いくぞ、闇印・ダークスピア！」

術式から黒い槍が飛び出す。前と違い1本だけだが大きい。それは悪魔の左腕を貫く。

「ぐぎゃあああああああああああああ！！！！」

悪魔は絶叫し消えた。どうやら命の危険になると送り返せるらしい。

「!?!」

フロンは驚く。さっきよりも更に驚いている。

ヴィントルの攻撃にはない。傷ついた悪魔のことだった。

常にニコニコしていたフロンから一瞬笑みが消える。

両手で杖を持ち、それを前に出し……

「駄目!!」

ミカゼが止める。どうやら何をしようとしているか分かったらしい。

「あれだけは駄目だよ。ここはじっと耐えないと……あの子達の為にも。」

「……そうね、ごめんなさい。」

フロンは両手を下げる。どうやら思いとどまったらしい。

「・・・頼んだぜ。」

「え？」

莉麻にはそう聞こえた気がした。
そして莉麻の手は空を切った。

続く

38・攫われた泰人（後書き）

どうでしたか？

とりあえず海の隊編は大体考え終わっています。まだ書いてはいませんが・・・。

さて次で遂に一日目も終了です。ここからどうなるのか・・・楽しみにしていただけると嬉しいです。

次回ですが週末までには投稿したいと考えています。時間ある時に書いておきます。

それではまた次回みなさん元気でお会いしましょう！！

39・二日目の終わり (前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。すみません、遅くなりました。フリーゲームしました。最近のフリーゲームは完成度が高くつついやってしまいますね。では本編をどうぞ！

39・一日目の終わり

ここはどこなんだろう？僕はいつの間にかステージのスタッフになっていた。

名前、なんだっけ？とりあえず言われるままに働くことにした。

知らないアイドルグループのステージだ。やっぱり何も思い出せなかった。

ステージが開始と同時にスタッフ一同は解散した。よく分からなかった。後片付けとかどうすんだろ？

僕は近くの喫茶店で休んでいたがやっぱりステージが気になった。

僕の失った記憶が戻るかもしれない！

僕は再びステージ裏に戻った。何やら叫び声が聞こえる。気になってステージ裏から顔をだして見ると……

「……大変なことになりましたね。」

ティルスがそう言う。前を見ると誰もいないステージ、周りは疲れて座っているミュアと放心状態の莉麻、そして二人を気付かっている雪美、フィルディア、メイドディアの姿だ。

「とりあえずこれを外しましょうか。」

そう言って指輪を外そうとする……

「止めておけ。」

足元から声がする。そこには黒い水晶が転がっていた。どうやら分離してそのままだったようだ。

ティルスは拾う。

「お前の身体にはまだ奴らの術が掛かっている。今戻ったら最悪奴らの操り人形だ。それだけは避けたい。」

「・・・分かりました。」

ティルスは指輪をとるのをやめた。

本当は早くでも男に戻りたかったがそういうことなら従うしかなかった。

「あの一？」

「・・・え？」

ステージの後ろから一人の男が出てくる。

動きやすい恰好、見た目からスタッフのようだ。

年齢は20代後半に見える。

「君達は何者なんだい？・・・いや、それよりここは一体何なのか教えてもらうと助かる。」

ティルスはその言葉を聞いて大体事情を理解したが確信したのは落

ちていた地図が目に入りそれが光っていたからだ。恐らく泰人が落としたのだろう。地図というにはほど遠いが4つの黒点と1つの赤点を書いてあり、そのうち黒点一つ赤点が重なっている。どうやらこの男性が夢の欠片の一人らしい。残りの点は半透明なので近くにいないのだと判断する。

「はい、実は僕達は……」

ティルスは説明を始める。

サバイバルゲームについて、5人の人が記憶を失くしてこのゲームに強制参加していること、自分達がその人達を救うために戦っていること等を説明する。男性はいまいち理解し難いようだったが、さっきの事を目撃している為信じるようだ。というより信じるしかないといったところか。

「そうか、じゃあ僕は何をすればいいんだい？」

「とりあえず今日は一度退こうと思っています。攫われた仲間達を助ける作戦も立てなくてはいけませんから。」

「よし、じゃあ行こうか。」

ティルス達は今日はここまでで一度退くようだ。男性は近くに停めてあった車の鍵を何故か持っており、彼の運転で戻ることにした。大型の車なのでティルス、ミユア、莉麻、フィルディア、メイディア、雪美はきちんと座ることができた。そのまま雪美の屋敷に一度戻り体勢を立て直すようだ。

車が出発すると上空から二人組の男女が下りてきた。

「泰人とスイングが戦線離脱か。こりゃもう終わりかもね。」

「……さあ、どうかしら？私の出した確率は変わってないよ。テイルスを捕まえられなかったのが大きいみたい。」

「確かにあの王子？は意外にやつかいかもね。さて、僕達も一度戻ろうか。」

二人組は一通り回りを見渡すと再び飛んでいった。

こうして日も暮れていった。

午後6時

ピンポンパンポーン

「さてさて、1日目も終わりに近づいてきましたね。残りの人数ですがなんと52人！半分まで減ってまいりましたー。いやはや、ライブで一気に減りましたね。さて今から休憩時間に入ります。日が変わるまでは皆さん手を出さないでくださいね。今のうちにゆっくりしてください。ではスピーカー放送終わります。」

ピンポンパンポーン

雪美の屋敷に戻ったティルス達は居間に集まり再び作戦を立てることにした。

莉麻はまだ回復しておらず、部屋に寝かせてある。よほどショックだったらしい。

「あの、僕から提案があります！」

ティルスが手を挙げる。格好が女の子用の服装になっているようで、どうやらミュアに着せられたようだ。

全員ティルスの方を向く。

「ミアさんのさっきの放送、日が変わるまで休戦ってことは日が変わった瞬間から戦いをしていいと解釈できます。ならこんなのはどうですか？」

ティルスは自分の考えた作戦を説明する。

「……なるほどな。そいつが決まればラルゴ使い達を助け出しかなり有利な状況になるな。だが、奴らが警戒しないわけがない。チャンスは一度きりだ。分かっているのか？」

「それよりもあの方達の居場所が分からなくてはどうしようもない気が……。」

ヴィントルとメイディアが同時に質問する。ティルスは待ってましたと言わんばかりに答える。

「勿論考えてありますよ。まずは居場所ですが……………」

ティルスは懐から導きのビー玉を取り出して覗く。

「…………分かりました。どうやら船の中にいるみたいですね。船はビーチ近くに停めてあるみたいですが、僕の力なら船の前に一気に移動できます。これなら奇襲が可能です。」

ティルスの案に皆頷く。

「さて、ならば行くメンバーだな。さっきの話だとティルスとフィルディアが奇襲組、俺とミュアは後から合流する。残りは待機とそんな感じだな。」

「はい、それで……………」

「…………待つてー!!」

扉が開き莉麻が駆け込んでくる。

急いできたようだ。

「莉麻ちゃん、休んでいた方が……。」

「私は大丈夫。だから……私も連れて行って!!！」

雪美の言葉を遮って自分の意見を言った莉麻。

「いや、休んだ方がいい。俺様が考えるには……。」

「いえ、莉麻さんにも来てもらいましょう。」

「……何？」

「考えてもみてください。僕達のやることは泰人さん達の救出以外にもこの世界に来てしまった人々を助けるという目的があります。ここは二手に分けましょう。」

最初はざわざわしていたがティルスの一言でまとまったのか全員頷く。

ヴィントルは渋々といったところだが……。

「ティルス君、ありがとう！」

「いえ、いいんです。それで分け方ですが……。」

とあるブルの屋上。

白マントとシユパルツは夜空を眺めていた。

「さて、このままじゃ終わってしまいますね。ティルス君がどう動くかが楽しみですよ。」

「・・・この程度で奴らはやられないだろう。あるとすれば・・・
・・・例のイレギュラーだな。」

「あの危ない怨念ですか。あれは流石の私でも勝てませんね。あれの狙いは一体何なのか・・・私には分かりません。」

そんな会話をしていた。

裏路地

一人の男が寝転んでいた。不気味に笑っていて、どこかで見たことがあるような制服を着ていた。

「全ては奴に復讐するため、俺は今ここにいる。覚悟しておけ・・・
・・・」

こうして時間が経っていった。

それぞれ思い思いの休憩時間を過ごしていった。

そして日が変わった。

続く

39・一日目の終わり（後書き）

どうでしたか？

ついに一日目が終わり次からは二日目です。人数も半分減りそろそろ折り返しといったところでしょうか。

ずっと出したかったキャラクターをちょっと出してみました。彼が何者なのかはまた後で分かります。ヒントは制服で。

さて次回ですが、今度は未定になります。出来れば来週中に投稿出来ればと考えていますが。

では皆さん元気でまた次回お会いしましょう！！

40・真夜中の決戦・前編（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。

大変なことが起こりましたがそれは後書きで。

それではどうぞ！

40・真夜中の決戦・前編

クリスタ王国の裏側、それは子供達を使い強力な悪魔を生み出す実験だったのです。

このことは他の人達には知られておらず城の重役の数人が勝手に行っているとのことでした。

許せません。

……でもどうしようもできないまま時間だけが過ぎていきました。

そして遂にその時が来ました。次の日には妹のサロンとミカゼが連れて行かれると話を聞きました。私は抗議しました！何故私じゃないのか、私はどうなってもいいから妹達だけは助けてほしいと。

当然聞いてもらえませんでした。

力が欲しい。

妹達を助けることができる力が

欲しい！

欲しい！

欲しい！

そんな思いも虚しく最後の日、私達は眠りにつきました。

(力が欲しいの?)

目の前に女の子が立っていました。

周りを見渡すと白い空間が広がっており夢であると分かりました。

夢ならいいよね?

私はその子に言いました。

「・・・お願いします!」

その子の話では力を与える代わりに私達にゲームに参加して欲しいとのことでした。そのサバイバルゲームで私が予選を突破出来れば現実でも力を使えると。

私達に与えられた力、ミカゼが気配を感知できる力、サロンが男性を誘惑する力。そして私が召喚する力でした。

そう、悪魔となった子供達を召喚する力を・・・。

それに私は了承し、そして今ここにいます。

とある船の中泰人とスィング、武者蜥蜴隊のリーダーは同じ檻に閉じ込められていた。装備品は全部奪われ、別の場所に保管されているようだ。

「さて、どうする？俺っち達は人質みたいだが。」

「ティルス達が助けに来るだろ。心配いらんさ。」

「彼女たちはティルス達を誘きよせるために俺っち達を生かしてるみたいだし、何かいい作戦でも立てていればいいけど。」

サロンの術はすでに解けているようで、普通に会話していた。

「……………」

リーダーは相変わらず話さない。二人とは離れて寝ころんでいた。

午前0時船・入り口

三姉妹は交代交代で見張りをしていた。今、サロンとミカゼが見張りをしていた。

「うーん、眠くなってきちゃったよ。でも、頑張らないと！」

「そうよ、日が変わった今こそ奇襲に来るはず。あなたには期待してるから、気合い入れるわよ！」

二人は気合いを入れ直し辺りを注意深く見回した。

・
・
・
・
・

午前0時30分

「まだ来ないね。」

「全く、何をしてるのかしら。今がチャンスでしょ、どう考えても！っていうか、あいつら早く倒しちゃえばいいのよ。」

「駄目、ここで倒したら普通相手怒って強くなったりするものだよ。気づかれないように倒すのは多分無理だと思うよ。」

「むー、……分かってるわよ。ここは待つしかないわね。」

30分経っても誰も来る気配はない。二人は気合いを入れ過ぎて少し疲れてしまった。

「・・・しょうがないわね、ちょっと温かい飲み物でも持ってくるから、あんたはもう少し頑張っ！」

「分かった。」

サロンは一度飲み物を取りに船内に戻った。

そしてその直後だった。

シュン

目の前にティルスとフィルディアが現れた。

「・・・え？」

「・・・お願いします。」

ティルスがそう呟くと上空から黒い羽を生やした莉麻が降りてくる。一瞬のことでミカゼもついていけない。

「さて、寝ている。」

莉麻・・・いや、ヴィントルはミカゼの後ろに回り、頭に手を当てる。そして何やら唱え始めると・・・

「あ……………」

ドサツ

そのまま気を失ってしまった。

ティルス達の作戦はこうだった。まず莉麻と融合したヴィントルが気配と姿を消し見張りが一人になるのを待つ。なったらティルス達に連絡を入れ見張りの目の前に登場、動揺している間にヴィントルが気絶させるといふものだ。

「この娘には昨日気付かれたからな。だが俺様が本気出せば問題ない。」

どうやら昼気付かれたことを根に持っていたらしく、とても満足した表情を浮かべている。

「さて、俺様はまた上空で待機している。後は頼んだぞ。」

そう言って再び夜の闇に消えていった。

「では始めましょうか。」

「はい。」

ティルスは融合の腕輪を外す。すると、フィルディアは倒れ融合されていた少女と分離し、少女の方は消えてしまった。フィルディアは光となり融合の腕輪に吸い込まれ

る。ティルスは腕輪をもう一度身につけるとミカゼの手を握る。

するとミカゼはビクンビクンと痙攣し始める。

「やっぱり慣れませんね、これ。」

そうティルスが呟くと痙攣が終わりミカゼは目を覚ます。

「……………えーっと、成功したみたいです。」

ニコツとティルスに微笑むミカゼ。

それを見てティルスは頷く。

「はい、ではもう一人が来るまでに準備を終えちゃいましょう!」

「持ってきたわよ……………っつて!」

サロンは紅茶を淹れて持ってきたが目の前の光景に驚いた。

「おかえり、さっきティルスを捕まえたよ。」

「は、離してくださいよー!」

そうミカゼがティルスを捕えていたのだ。

いきなりだったためフロンは驚いていたが妹の活躍をようやく飲み込めたのか笑う。

「ふふふ、よくやったわ。ここは私に任せてあんたはティルスを牢屋に入れてきて。・・・っと、忘れてたわ。」

サロンはティルスの指についている指輪を外す。

ボンッと音がしてティルスは男に戻る。腕輪の方には気づかれなかったようだ。

「ま、まさか!?!」

ティルスは驚く。どうやらこれからやられることが分かっているようだ。

「当然！保険はいくらでも欲しいモノよ。ってことでしばらく大人しくしてなさい。」

「ぐっ・・・・・・・・。。。」

ティルスは大人しくなった。元々肉体にかかっていた術が発動したからだ。

だが泰人たちよりも苦しくなさそうだった。ヴィントルが思った以上にティルスの精神力は高いらしい。

「やっぱり操るのは無理か。ま、これで何か考えていたとしても無駄なこと。じゃあヨロシクね!」

「うん。」

頷いてミカゼは船内に入ってしまった。

「さて、これで勝ったも同然ね。周りにまだいるかもしれないから気を付けないと。」

「上手くいきました。指輪を取られちゃいましたが後は予想通りでしたね。」

「……………」

ミカゼはティルス連れながら船内を歩く。

そう、これで内部侵入は成功したのだ。しかし、ティルスは術にかかっており歩くことしかできない。

「後は私次第ですか……、責任重大ですが頑張ります！」

ミカゼはそう呟き、ミカゼの記憶を読んで泰人たちが捕まっている場所へと向かった。

続く

40・真夜中の決戦・前編（後書き）

どうでしたか？紅茶は後で師匠と美味しくいただきました。

それで大変なことは・・・パソコン壊れました。

かなりのデータ残したままだったのできついです。

とりあえず小説のデータはバックアップあったので大丈夫でした。

という訳であまり問題はないと思います。スペックも上がったは嬉しいですが、まだ少し使いにくいですかね。

それで次ですが、また未定です。データは無事でしたがさすがに疲れたので。

今月中には投稿できればとは思っています。

次は後編の予定ですが長ければ分けるつもりです。できれば一つにまとめたいですね。

では皆さんデータのバックアップはこまめにとってまた次回元気で会いましょう！！

41・真夜中の決戦・中編（前書き）

こんばんは、ロンロンの弟子です。パソコンが壊れたことから立ち直ったので投稿します。

やはりというか長くなってしまったため中編、後編に分けたいと思います。

それではどうぞ！

41・真夜中の決戦・中編

時間は戻り、午後11時・街中

スタッフの運転する車にメイディア、ミアを乗せて街中を回っていた。散らばった人たちの安全を確保することも重要であり、今の時間なら戦闘を避けられるからである。他のメンバーは作戦に向けて待機中である。夜10時から始めたのだが黒点の一つは素早くなくなか追いつかない。他の二つはずっと半透明のままである。地図はメイディアが持っており、もう一度確認する。

「えーっと、黒点一つに追いつきました。．．．やっぱり残り二つは半透明になってよく分かりません。」

ミアも一緒になって見る。赤い点二つと黒い点一つが近くにある。よく見るとこの点は路地裏にあることが分かる。

「この路地、．．．私だけで行ってくる。地図借りるね。」

ミアは二人を車に残して路地裏へと入っていった。

路地裏はとても暗かったため、持ってきたライトを付ける。周りを見ても人がいる気配は全くしない。

数分捜す。地図ではここにいる点があるのに、やはり誰もいなかった。

「．．．．．仕方ないか。」

諦めて路地裏を出ようとしたところだった。

ミャー ミャー

「……ん？」

何か鳴き声が聞こえた気がしたミュアは近づいてみる。そこには、ゴミバケツの後ろには一匹の猫がいた。首輪がつけられており飼猫であることが分かる。

ミャー

また一鳴きしてミュアの方を見ている。少し警戒しているようだ。ミュアはニコツと笑い緊張を解いてしゃがむ。

「……大丈夫、こっちにおいで。」

手招きをする。猫は少しミュアを見ていたが、危害を加えないと分かったのか近づいてくる。ミュアは猫を撫でてあげる。猫は気持ちよさそうにしている。どうやら人懐っこいようだ。ミュアは地図を見してみる。さっきの黒い点は赤くなっており保護したと分かる。

「……猫なんだ。」

どうやらこちら側に来ているのは人だけではないらしい。ミュアは猫を抱え上げる。猫は全く暴れようとせずじっとしている。

「……まずは屋敷へ。」

ミュアは猫を抱えたまま車へと戻っていった。

時間と場所は戻り、午前0時35分・船内

「えーっと、この子の記憶だと……まずはこちら。」
ミカゼ……いや、フィルディアが辿り着いた部屋は普通の客室のように見える。しかし、中は違うようだ。

「ここに泰人さん達の装備品があるみたいね。入りましょうか。」
フィルディアは部屋の中に入る。見るとやはり普通の客室みたいだが机の上に物が入った袋が置いてあった。中を見ると、ラルゴや白い石、ドライバーセットといった物が入っておりすぐに泰人達の荷物であると分かった。

「では、早速持って行きましょうか。」

フィルディアが袋を手に取りろうとした所だった。

ガチャッ

「え？」

突然ドアが開く。そして入ってきたのは

「あら、ミカゼちゃんどうかしたの？」

フロンだった。すぐにティルスが目に入る。

「ティルスくんを捕まえたのね。それで彼の装備品をここに置きに来たのかしら。」

その一言は驚いて頭が回らないフィルディアにとってはこれ以上ないチャンスだった。

「そ、そうなの。今から檻に連れて行こうと思って。」

「そうなのね。なら私が見張りを代わるわ。それじゃあ宜しくね。」

フロンは完全に信じていた。そう言ってゆっくりとした足取りで部屋を出て行った。

「危なかったです。」

何とか乗り切り一息つく。だが新たな問題が出た。フロンが入り口へ向かっていった、ということは・・・

「合流させるのは危険ですね。ひとまずヴィントルさんに連絡をとりましょう。」

フィルディアはティルスのポケットから通信機を取り出す。ティルスの持ち物は指輪以外とられていない、というよりもサロンがミカゼにその辺りは任せただ。まあ、今ミカゼはフィルディアなの

だが。

フィルディアは通信機でヴィントルに連絡をとる。

「そちらに長女が行きました。次女を合流前に倒してください。」

「言われるまでもない。」

そう一言返事がきて通信が切れる。

「では行きましょうか。」

フィルディアは袋を持って泰人達が捕まっているであろう場所へ向かっていった。

船入口

「ふむ、では早速行くか。」

ヴィントルは急降下していきなりサロンの目の前に現れる。

「え？」

身構えていたとはいえ一瞬で現れたヴィントルに動揺するも、冷静に距離をとる。

「き、来たわね。さあ、出てきなさい。私の僕達!!」

そう一言言つと船の上に配置されていた小屋らしきものから次々に狼が出てくる。

彼女はオスならば動物も自由に誘惑できるようだ。全部で8匹ほどいる。

「ふむ、なかなかおもしれえじゃねえか。」

「余裕ね。それがいつまでもつかしら?」

サロンは狼たちに指示を出すと一斉に攻撃の体制に入る。それを見てヴィントルはニヤリと笑う。そして走り出す。

「やりなさい!」

サロンの言葉で攻撃しようとした狼たちだったがヴィントル行動により動けなかった。

そう、彼はそのままの勢いでサロンに抱きついた。

「……ちよつと!?!」

サロンは動揺した。ヴィントル……いや、莉麻に抱きつかれたのだ。

自分よりも体型が小さいわけだがいきなりのこと動揺し、それが狼たちにも伝わったのか狼たちも慌てふためいている。

「あらゆる状況にも対応せねば真の戦士とは言えねえよ。さて……」

「……し、しまった!」

しかしもう遅かった。ヴィントルはすでにサロンの頭に手を置き呪文を唱えていた。そして唱え終わる。

「・・・ぐぐぐ。」

サロンは必死に耐えていた。ミカゼはすぐに寝てしまったが彼女は耐えている。

一応一般人よりも精神力は高いようだ。だがヴィントルの力のほうが上回っていて気を抜くと意識を失いそうだった。ヴィントルは彼女が耐えることまでは読んでいた。そう、彼女に意識を保つことに集中させることが目的だったのだ。

アオーン

狼たちはコントロールを失って小屋に戻っていく。どうやら魅惑が切れると元の場所に戻るようになっていたようだ。そして、狼たちの効果が切れたということは・・・

「あらあら、ごめんなさいね。遅くなったわ。」

それから少し経ってフロンがようやく到着する。そして、彼女が見たのは

ドサッ

自分の妹が倒れるところだった。

「サロン!？」

咄嗟に駆けつける。先ほどと違い俊敏だった。本来彼女はそこまで遅いわけではないのかもしれない。

「フ、フロン……。」

今にも気を失いそうだった。だが彼女は最後の力を振り絞って何かを伝えたそうだった。

「サロン……。」

「ごめん、私はもう駄目みたい。だから約束して欲しいの。」

そしてサロンの目から涙が流れる。

「後をお願い、お姉ちゃん。」

そう言ってその身体は光となって……消えた。

「ふむ、こんなものか。」

ヴァイントルが一息つくつとずる。

フロンは彼の方を見る。いつもの穏やかな表情ではなくとも悲しみに満ちていた。

すると船の中から誰かが出てくる。それはミカゼと・・・

「な・・・なんで!？」

泰人、スイング、ティルス、武者蜥蜴隊のリーダーだった。全員術が解けピンピンしていた。リーダーは無表情だったが。

「おう、ヴィントルと莉麻か。助けに来てくれてありがとよ。」

泰人達は再開の言葉を交わしていたが、フロンはもう何も考えられなかった。

するとミカゼが彼女の目の前に立つ。そして

「・・・ごめんなさい。」

そう言うと、力が抜ける。慌ててフロンが支える。そしてすぐに何かがミカゼから抜けると目を開ける。

「ミカゼ、大丈夫?今すぐ・・・」

「ううん、操られた私が悪かったの。それより約束して欲しいことがあるの。」

聞きたくなかった。ミカゼの最後の言葉なんて。だけど、彼女は聞くしかなかった。

「後はお願いな、お姉ちゃん。」

そう言っつてサロン同様光となつて消えた。

「では僕はこれで。今回の礼は必ず返すから。」

そう言つてリーダーはその場を去つた。

ティルスはサロンが消えた場所を調べる。すると返信の指輪が落ちていたことに気づき拾つた。

泰人はヴィントルと莉麻、ティルスと融合の腕輪にいるフィルディアにお礼を言つとフロンを見る。

「……………」

フロンは立ち尽くしていた。目の前で妹達二人がやられてしまい傷心状態だつた。

「……………あの」

泰人が話しかけようとする

「……………そうですね。いつまでも悲しんでいても始まりません。」

そう呟くと両手で杖を持ち、それを前に出す。

「……………おい、あれはやばいぞ!……!」

ヴィントルが気づくも既に遅かった。

フロンの目の前に門が出現しそれが徐々に開いていく。

「すみません、妹達のためにも本気で勝たせてもらいます。覚悟してください!!」

そこから出てきたのは・・・巨大な海蛇だった。

続く

41・真夜中の決戦・中編（後書き）

どうでしたか？ついにクライマックスです。次回ようやく決着が付きます。

新しいパソコンがなかなか慣れません。前使ってた文字変換機能もなくなってしまうためそこからのスタートでした。これは使っていくうちに慣れていくしかないですね。

さて次回ですが、今週の土日辺りを予定しています。今年には予選を終わらせられればいいですが・・・。

では皆さん、大事なものはなくしたあとに気づくようなことなく、元気でまた次回お会いしましょう！！

42・真夜中の決戦・後編 (前書き)

こんばんは、ロンロンの弟子です。今回は何かアイデアが上手くまとまったので早めに投稿します。いつもこうならいいんですけどね。それでは本編をどうぞ！

42・真夜中の決戦・後編

時間と場所は戻り船内。

フィルディアはミカゼの記憶を頼りに檻の部屋を見つけた。

ガチャ

扉を開けると檻の中にいる三人の姿が確認できる。

「えーっと、何か用か？」

泰人が警戒しながら聞いてくる。確かに今のフィルディアの姿はミカゼなため仕方ないといえる。

「大丈夫です。私はフィルディアで、皆さんを助けにきましたよ。」
部屋を見渡すと檻から離れた机の上に鍵が置いてある。それを手に取ると檻の鍵を開ける。

「そうだったんですか。ありがとうございます、助かりました。」

「流石っすね。ありがとうございます！」

それぞれお礼を言いながら檻から出てくる。だが一人動かない男がいた。そう、武者蜥蜴隊のリーダーだ。

「……………」

リーダーは無表情で動こうとしなかった。

「……………仕方ありませんね。」

フィルディアは檻の中に入りリーダーに手を差し伸べる。

「……………何の真似だい。僕は無視して行けばいいじゃないか。」

「今回は貸しにしてあげます。後でちゃんと返してください。それに、一緒に逃げた方が効率がいいですよ。」

ニコツと笑いかけて話すフィルディアを見て、…………リーダーは澁々手を取る。表情も戻ってきたようだ。

「いいだろう。僕は借りを作らない男だ。必ず返してみせるさ。」

そしてリーダーも連れて船を脱出した。途中でティルスが意識を取り戻し、ヴィントルがサロンを倒したのだと分かった。

時間は戻り屋敷内

ミア達は全員居間で待機していた。雪美には寝るように言ったのだがどうしても待つと聞かなかつたらしい。猫は雪美の許可をもらい猫用の部屋を設けてもらった。それぞれ思い思いに時間を潰し、何も起きずに過ぎていく。みんな暇そうにしていたが

「……ん？」

ミアは何かを感じ取った。ビーチの方で強大な力を感知する。

「………嫌な予感。」

ミアはスタッフに車を出してもらおうように話をつける。メイディアと雪美も行きたそうにしていたが、危険なため説得し残ってもらうことにした。

「……猫を宜しく。」

そう言ってミア達はビーチへと向かった。

そして現在。フロンが海蛇を呼び出した。

「では、蛇さん。彼らに攻撃をお願いします。」

フロンが指示すると海蛇は海へと飛び込む。その後を追うようにフロンも海へとダイブする。一同が驚く中、フロンは上手く海蛇の頭に着地する。地面ではないが。すると海蛇の口が大きく開く。

「ヤ、ヤバいぞ。早く船から離れる!」

ヴィントルの一声で船から離れる泰人達。
そして……

グオオー

もの凄い音が鳴ると同時に竜巻が発生し船を飲み込む。もうなんの音か分からない位の騒音で船が完全に沈んだ。元々暗かったのもあるが完全に跡形もない。

「……これは洒落にならないっすね。」

一同呆然とした。一瞬で目の前の船が消えれば驚かない方が珍しい。

「逃げましたか。ならこちらに来てもらいましょう。」

そう言うと海蛇が大きく息を吸い込んだ。とんでもない吸引力に全員引き寄せられる。

「ぐ……、この俺様も引き寄せられるだ!」

それほど凄いのだ。そして全員真夜中の海に入る一歩手前まで来る。

「あらあら、来ましたね。さてそれでは・・・」

何やら攻撃の指示をしようとしているフロン。泰人たちは踏ん張るので精一杯で他に手が回らない。

「それではこれで・・・?」

キキーン

後ろで車が急ブレーキをかけた音がする。
そして

「・・・好きにさせない。」

ミュアが飛び出してくる。既に何かの術を完成させている。いきなり現れたミュアにフロンの指示が遅れてしまった。

「しまっ・・・」

「皆、目を閉じて。・・・光印・フラッシュレイ!」

ミュアの言葉に泰人たちは従い、目を閉じる。
すると

ピカッ

強力な光が術式から放たれる。といっても光るだけだが。だがそれを見たフロンと海蛇には効果が現れる。

「グギャアアアアア!」

「あらら？目が見えませーん。」

どうやら強力な目眩ましのようだ。発生していた竜巻も収まり吸引も消えた。

「今がチャンスだな。でっかいの一撃で決めてやるよ。」

ヴィントルは何やら強力な術式を描こうとしたが・・・ミアに止められる。

「・・・倒しちゃいけない。この海蛇、ただの召喚された魔物じゃない。」

ヴィントルは魔物をよく見る。

すると僅かだが継ぎ接ぎのような箇所が見える。それを見てヴィントルは確信する。

「人口で作られた魔物、見たところ生贄は人間のようだ。」

「・・・そう、恐らくこの人たちの目的って。」

「つーことは、昨日の奴もか・・・糞が!!」

仕方なく術式を描く手を止めるヴィントル。流石にやってはいけないと思ったのだろう。

すると暴れていた海蛇も徐々に収まりフロンにも視力が戻る。

「あら、まだ何とかなっているみたい。では、改めて・・・」

「おい、聞け小娘！」

強くヴィントルが叫ぶ。まあ莉麻の声だから凄みはないのだが。それでもフロンは止まった。ヴィントルの話を聞く気はあるようだ。

「お前、目的はなんだ？その魔物みたいなのを生み出して戦わせるのが目的だって言うなら・・・本気でぶっ倒すぞ！」

「・・・そうですね。仕方ありません、少し私の話を聞いて下さいませんか？」

そう言つてフロンは話し始めた。

自分たちが様々な国を旅しているときに立ち寄った、クリスタ王国で見た魔物を生み出す実験を。

そしてそれを目撃したため捕まってしまったこと。

もうすぐ妹達も生贄にされてしまうこと。

それを防ぐためにミアアにお願いして力を得たこと。

3姉妹のうち誰か一人でも予選を通過できれば現実世界でも能力を使える状態にしてくれること。

「私は負けられないんです。本当はこの子達を戦わせたくはないけど、これしか方法がないから。私はどんなに恨まれてもいい。この子達を、妹達を救うためなら私は何だつてしてみせます。」

決意に満ちた表情はとても嘘を言っているようには見えなかった。思わずヴィントルも黙ってしまう。

「・・・クリスタ王国ですか！？」

「・・・クリスタ王国だと！？」

二人ほど反応する。泰人とティルスだった。ティルスは一度行ったことがあるから分かるのは当然である。では泰人は……

「どっかで聞いたことあるんだけど。前にネットで調べたときにそんな言葉があったような……？沙汰なら知ってるかもしれないが。」なんてことを考えていた。

「さて、私の言いたいことは全てです。……それでは再開しましょうか。」

再び海蛇に指示を出そうとするフロン。

「って、ちょっと待ってくれ。そういうことなら俺たちと一緒にいかないか？目的は同じなら……」

「それはお断りします！」

思いっきり拒否される。驚く泰人。

「私は海の隊の一人です。貴方たちを倒すように言われている部隊の一人なんです。それに貴方たちに妹達がやられたのは事実です。もう、……戦うしかないんですよ。」

すごく悲しい目をしている。だがそれで分かる。フロンの決意は固い。そう簡単には変わらないだろう。

「……だったら、俺たちがその海蛇を無力化できたら貴女は俺た

ちの仲間に来てもらおう。それでどうかな？」

「・・・あらあら、貴方は面白い人ですね。いいでしょう。ただしこちらは手を抜きませんよ。では蛇さん、お願いします！」

グリアアアアアアアアアアア

海蛇は声を上げる。すると周りには竜巻が発生する。そして思いっきり風が吹く。

「・・・!？」

今度は先ほどと逆、思いっきり吹き飛ばされる。

泰人達は予想していなかったためそのまま飛ばされてしまい壁に激突し思いっきり背中を打つ。

「・・・ぐああああ!！」

全員悶絶中。相当痛いようだ。なおも続く強風で、このままだと風圧に全員潰されてしまう。

「ラ、ラルゴ使い。結界を展開しろ!このままじゃ全滅するぞ。」

「分かってるさ。蝸牛結界・守!！」

痛みに耐えてそう言うと、ラルゴが光り泰人たちを包むように結界が展開される。

だが強風に押され少しずつ小さくなっていく。

「駄目だ、向こうの力の方が明らかに上だ。・・・このままだと。」

「
泰人の思ったとおり蝸牛結界はどんどん小さくなっていく。
そして誰もが諦めかけた時だった。」

「ますたーもカタツムリさんもまだ諦めないですよ。」

「ん？」

スイングのポケットから何かが飛び出した。

小さい精霊のようだがどこかで見たことあるような姿をしている。
そう、白魔石をスイングに渡したあの少女・美弥にそっくりだった。

「何か出てきたっすね。いやでも今忙しいから後で……」

「あたしはシロミヤーだよん。」

話を聞いていなかった。
彼女は周りを見渡す。

「ふーん。キツイけど、あたしが来たからもう大丈夫っしょ。じゃあ行ってみよ」

やたらテンションが高い精霊である。ちょこんとスイングの肩に乗る。

「ますたー、今ならちょーヤバい力使えるかも。とりあえずあたしの5割の力貸すから一緒にカタツムリさん手伝えていこー！」

「分かった。」

シロミヤールが肩に乗った瞬間からスィングには何か強力な力を得た感覚がした。

「これならいけるっすね。」

スィングはラルゴに触れて力を強化する。すると

グググッー

徐々に結界が広がっていくのが分かる。海蛇の竜巻を押ししている。

「・・・仕方ないな、ラルゴ使い！蝸牛結界をあのを竜巻にぶつけて相殺しろ。俺はミュアとあの海蛇を門に帰す術式を組む。」

「ああ、頼むぜ！」

「・・・了解。」

泰人とミュアが頷くと莉麻から黒い水晶が飛び出しミュアに入る。ミュアは集中し術式を描き始めた。

「・・・背中痛いよ。」

「結構効きましたね。」

莉麻とティルスは痛がっている。元々打たれ弱い二人なので仕方ない。そうこうしている間にも結界が徐々に押ししている。

「あーら、泰人君達も本気できたわね。」

いきなり押され始めたためフロンも少し焦っていた。

「ならこちらでも本気でいきましょう。蛇さん、お願いします。」

グリアアアアア

竜巻が更に大きくなり風の強さも増す。再び結界が押され始める。

「……ぐ、あの海蛇の強さヤバいな。白虎倒した俺がスイングの力を借りても押されるか。」

「俺っちも全開なはずなんだがな……。」

だがやはり押されている。泰人もスイングも先ほどのダメージもあり限界に近かった。

「うーん、まだ足りないのね。相殺の力加減が難しいのよね。じゃ、5割から7割に力を上げるからますたーもカタツムリさんも頑張って耐えてね。」

グンッ

「うわっ!?!」

スイングの力が更に強化される。スイングはいきなり力が上がったため驚いたが、すぐに落ち着き泰人に強化された力を送る。

「……これはいけるかもな。蝸牛結界全開だ!」

グググググ

再び結界が押し始める。先ほどよりも更に勢いがついてとんでもない力の塊であると分かる。フロンはかなり驚いた。

「だ、駄目。私は負けられないの。妹達の為に……も……」

だが海蛇の力はもう限界だった。そのまま竜巻に接触し、消滅する。

「そん……な……」

「……後は任せて。」

術式を組み終えたミュアは一気に海蛇に近づき術を放つ。

「門よ開け。この者を元の世界へ！」

すると先ほどの門が開き、海蛇を吸い込んだ。だが海蛇のみを吸い込んだため、足場をなくしたフロンが落下する。

「あららららー？」

シユルルルル
パシッ

「……あら？」

落ちなかった。見るとフロンはムチのようなもので支えられていた。そう、ラルゴウィップだった。

「さて、俺達の勝ちだぜ。仲間になってくれるよな。」

フロンは何も考えられなかった。だが、もう答えは決まっていたためすんなり言葉に出た。

「はい、お願いしますね。」

上空

「何なんだあの力!!?あの海蛇は力だけなら朱雀以上はあるはずなのにそれを力で返すなんて。」

「……あの白魔石の精霊、白魔石だけでもレアアイテムなのにあの精霊の力は異常。計算し直さないと!」

双子の少女の方は計算を始めすぐ終わる。

「終わった。私達が勝てる確率は……4割。」

「……嘘だろ。あれだけでこんなに上がるなんてありえないよ!

「!!」

「落ち着いて。ひとまず戻ろうよ。」

少女が少年を宥めて再び暗闇に消えた。

午前1時30分・ビーチ

フロンと分かり合った泰人達はひとまず帰ることにした。もう全員満身創痍だからだ。フロンを連れて無事だったスタツフの車に乗り雪美の屋敷へと戻っていった。シロミヤアはあの後すぐに石に戻ってしまった。

こうして泰人達の二日目最初の戦いは幕を閉じた。果たしてこれからのような戦いが待ち受けているのか？

「必ず地獄に送ってやる。待っているよ、泰人お!!」

泰人達が屋敷に戻っている時、路地裏にいた男はそう叫んだ。

続
く

42・真夜中の決戦・後編（後書き）

どうでしたか？因みにシロミヤの平仮名ますたーはわざとです。ギャルっぽくしたかったので。

さてこれでようやく海の隊編は終わって遂に予選の終わりが見えてきました。今年中には是非とも予選までは終わらせたいです。

それで次回ですが週末を予定しています。パソコン変えたからか創作意欲が上がってきましたね。このままでいきたいものです。

それでは皆さん風邪には気を付けて元気にまた次回お会いしましょう！

43・復讐者暗躍(前書き)

おはようございます、ロンロンの弟子です。何かかなりのハイパー
スで投稿しています。出来る時に書いておかないといつ何が起ころ
か分かりませんからね。
それではどうぞ！

43・復讐者暗躍

二日目、午前4時・路地裏

一人の男が寝そべっていた。彼は今ある人物に復讐するために計画を立てていた。だがなかなか決まらないようだ。

「奴の精神を弱らせたいがタイミングが難しい。どうするかな。」

ブツブツ呟き考えていると本通りの方が何やら騒がしいのに気づく。

「なんだ？また戦闘でもあったのか。」

気になった男が見に行くと、そこには10人の集団がいた。どうやら今結成したらしい。

「よし、俺達が力を合わせりゃ王子隊なんて楽勝だよな。」

「当然だろ。このメンバーで本戦に残るんだよ。」

どうやら本戦に残るため残った選手達が手を組んだらしい。狙いは泰人達のような。

「なるほど。奴らを上手く使えれば泰人を追いつめられるかもな。」

そう思った男は集団と接触しようとするが、………突然足を止める。

「……何か来るみたいだ。まずは様子見だな。」

再び身を隠す。すると本通りに現れたのは・・・一人の少年だった。年は10歳前後で服はボロボロ、手に刀を一本握っている以外は何も持っていない。目に光はなく明らかにおかしいと分かる。

「あの少年、かなりやべえ。どうやらあの集団と接触するみたいだな。」

男の思った通り、少年は集団の前で止まる。

「あれ、どうしたのかな。子供がこんな時間に歩いてちゃ・・・」

「馬鹿！そのガキヤバいぞ。」

一人気づくがもう遅かった。

ジャキン

その音が聞こえらるともう終わっていた。一瞬で全員が斬り伏せられていた。

「ほう。」

集団は光の粒子となり消える。それを見届けると少年はその場を去っていった。慌てて男は大通りに出るがもう少年の姿はなかった。

「10人を一瞬か。なかなかの実力だ。俺には勝てないがな。」

男はかなりの自信過剰らしい。そこに上空から誰かが来る。これまた集団のようだ。

「その男、止まりなさい！」

男は呼ばれたので素直に止まった。彼は警察が苦手なため、その集団を警察だと思ったからだ。

「こんな所にも警察がいるのかよ。」

そうばやいていると集団のリーダーらしい人物が前に出る。さっきのとは違うタイプで賑やかそうな少年だった。

「僕は空の警備を担当する空の隊です。ここでかなりの人が一瞬でリタイアしたと聞いてきたのですが、あなたは知りませんか？」

だが口調は丁寧のようだ。

「知らん。じゃあな！」

そう言って去ろうとするが

「待ちなさい！」

止められる。

「彼からは危険な力を感じます。ここは捕まえた方が・・・」

「ほう、この俺を捕まえる気か。」

男は話を最後まで聞かずに勝手に解釈して身構える。

「・・・分かりました。威嚇の発砲を許可します。」

少年の掛け声で隊員は身構える。全員空を飛んでいるため上から狙われる形になるのだが

「えーっと、あの子供を合わせないで15人か。あの少年は見てないが格の違いを見せようか。」

誰に見せるのかは聞かないでください。

隊員達は威嚇発砲をするが男は全く気にせず何かしようとしている。

「隊長！彼には威嚇は意味がないようですが。」

「仕方ありません。彼も敵対するみたいなので発砲を許可します。」

了解と全員で声を合わせて発砲を開始する。どうやら弾は空気らしく何発でも打てる優れものだ。だがそんなのお構いなしに男は全て避ける。

「じゃ、いきますか！」

ピーーーー

男は空に響くように高く指笛を鳴らした。

場所は変わって雪美の屋敷

屋敷内から僅かに音がすると思えば一匹の猫が屋敷から飛び出していった。メイド達は他の仕事をしていたため気づいていないようだ。

場所は戻って本通り

相変わらず男は弾を避けていた。すると・・・

ミヤー

鳴き声がして一匹の猫が彼の胸に飛び込んだ。

「ようprest、奴らの偵察は順調みたいだな。頑張ってるじゃないか。」

ミヤー

弾を避けながら何か話していた。そして猫の名前はprestというらしい。

「じゃ、やるうか。prest、甘噛みで頼むぞ。」

ミヤー

プレストが鳴き声を上げると男の左の薬指にかぶりつく。するとプレストは光り出し男と一体化する。すると男にも変化が現れる。背が縮み、服装がセーラー服になり少女のようになる。猫耳と尻尾まで生えている。

「な、なんなんだあれは!？」

隊員たちは驚くがそれは無理もない。目の前の男が猫と合体して少女になったら誰でも驚く。

「うーむ、プレストがメスだから合体すると性別変わっちゃうんだよな。そこが残念だが・・・まあいいさ。」

猫少女がうんうんと唸っている。その間も弾をすべて避けていた。

「な、なにものなんだ?今までののを全て避けて合体までするとは・・・」

隊員たちは怯えていた。今まで彼らはエリートとして生み出されて過ごしてきたがこれほどの力の持ち主にはあったことがなかったからだ。

「・・・じゃ、行ってみようか!」

目の前の猫少女の姿が消えた。隊員達は周りを見渡すが少女はいない・・・が変化はすぐに訪れる。

「ギヤアアアアアアアアアアアア！」

隊員たちは叫び声を上げて次々に墜落していく。見てみるとどうやら背中に深い切り裂かれた痕があった。

スタツ

猫少女は屋根の上に着地する。見ると爪は鋭く尖って血がついているのが分かる。

そして少年一人を残して全員墜落するのを見てニヤリと笑う。

「一瞬で全滅・・・、何が起こっているんだ。」

少年は混乱していて何も考えられなかった。

だがそこに応援が来る。女の子のようだ。

「心配だから見に来たけどどうなって・・・。」

女の子はも驚いた消えかかってはいるが隊員全員がやられているところを見たからだ。

「大したこと無いな。さて、君たち双子っぽいしこいつらのまとめ役みたいで結構強そうだけど・・・。」

殺気を感じた。だが双子は二人とも動かない・・・いや、動けないのだ。何か強烈なプレッシャーを感じる。

「さあ、お楽しみはこれからだよ。」

猫少女はそう言い双子へと向かっていった。

続く

43・復讐者暗躍（後書き）

どうでしたか？

あの猫はメスでした。合体すると猫の力を受け継ぐためそれに適した姿、猫少女になるわけです。戦闘力はとんでもなく上がっています。少なくとも本気の朱雀でも勝てません。それくらい強いです。その力は次回以降にわかります。空の隊の双子についても次回以降ですね。なんか可哀想なキャラになってしまいました。

さて次回ですが週末を予定していますが、少し遅れるかもしれませんが、今かなりのスピードで投稿しているのでそろそろまたネタを仕入れないといけないので。

それでは皆さん元気でまた次回お会いしましょう！！

44・最悪の再会（前書き）

おはようございます、ロンロンの弟子です。間に合いましたね。いや、いいネタを思いついたので急遽話を変えることにしました。まあ、次回からですけどね。
それでは本編をどうぞ！！

44・最悪の再会

今朝の戦いの後、テイルスはフィルディアをラルゴに戻し、ミュアとヴィントルは分離した。

屋敷につくとスタッフ達が出迎えた。猫の存在を教えた後、疲れたのか全員すぐに寝てしまった。そして戦い初日の夜が過ぎて陽が昇る。

午前6時・雪美の屋敷

「うーん、朝一番の温泉はやっぱりいいものね。」

メイディアは温泉に入っていた。他のメンバーは疲れて寝ているため彼女一人である。

「さて、昨日から気になってた露天風呂でも行こうかな。」

上機嫌なメイディアは露天風呂へと向かう。

ガラガラッ

・・・そこには武者蜥蜴隊のリーダーが立っていた。メイディアは一応タオルは巻いているもののほぼ裸である。

「都合がいい。大変なことになつ……………」

……………

……………

……………

……………

キャー——————！！！！！！

その後リーダーはボコボコにされた。その騒ぎがあつたか皆起きて居間に集まっていた。……………一人を除いて。

「そんで、覗き魔は何しに来たんっすか？」

「覗きとかちよーキモいんですけど。ていうかますたー、何しに来たかつて覗き魔は覗き以外にすることないじゃん」

いつの間にかシロミヤーまで出てきて散々な言われようである。メイディアは恥ずかしくて顔を赤くし俯いている。

「……………それより気づかないか？誰かが足りないのでは。」

これ以上覗きのことを言われると正直泣きそうなりリーダーは話題を変えようとする。

「……………お兄ちゃんがない！」

いち早く莉麻が気づく。

そう、その場には泰人がいなかった。勿論フィルディアもである。

「俺っちが起きたときにはもういなかったから先に来ていると思っ
たんすけどね。」

「……………おい、まさか貴様が言いたいのは。」

頷くリーダー。どうやらヴィントルは分かっただらしい。

「茅野泰人は戦地へ向かった。」

今から数十分ほど前まで戻る。

泰人は眠っていた。流石に一日目は色々ありすぎて疲れきっていた
からだ。……………だが

泰人、起きろ、泰人

直接脳に響く声がして泰人は仕方なく起きる。

「……んむ、つたく何処の誰だよ。」

僕は空の隊、隊長のディアルだ。君と少し話をしたい。誰にも気づかれずに一人で外に出てきてもらえないか。

空の隊という言葉で泰人は完全に起きた。

「……分かった。その代わりに、屋敷に攻撃なんかするんじゃないぞ。」

そうやって泰人は机の上のラルゴを手取る。

「あれ、泰人さん。朝早いですね。おはようございます。」

「おはようございます。急ですみませんが話を聞いてください。」

泰人は空の隊、隊長が屋敷の前まで来ていて自分が呼ばれていることを話す。

「そうですか。分かりました、一緒に行きましょう。」

「ありがとうございます！」

泰人はラルゴを使い蝸牛結界を展開し屋敷前まで飛んだ。屋敷の前

では一人の少年が待っていた。

「来たか。じゃあ、近くの公園に行こう。その方が話しやすい。」

「分かった。」

二人は近くの公園まで歩いていった。公園まで歩いている中で泰人はあることに気付く。

「人の気配がないな。少なくとも参加者はいるはずなんだが。」

「そのことも着いたら話す。」

そう言つて少し歩き公園に到着する。二人はベンチに腰掛ける。

「それで話つてなんだ？俺をここで倒すとか。」

ディアルは首を振る。

「実は君を待っている人がいる。それで僕がその人に君を連れてくるように言われたんだ。」

「ちょっと待てよ。隊長ならそんなの部下に任せればいいじゃないか。」

・・・ディアルは俯く。そして辛そうにしながらも話す。

「全員そいつにやられたんだ。15人の精鋭達が一瞬で。それだけじゃない。そいつはその前にも大量の参加者をこれまた一瞬で倒している。桁違いの強さだよ。」

「マジかよ。そんな奴に呼ばれているのかよ。」

流石の泰人もその人物の実力がその説明だけで分かる。

「今は遠慮するよ。まだヴィントルに覚醒スネイラーの発動許可もらってないし。俺はこんなところで負けられないからね。そいつとは本戦で戦うって言うといってくれ。」

そう言っただけ立ち去ろうとする泰人だが、ディアルに腕を引っ張られる。

「お、お願いします。君を連れて行かないと僕の姉さんが・・・やられちゃう。」

「・・・何!？」

泰人は足を止めて振り向く。

「僕の双子の姉さんが人質にとられて、君を連れていかないと・・・」

ディアルは今にも泣きそうだった。

泰人には分かる。これは演技じゃない。家族を思う男の姿だ。

泰人は考える。はっきり言って聞いた限りの実力者なら勝てるわけがないからだ。精鋭達15人を一瞬で倒す相手では白虎でも無理だろう。全盛期の玄武やヴィントルと並ぶくらいか。

「・・・うーん。」

だが目の前の子の家族は救いたかった。
と悩んでいると

「悩んでいる時はこの言葉を言うように言われたんだ。」

そして一息つくと

「きいな……」

ガッ

気が付くと泰人はディアルの襟首を掴んでいた。

グググッ

「ぐっ、ががが。」

絞まっていた。泰人は明らかにおかしかった。

「た、泰人さん落ち着いて。隊長さんが危険ですよ。」

「………あ。」

フィルディアの言葉に我に返ったのか手を離す。

「す、すまん。……分かった、連れていってくれ。俺の予想が正しければそいつを野放しにはしておけない。」

頭を下げて謝ると連れていくように頼む。

「いえ、僕こそトラウマを呼び起こすようなことを言っておめんどじやあこれを受け取って欲しい。」

そう言っただけで渡されたのはオレンジ色に輝く宝石だった。泰人が受け取るとディアルは説明を始める。

「それは持っているだけで空を飛べる。では僕についてきてください。」

そう言っただけでディアルは飛んでいく。

泰人も宝石を手に飛びたいと願うと飛ぶことができた。

「仕組みは知らないが夢の世界なら何でもありだよな。さて行くぞ。」

泰人もディアルの後に続いていった。

それをリーダーは隠れて見ていたのだった。

「きいになって……まさか!?!」

話を聞いた莉麻が反応する。どうやら知っている言葉のようだ。

「莉麻ちゃん・・・知っているの?」

「・・・多分合ってると思う。恐らくお兄ちゃんを呼んだ人って・・・」

泰人とディアルは目的地についた。その場所とはある拓けた場所でもただっ広く原っぱが続いている。

そこにひとりの男と少女が立っていた。男はニヤニヤと笑っており少女の目には光が宿ってなく普通じゃないとわかる。

「来たか。久しぶりだな、泰人お!!」

男は凄く嫌味つたらしく話す。泰人は目を細めその男と向き合う。そして名前を口にする。

その男の名は

「やっぱりお前だったか。………零渡祇亞^{れいとぎあ}!!」

続く

44・最悪の再会（後書き）

どうでしたか？遂に出ましたね。これからどうなるんですかね？

出会ったこの二人の関係とはなんなのか。泰人が起こした昔の事件が関係していますが詳しくはまた今度に。

さて次回ですが週末を予定しています。また早く投稿できるかもしれません。期待しないで待っていただければ幸いです。

ではまた次回、皆さん元気でお会いしましょう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9267m/>

Mystic world ~ 真実への歩み ~

2011年12月4日02時53分発行